

愛知学院大学

語研紀要

第40巻 第1号 (通巻41号)

論 文

- スモレットの見落としについて
——『ロデリック・ランダム』を中心に——
..... 近 藤 勝 志 (3)
- 吉行淳之介のオイディプス・コンプレックスと
村上春樹のアンチ・オイディプス..... 清 水 義 和 (19)
- 古英語における動詞・不変化詞構文の構造
について..... 石 川 一 久 (49)
- ベケット、迷宮の庭..... 堀 田 敏 幸 (77)
- Language Assessment Literacy
in Theory and Practice Daniel DUNKLEY (103)
- Nathaniel Hawthorne's *The House of the Seven Gables*
and Marshall McLuhan's "Global Village"..... Minoru MORIOKA (119)
- E. M.フォースターの『モーリス』における
「書かれた言葉」の重要性..... 安 藤 洋 平 (141)
- Vorteile und Herausforderung bei Internationalisierung und
internationaler Kooperation auf der Grundlage meiner
Erfahrungen im Deutschunterricht Mai MURAMOTO (165)

翻 訳

- PART II 『愛と嘘とばち』、Musical "Love and Barefaced Lies"
by Kanome Yuki..... Translated by Yoshikazu SHIMIZU (171)
- テス・ギャラガー「レイとテスの
ヨーロッパ旅行記 1987(上)」..... 橋 本 博 美 (207)
- 中世仏語版ローマ七賢人物語A本試訳
——第1話「松の木(arbor)」・第2話「獵犬(canis)」・
第3話「猪(aper)」—— 長 谷 川 洋 (231)

2015年1月

愛知学院大学語学研究所

目 次

論 文

- スモレットの見落としについて
——『ロデリック・ランダム』を中心に——
……………近 藤 勝 志 (3)
- 吉行淳之介のオイディプス・コンプレックスと
村上春樹のアンチ・オイディプス……………清 水 義 和 (19)
- 古英語における動詞・不変化詞構文の構造
について……………石 川 一 久 (49)
- ベケット、迷宮の庭……………堀 田 敏 幸 (77)
- Language Assessment Literacy
in Theory and Practice……………Daniel DUNKLEY (103)
- Nathaniel Hawthorne's *The House of the Seven Gables*
and Marshall McLuhan's "Global Village"……………Minoru MORIOKA (119)
- E. M. フォースターの『モーリス』における
「書かれた言葉」の重要性……………安 藤 洋 平 (141)
- Vorteile und Herausforderung bei Internationalisierung und
internationaler Kooperation auf der Grundlage meiner
Erfahrungen im Deutschunterricht……………Mai MURAMOTO (165)

翻 訳

- PART II 『愛と嘘っぱち』、Musical "Love and Barefaced Lies"
by Kanome Yuki……………Translated by Yoshikazu SHIMIZU (171)
- テス・ギャラガー「レイとテスの
ヨーロッパ旅行記 1987(上)」……………橋 本 博 美 (207)
- 中世仏語版ローマ七賢人物語A本試訳
——第1話「松の木(arbor)」・第2話「獵犬(canis)」・
第3話「猪(aper)」——……………長 谷 川 洋 (231)

スモレットの見落としについて

——『ロデリック・ランダム』を中心に——

近 藤 勝 志

(I) 序

トバイアス・スモレットが創作を試みた18世紀のイギリスはイアン・ワットが⁽²⁾『小説の勃興』(1957)の中で指摘しているように小説の誕生・発展の上で重要な時期である。ダニエル・デフォーはフォーマル・リアリズムによって、サミュエル・リチャードソンは書簡体形式による心理描写によって、ヘンリー・フィールディングはドン・キホーテからの離脱によって小説という形式も趣向も新しい文学形式の確立にそれぞれ寄与したわけである。そんな中、スモレットは彼らよりやや遅れてこの試みに参加する。

スモレットは創作の意図を『カウント・ファゾム』(1753)の献辞と『ロデリック・ランダム』(1748)の序文で克明に宣言している。献辞では開口一番「小説は一幅の絵である」と宣言する。一幅の絵には当然のことながらキャンバス上を縦横無尽に駆け巡りエピソードのつなぎ役としての主人公が必要になる。スモレットが選ぶ主人公はラーサロやジル・ブラスを祖とするピカロ⁽³⁾である。ピカロは卑賤の出であるため社会の遍歴を宿命づけられた存在である。スモレットは18世紀のピカロであるロデリックに英国社会を遍歴させ、その不正・歪みを風刺・糾弾させつつ

実は英国社会の俯瞰図を描こうとしたわけであるが、ここで二つのことに注意したい。第一は、スモレットが本来陸上の旅に対応するピカレスク小説の舞台を海の旅、つまり航海・冒険にまで拡大させたことである。第二は、スモレットが18世紀のピカロの遍歴と「常ならぬ興味ある視点」によって執拗に現前化を試みながら不在化させてしまう事項があるということである。一言でいえばロデリックの叔父で海軍軍人・船乗りであるボウリングに代表される海にまつわるエピソードとか本文中一度も触れられることのない南米在住のロデリックの父ロドリゲス氏の資産形成の問題である。

上述した不在化される問題を考える時に参考になるのがダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)の有名な一節である⁽⁴⁾。寄り道になるがそれをここで紹介しておきたい。それはクルーソーに28年にも及ぶ孤島生活を強いることになった黒人奴隷の売買である。クルーソーのブラジルでの農園経営が大筋まっとうな経済活動に依拠していることは言うを待たないが、それについては他で論じたのでここでは割愛したい。周知のようにクルーソーはどこに居ても、またいついかなる時でも父の説諭「中くらの生活」に甘んじることができない。父のもとを出奔後8年が経過した頃、ブラジルでの農園経営は順調そのものである。農園経営は順調でもクルーソーら農園主は常に労務者不足に悩まされる。当時黒人奴隷の売買はスペイン及びポルトガルの国王の許可のもとに行われる国家的独占事業であったためクルーソーは3人の仲間と秘密裡に奴隷貿易に乗り出す。一行は黒人奴隷を買い入れるためギニアへ向かう途中、暴風により難破する。『ロビンソン・クルーソー』の醍醐味は一人だけ生き残ったクルーソーの28年に及ぶ孤島生活であることに異存はないが、孤島生活の元を正していくと無謀な黒人奴隷の買取りの現前化に気づかされる。一言でいえば、『ロビンソン・クルーソー』という作品は富山多佳夫氏が指摘するよう⁽⁵⁾に海を最大限に活用し領土拡

大に奔走する植民地主義についての強烈な言説を含んだ作品であるということである。同じことが、スモレットの意図の付度はひとまず措くとして、『ロデリック・ランダム』についても言えるのではないかというのが本論の目的である。

(II) スモレットの小説論

まずスモレットの小説論ともいべき『カウント・ファゾム』の献辞から見ていきたい。

A Novel is a large diffused picture, comprehending the characters of life, disposed in different groups, and exhibited in various attitudes, for the purposes of an uniform plan, and general occurrence, to which every individual figure is subservient. But this plan cannot be executed with propriety, probability or success, without a principal personage to attract the attention, unite the incidents, unwind the clue of the labyrinth, and at last close the scene by virtue of his own importance. (Dedication, 2-3)

小説は一幅の多彩な絵であるという点がまず強調される。当然そこに描かれている人物も様々な階層から成り、様々な姿勢を付与される。いずれもウィリアム・ホガースの銅版画を強く意識しつつ同時に劇の時空の制約に対する小説の無限の可能性を強調したものである。また物語の迷路を解く鍵となる主人公の重視も強調されている。主人公は多彩な人物、エピソードを結びつける縦糸の役割を担わされているわけである。主人公への求心性がしきりに強調されているが、それは裏返せば各々独立完結したエピソードの連続が可能ということにもなる。当然周縁人物

およびエピソード毎の結びつきは緩いものになることに通じる。これは主人公であるカウント・ファゾムが絡んだエピソードを自由に組み替えながら際限なく物語を続けられることを意味している。

先述したように、カンバス上を縦横無尽に活動する主人公を描くにはピカレスク小説が最適である。スモレットは『ロデリック・ランダム』の序文の中でピカレスク小説の形式を用いる理由をつぎのように述べている。

Of all kinds of satire, there is none so entertaining and universally improving, as that which is introduced, as it were, occasionally, in the course of an interesting story, which brings every incident home to life; by representing familiar scenes in an uncommon and amusing point of view, invests them with all the graces of novelty, while nature is appealed to in every particular. (3)

あらゆる種類の諷刺の中で、あらゆる事件がピタリ我々の心に訴えるようなそんな面白い物語の中で、思いがけず導入される諷刺ほど面白くかつ教訓に富んだ諷刺は他にないという。ここで第一に指摘できることは、諷刺をより効果的にする手段として面白い物語が利用されねばならないということである。さらに「ありふれた場面を常ならぬ興味ある視点から描くことによってそれらの場面に新奇さの全恩寵を与える」ともいっている。‘entertaining’あるいは‘improving’といった語句は別段スモレットに特有の語句ではなく他の同時代作家に共通して見られる語句である。その意味ではスモレットらしさを強調するのは「不意を打つ諷刺」と「常ならぬ興味ある視点」の強調にあるのではないだろうか。ありふれた場面を最も広範囲にわたって読者に呈示できるのは、主人公の遍歴を軸に物語全体が回転するピカレスク小説の形式である。それがスモレ

ットに特有のものになるのは、そのありふれた場面を常ならぬ視点からとことん見つめれば当然歪みが拡大されて諷刺に通じるということである。ロナルド・ポールソンが指摘するように諷刺の要素はピカレスク小説に内在すると言ってもよい。

諷刺と物語の自然らしさを創作の拠り所とするスモレットが師と仰ぐ先駆者の一人はル・サーージュである。しかしスモレットはル・サーージュとは一線を画さざるを得ない理由をつぎのように述べる。

The disgraces of Gil Blas, are, for the most part, such as rather excite mirth than compassion; he himself laughs at them; and his transitions from distress to happiness, or at least ease, are so sudden, that neither the reader has time to pity him, nor himself to be acquainted with affliction. This conduct, in my opinion, not only deviates from probability, but prevents that generous indignation which ought to animate the reader against the sordid and vicious disposition of the world. (5)

ジル・ブラスの欠点は読者の同情を買うよりもむしろ笑いをさそってしまふところにあるという。それどころかジル・ブラス自身も彼の欠点に笑い興じているというのである。しかも不幸から幸福への転変が急に過ぎるので読者が彼を憐れむ暇がないし、またジル・ブラス自身もその苦悩を噛みしめる余裕がない。これは蓋然性から逸脱するばかりか、邪悪な社会に対する読者の反感を盛り上がらせることができないとして批判しているのである。スモレットが指摘するように地位、身分への執着はまだまだ弱く当然批判・諷刺の矛先も鋭くない。

これに対しスモレットはつぎのように新機軸を出す。

I have attempted to represent modest merit struggling with every difficulty

to which a friendless orphan is exposed, from his own want of experience, as well as from the selfishness, envy, malice, and base indifference of mankind. To secure a favorable preposition, I have allowed him the advantages of birth and education. (5)

経験不足それに世間の自分勝手、羨望、悪意、卑劣な冷淡のために孤児があらゆる困難に立ち向かう様子を描くのだという。さらに読者の好意を引き付けるために、出生と教育の利点を付与するともいう。つまりロデリックは厳密な意味では本来のピカロではなく18世紀型のピカロである。社会の底辺・周縁に生きる伝統的ピカロと異なり、18世紀型のピカロは出生と教育の利点を付与されているため社会参加が可能になるということである。第2作『ペレグリン・ピクル』(1751)の主人公であるペレグリン同様自尊心と怒りが気質の二大要素である。ロデリックはペレグリン同様自尊心に起因する復讐を繰り返す。子供の頃、ロデリックに対し理不尽な仕打ちを繰り返した校長への笞刑とか、アイルランド人のオドネル大尉への復讐はほんの一例である。実はこうした復讐譚が作品の大半を占めているが、ここでは本論のテーマと関係がないので割愛したい。

(III) 海のエピソード

物語は形式どおり第1章はロデリックの系図の紹介から始まる。祖父は地主で治安判事を兼務する地方の名士である。ラーサロ、ジル・ブラスとは比較にならない出自であることがまず知られる。しかし父は祖父の承諾を得ぬまま住み込みの女中(叔父ボウリングの妹)と恋愛結婚をしてしまう。しかし家長である祖父は母方の血筋に不満を持ち二人の仲

を認めない。祖父の冷酷さに父は絶望し出奔、母親は出産後急逝する。名門の出でありながらロデリックは生誕直後から土地を持たない紳士、つまり18世紀型のピカロになってしまう。

荒っぽい復讐譚とか失敗続きのロンドン生活は割愛し、上京後の海軍との関わりから見ていきたい。ロデリックは軍医の試験を受けるため軍医会館へ出かける。12人ほどの委員の前に一人ずつ呼び出され口頭試問を受ける。つぎの引用は口頭試問中に委員との間でなされた遣り取りである。

The first question he put to me was, "Where was you born?" To which I answered, "In Scotland."—"In Scotland," said he; "I know that very well; we have scarce any other countrymen to examine here; you Scotchmen have overspread us of late as the locusts did in Egypt: I ask you in what part of Scotland was you born?" (86)

口頭試問中の遣り取りから審査委員はイングランド人が独占し、下級船医の志願者の大半がスコットランド人であることが明らかになる。試問中、審査員は「いなごがエジプト中にはびこっているみたいに、君たちスコットランド人も最近では私たちの回りにはびこっているんだ」とまで言い出す。さんざん揶揄された後、ロデリックは3級船の第2助手の資格証明書进行をもらう。しかし海軍省にコネを持たない身では採用の目処が立たない。やむなく当座の慰みにフランス人薬剤師のもとに勤め口を得るが、乱脈きわまりない薬剤師の家からも追い出されてしまう。極貧状態に陥ったロデリックは援助を乞いに友人のもとへ出向く途中ロンドン塔付近で10名前後の強制徴募隊に襲われる。ロデリックは奮戦するものの結局頭で大怪我をしたあげくに海軍の徴募用補給艦に乗せられてしまう。海軍はもともとロデリックが試験を受けて資格証明書をもら

っていたところである。有資格者でも海軍につがえないため採用がままならないのにこういう形で海軍の一員に無理やりされてしまう。

いずれにしてもロデリックは海軍の一員になったわけである。つぎの引用は軍医助手の任務を負い1等航海士についてサンダー号の船底に降りた時の病室の惨状である。

Here I saw about fifty miserable distempered wretches, suspended in rows, so huddled one upon another, that not more than fourteen inches space was allotted for each with his bed and bedding; and deprived of the light of day, as well as of fresh air; breathing nothing but a noisome atmosphere of the morbid steams exhaling from their own excrements and diseased bodies, devoured with vermin hatched in the filth that surrounded them, and destitute of every convenience necessary for people in that helpless condition. (135)

各々寝床と寝具にわずか14インチしかあてがわれていない。日光、新鮮な空気も奪われている。逆に排泄物や病める肉体で孵った蛆が巣くう化膿した患部から発生する異臭を呼吸せざるを得ない。新兵の補充は強制徴募で造作もなく果たせるから、役立たずの傷病兵に長生きされては困るという海軍当局の悍ましい発想がそこには見られる。

こうした発想は海軍上層部により顕著である。オーカム艦長とマックシェーン軍医は瀕死の傷病兵の点呼を後甲板で実施する。軍医の診断は冷厳そのものである。肋膜炎で吐血している者に対して血痰の咳き上げ促進と称してポンプ仕事を指図する。彼は半時間もたたぬ間に肺からの多量の出血のため窒息死する。また腹水のため胸を圧迫され呼吸すらおぼつかない者に対し、怠慢と過食による肥満が原因していると弾劾する。その結果またたく間に61名の傷病兵が12名以下に激減する。これを艦長、軍医はともに国家に貢献できたとして自画自賛するわけである。

つぎは海軍の指揮系統の低さについてのエピソードである。西インド艦隊は本来ヒスパニョーラの西端でサンダー号を出迎え糧食等を補給し、敵に作戦、目的地を察知される前に直接カルタヘナへ向かうべきである。しかし艦隊はジャマイカのポートロイヤルに1ヶ月間投錨後合流する。さらに2週間前後も費やして仏艦隊の停泊するヴァーシュ島まで進む。一方仏艦隊は情報艦をカルタヘナに事前に派遣し、西インド艦隊の動向を察知して既にヨーロッパに向け出帆済みである。この海域における有史以来の大艦隊も作戦の下手際から敵の要塞の真下に陸兵を上陸させる。壊滅的打撃を蒙るのは当然すぎることである。

英艦隊とカルタヘナのスペイン軍との戦闘の火蓋がいよいよ切られる。戦いの描写が真に迫る。

We had not been many minutes engaged, when one of the sailors brought another on his back to the cockpit, where he tossed him down like a bag of oats, and pulling out his pouch, put a large chew of tobacco in his mouth, without speaking a word. Morgan immediately examined the condition of the wounded man, and cried out, "As I shall answer now, the man is tead as my great-grandfather."—"Dead," said his comrade, "he may be dead now, for aught I know, but I'll be damned if he was not alive when I took him up."
(159)

戦闘が始まっていくらもたたないうちに水夫が手術室へ仲間を背負って来て、それを燕麦の袋のように放り出す。兵士を下したあと、煙草入れを出し一言も口を利かずに一服するのである。軍医助手が傷病兵の状態を診て「くたばってるぜ」と。——「くたばってるかい、担ぎ上げた時はまだ息があったぜ」と水夫がこたえるのである。傷病兵が燕麦の袋と化す冷血な生命の浪費である。国家的見地からすればカルタヘナ戦役

も英国の海外飛躍の一コマにすぎない。強制徴募した新兵が斃れようが国家は些事には振り向きもせずに前進するのである。

戦闘後、ロデリックは身の振り方を迫られる。出航命令が出たため帰国を期待したものの、西インド諸島における軍医不足という現状、さらに母国での苦難を思い出し残留を決断する。残留を希望したにもかかわらず乗船したりザード号が公文書を海軍省へ持ち帰る任務を負うことになり急遽リザード号とともにイギリスへ向け出帆する。しかし帆走中、艦長が掌砲長提案の水深測定を無視したため船はシリー諸島（イングランド南西部沖合の島）近くで座礁する。何とか上陸した後、今まで虐待され続けてきた艦長に復讐すべく決闘を申し込む。決闘中、勝利をほぼ手にしながら後頭部に背後から一撃を受け身包みはがされた上、サセックスの浜に取り残される。強制徴募で入隊した海軍とは置き去りという形で決別するわけである。

頭に傷を負ったまま置き去りにされたロデリックは助けを求めて浜辺をさまよう。ある婦人の看護のおかげで元気を取り戻し、婦人の推薦で近くに住むセイジリー夫人のもとで召使として働くことになる。召使になったロデリックは夫人宅で夫人の姪のナーシッサ（粗削りなロマンスのヒロインでロデリックの結婚相手）に出会う。ある日、夫人とナーシッサからタッソーの「解放されたエルサレム」の一節につき質問をされた折、教育の利点を付与されているロデリックは何のためらいもなく読み解いてしまう。またナーシッサが婚約相手のティモシー卿に乱暴されるところを運よく救ったりもする。しかしティモシー卿はロデリックの祖父同様その土地の治安判事を兼ねているため、ロデリックに対し逮捕令状を簡単に発行できると聞かされる。ロデリックは仕方なく夜陰に乗じて村から脱出せざるを得ない。このエピソードからこの時代の法制度の不備が前景化されるわけである。

帰国したロデリックは財産目当ての求婚者としてコーヒーハウスとか

劇場通い、賭け事、ロマンスと気ままな生活を送る。そんな中、ロマンスを求めてバースまで出かけた折ナーシッサに再会するが、ナーシッサとのロマンスは不調に終わる。先行きが不安になったロデリックは賭け事に走り、手許金は激減する。当座の生活費に困ったため仕立て屋に借金をしたまま上等な服を数着モンマス街の古着商に半値で売ってしまう。運の悪いことに、売却が仕立て屋に露頭しそれがもとでマーシャルシー監獄へ連行されてしまうが、ギニアから帰国したボウリングが借金を完済しマーシャルシー監獄から救出してくれる。借金を完済後ボウリングは船医の助手としてロデリックを航海に誘う。今度の航海はギニア地方で黒人奴隷を400人買い込みそれを南米のニュースペイン（現在のアルゼンチン）で売りさばくことである。ここでこの物語の冒頭から陰になり日向になりロデリックを助けてくれる叔父ボウリングに一言触れておきたい。ボウリングは死亡したロデリックの母親の兄で海軍軍人とか船乗りを生業としている。つぎの引用は臨終の床についたロデリックの祖父に向けた荒っぽいボウリング流の科白である。

“What! he’s not a-weigh? How fare ye, how fare ye, old gentleman?—Lord have mercy upon your poor sinful soul.”—Upon which, the dying man turned his languid eyes towards us, and Mr. Bowling went on—“Here’s poor Rory come to see you before you die, and receive your blessing.—What man! don’t despair—you have been a great sinner, ‘tis true,—what then? There’s a righteous judge above,—an’t there?—He minds me no more than a porpuss.—Yes, yes, he’s a going,—the land-crabs will have him, I see that; his anchor’s a-peak, i’faith.” (26–27)

上掲引用文の科白や祖父死亡後の科白からボウリングが生粋の海の男であることが強調される。たとえば、遺産相続の目論見が破れたために

失望したロデリックの励まし方はつぎのようである。心軽やかに、薄っぺらな半ズボンで、世界を股にかけようじゃないか、勇気ある少年よ。ボウリングは海の男らしくロデリックを励ますために海へいぎなうわけである。ロデリックは幾度となくボウリングの資金援助により窮境から脱することになるが、その資金がすべて海の生活から賄われていることを忘れてはならない。

(IV) 結論

黒人奴隷については、計画どおりニュースペイン到着後2、3日で全員を売りさばいてしまう。黒人奴隷の売却後ロデリックは「私たちはわれわれの言い値で5倍の数の奴隷だって処分できたであろう」と述懐する。注意したいのは、奴隷に対して憐憫の情を示す者がひとりもないことである。それどころか、船上におけるチフスに似た伝染病騒ぎの時にはつぎのような発言をする。航海中にこれとって特筆すべきことは何もなかったが、ただ突如奴隷たちに広まったチフスに似た伝染病で多くの乗組員が命を失った。その中には私の助手もひとり含まれ、かわいそうにストラップまで命を落とすところだった。さらにロデリックは奴隷売却後「われわれの船は不快な黒人たちから解放されると、私の気分は晴れ晴れとしてきて、心ゆくまでパラグアイの新鮮な空気を胸に吸い込んだ。というのはギニアの海岸を離れて以来実際には私のほうが彼らの奴隷のようなみじめな生活だったのだ。」と述懐する。

奴隷の売却後ロデリックはブエノスアイレスで父との再会を果たす。父はブエノスアイレスではロドリゲスと称し大変な資産家である。ロドリゲス氏は背が高く、極めて体格のよい男で、人に尊敬の念を抱かせる立派な風貌と物腰で、年齢は40歳を超えているようだと言われる。

ロドリゲス氏は亡き妻、息子であるロデリックへの思いは口にするが、莫大な資産形成に触れることはない。ロドリゲス氏が身の上話のさなかに唯一触れるのはつぎの件だけである。南米に定着後、知り合いの貴族から勧められたことは、宗教上の制約のため自分には貿易、商売以外にはすすむべき道がなかったということである。ロデリックやボウリングがロドリゲス氏と再会する直前に黒人奴隷の売買などで大儲けをしたことを思い出せば、ロドリゲス氏の本意はひとまず措くとして、その資産形成に何らかの形で黒人奴隷が寄与した可能性があることは想像に難くない。ここで注意しなければならないことは、この問題に対する登場人物らの姿勢だけでなく作者スモレット自身のそれである。スモレットの姿勢を考える時に参考になるのが第3作目の作品である『サー・ランスロット・グリーブズ』(1762)の第9章に描かれている村の選挙風景である。立候補者はトーリー党のサー・ヴァレンタイン・クイックセットとホイッグ等のアイザック・ヴァンダーベルフトの二人である。前者の政治スローガンは「外国出身者お断り、古き良き英国万歳」である。その支持層は大地主(gentry)である。しかし実情はクイックセット(生垣)という名前に含意されているようにヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』(1749)に登場する地主ウェスタン同様狐狩りに明け暮れる田舎地主に過ぎない。後者の政治スローガンは「奴隷制反対、カトリック僭王反対」である。しかし彼がユダヤ系であることがアイザックという名前に明示されている。彼は既に市長も買収済みであることもほのめかされている。両候補の政治スローガンに中身がないことは彼らの名前とか彼らが立っている演説壇に象徴されている。クイックセットの演説壇はさらし台に厚板を渡したものである。ヴァンダーベルフトは演説が終了すると同時に樽の鏡が割れ一瞬にして支持者の視界から消えてしまう。つまり、この選挙風景から透けて見えることは、当時すでに奴隷制反対という言葉は田舎へも浸透していたということである。にも

かかわらずスモレットがこの問題にさほど関心を怠いていないことは、黒人奴隷の問題を政治スローガンに掲げたこの選挙風景に対し自論を展開しないまま、単に揶揄しているにすぎないことから明らかである。社会の不正への叱声のためピカレスク小説という形式を用いて英国社会の俯瞰図を描いてみたが、黒人奴隷の問題がスモレットの脳裏をかすめることは期待薄のようである。高貴な野蛮人の神話を体現するフライデーが登場する『ロビンソン・クルーソー』ほどの強烈な植民地主義言説とは一味違った言説が『ロデリック・ランダム』の中に揺曳していると言い換えてもよい。

資産家である父との再会を果たせば粗削りなロマンスの大団円に近い。ロデリックは父とともに帰国し、故郷のスコットランドへ向かう。帰郷後判明したことは祖父の遺産を相続した狐狩り好きの従兄が遺産を浪費してしまい、所有地が競売に掛けられることになっているという噂であった。それを知った父は従兄の所有地をすべて買い戻す。父の援助もあり、ロデリックとナーシッサの結婚を機に物語は終結する。

注

- (1) Tobias Smollett, *The Adventures of Roderick Random* (The University of Georgia Press, 2012), *Roderick Random* およびその他のスモレットの作品からの引用はすべて Georgia 版からであり、以下頁数は引用に続けて括弧に入れて示す。
- (2) Ian Watt, *The Rise of the Novel* (University of California Press, 1957) 参照。
- (3) ピカレスク小説については拙論『英国製ピカロの世界』（広島修大論集第18巻第2号、1978年）等を参照した。
- (4) ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』については拙論『『ロビンソン・クルーソーの生涯と数奇な冒険』の世界』（語研紀要第28巻第1号、2003年）等を参照した。
- (5) 富山太佳夫、『文化と精読：新しい文学入門』（名古屋大学出版会、2003

- 年) および『英文学への挑戦』(岩波書店、2008年) から有益な示唆を受けた。
- (6) Charles Dickens, *Sketches by Boz* (Oxford University Press, 1973), Scenes VI 参照。

吉行淳之介のオイディプス・コンプレックスと 村上春樹のアンチ・オイディプス

清水 義和

01. はじめに

村上春樹氏はアメリカのプリンストン大学で、1992年、日本文学を講義した時に、「第三の新人」を講義のテーマに選んだ。「第三の新人」のメンバーには安岡章太郎、吉行淳之介、遠藤周作らがいる。中でも、村上氏の作品で吉行の『砂の上の植物群』に出てくる津上京子を彷彿とさせる作品は「ノルウェイの森」の直子である。

吉行淳之介は『砂の上の植物群』の中で、京子の心身を極めて繊細に彫塑している。ちょうど、ハンス・ベルメールが『イメージの解剖学』の中で表明しているように、吉行が描いた京子の心身描写は造形されている。吉行はベルメールを知悉した澁澤龍彦と雑誌「モダン日本」誌(新太陽社)の編集を通じて交流があった。⁽¹⁾

ベルメールによれば、人間には自分自身ともう一人の自分がいるという。ベルメールは、『イメージの解剖学』で、人間の中にもう一人の自分がいる事を理論化し絵画や人形やエッチングで描いて表わした。ベルメールが自らの作品に表わした女体の中に、何故、男の手が描かれているのか誰もが不思議に思う。けれども、実は、人間の心にはもう一人別の人格が住んでいて、それが、無意識に、女体に入っていく様子を、

ベルメールは絵に描きこんだ。

Progressivement sa réalité physique, à elle, s'impose à la sienne. Le timbre de sa voix, il le surprend dans le timbre de sa propre voix.⁽²⁾

従って、吉行の審美眼は、澁澤龍彦や瀧口修造の審美眼を濾過しているから、主人公の伊木一郎が見ている津上京子の心身描写は男から見た一方通行の視線ではない。というのは、伊木は自身の身体について何も語っていないかのように見えるけれども、京子の皮膚感覚や皮膚の下を流れる血液に対する反応は、同時に伊木自身の皮膚感覚や皮膚の下を流れる感触と敏感に照応し合っているからである。こうして、実は、伊木は京子の心身を見ているのだけれども、京子の身体の反応だけではなくて、伊木自身の身体の反応が呼応し合っている状態を想定しておく必要がある。

仮に、ハンス・ベルメールの『イマージュの解剖学』を度外視して、津上京子と伊木一郎の関係を見るならば、吉行の『砂の上の植物群』にある審美眼はその殆どが消失してしまうであろう。たとえば、ベルメールの『写真集』に描写されたウニカ・チュルンの身体は、同時に被写体となっているモデル自身の心の懊悩を現している⁽³⁾。現に、モデルのウニカ・チュルンは煩悶の末自殺を遂げる。このベルメールとウニカ・チュルンの関係の結末を見てみると、『砂の上の植物群』で京子が抱える悲惨さや、『ノルウェイの森』で直子が遂げる自殺とは極めて微妙なところで繋がっている。

また、ベルメールの『イマージュの解剖学』や『写真集』を解析する事によって、吉行が『砂の上の植物群』で京子の軀を痛めつける描写や伊木一郎が抱える心身の苦悩と何処で合体しているかを解読していかなければならない。更に、ベルメールの『イマージュの解剖学』や『写真

集』を分析する事によって、村上春樹氏が著わした『ノルウェイの森』で、直子が「ボク」（ワタナベ・トオル）との心身の軋轢の末に自殺する過程と繋がっていくプロセスを把握していかなければならない。

そのプロセスを双方の作品を相互に比較しながら、互いの作品を対照させる事によって、村上氏が心身の懊悩を『砂の上の植物群』から読みとり、やがて『ノルウェイの森』で直子の心身の中で再構築していった仕儀を読み解いていく。

02. 吉行淳之介の『砂の上の植物群』

丸谷オーは、「新ハムレット吉行淳之介『砂の上の植物群』」の中で、父ハムレット王の弟クローディアスが殺害し王妃と結婚したことに悩むハムレットと、主人公の伊木一郎の妻が亡き父と関係があったのではないかと悩む類似性を指摘している。更にまた、オフィーリアは『砂の上の植物群』ではバーのホステス津上京子とその妹に分裂して示されていると指摘している。

丸谷オーは、ハムレットの病気に対するイメージと伊木一郎の水に対するイメージが反復されていると指摘する。そして、丸谷は吉行がこのイメージの効果と代償に、「父と子の主題の追及を怠っている⁽⁴⁾」と分析している。ここの場面は、ハムレットが父ハムレットの復讐を怠っていることとの間には類似性が見られる。

O, vengeance!

Why, what an ass am I!⁽⁵⁾

また、ハムレットがオフィーリアに尼寺へ行けと言うのは、『砂の上

の植物群』で、バーのホステス津上京子とその妹に分裂して示されている。

Hamlet. Get thee to a nunnery: (961)

ところで、上野千鶴子氏は、吉行をミソジニー（女性嫌悪、女性蔑視）であると指摘している。だが、ハムレットがオフィーリアを蔑視する件を見ただけでは不十分であるのと同じように、吉行の審美眼がベルメールの『イマージュの解剖学』を濾過した結果の所産であることを見落とすと、吉行の審美眼は、たとえば、唯美主義者のオスカー・ワイルドが書いた『ドリアン・ 그레이の肖像』にある審美主義を見落として、俗悪な変態趣味しか把握出来なくなるだろう。

吉行が名付けた小説の題名『砂の上の植物群』は、パウル・クレーが描いた絵画に由来している。しかも、吉行の小説はパウル・クレーの絵画だけでなく、更にベルメールの『イマージュの解剖学』をダブらせてみると、小説に厚みが加わり、吉行の作品がパウル・クレーの絵画から小説『砂の上の植物群』へと変貌を遂げていくプロセスがはっきりと見える。吉行は、小説『砂の上の植物群』の中で、パウル・クレーが「ポールの上空の雲々」を解説する箇所を取り上げ以下のように述べる。

眼に見える世界は、芸術家にとっては、見えるというその性質のただで汲みつくされはしない。更に進んでイメージに達しなければならぬ。芸術家は（いわゆる）現実を越えて、現実を溶解し、それによって内的リアリティーを、眼にみえるものにしようとする……⁽⁶⁾

更に、丸谷才一は、吉行のイメージについて、「吉行淳之介のやうに情景を提示する」と述べ、イメージを決めるのは論理であると、『文章

読本』の「イメージと論理」の中で指摘している。⁽⁷⁾

吉行のイメージは、江藤淳の「吉行淳之介試論」によれば、吉行が描く情景は、人生から降りた、いわば、休暇中にある病弱の人間が見つめる光景となる。

娼婦の街、男娼の部屋、倒産寸前の会社などというものは、「生活」からおりた人たちの場所である。そこでは時間が停止している。⁽⁸⁾

三浦朱門はエッセイ「隠者の叫び」の中で吉行の異質な世界を遊びの世界として述べている。

吉行はバーでホステスの尻をなでるが、常識的世間から見れば、それは遊びとしか見えないだろう。⁽⁹⁾

この異質な世界とはネルソン・オルグレインが著わした『黄金の腕を持つ男』のフランキーの指先が天才的に微妙に動くのを思い出させる。しかしフランキーは麻薬中毒で指先の器用さを発揮するドラマーにはなれなくて、トランプ賭博で捕まり、独房で、天才的な指先を器用に動かして細紐で自殺する。⁽¹⁰⁾

小説『砂上の植物群』では、伊木一郎は、津上京子が早世した父が母以外の女性に生ませた娘の京子と同一人物だと思いこんでしまう。けれども、小説の後半で、亡父が生前に他の女性に産ませた同じ名前の京子は既に数年前に逝去した事が分かる。実の妹は以前理髪師山田の養女となったが、それ以前の苗字が曖昧である。そこで、山田が京子の氏素性を調査し、遂に養女の苗字を突き止めて、姓が「津上」でない事が分かったのである。

しかしながら、もしも仮に苗字違いの京子が、本当の父の娘であった

と仮定したならば、若くして亡くなった父のように、また早死にした実の妹の如く亡くなったかもしれない。小説『砂の上の植物群』は、唐突に終わってしまうので、結局、津上京子の場合も早世したかどうかは小説に書かれていない。けれども、苗字違いの京子が父の娘京子であったのではないかという疑問はいつまでも残る。言い換えれば、腹違いの妹・京子のイメージが津上京子の身体と心の中で残像として残って離れないのである。

この男女の関係が曖昧なのは、『砂の上の植物群』の中で、最初から仕掛けられていた。伊木一郎は、冒頭で、妻に向って亡父と関係があったのではないかと質問している。というのは、亡父は女性関係に節操がなく、ちょうどギリシア神話のゼウスのようだったからである。伊木一郎の質問に対して妻はきっぱりと否定する。

伊木一郎は横たわったまま、久しぶりに父親のことを思い出していた。彼は眼を開いて、江美子に声をかけた。

「おい、もう言ってもいいだろう。おやじと関係があったのじゃなかったか」

江美子が十七歳の少女の頃、彼の亡父と肉体関係を結んだことがあったのではないか、という疑問である。

「またそんなことを言う。そんなことがある筈が無いでしょう」
(126-127)

けれども、『砂の上の植物群』では、亡父と妻の関係があったかどうかの真偽は、あとで、亡父をよく知る理髪師の山田がそれをきっぱりと否定する。

伊木一郎は、苗字違いの京子が、父の実の娘であった京子ではないことが分かった瞬間、津上京子は血縁関係のある京子としての存在感を一

瞬にして失い、赤の他人になってしまう。だから、伊木の目の前に居る津上京子は、伊木がイメージしていた血の繋がった京子では無くなる。この束の間に、ベルメールが『イマージュの解剖学』で描いたイメージが、津上京子の身体から抜け出ていく様を想像力によって見る事ができる。そのイメージとはベルメールが『イマージュの解剖学』で描いたシンボルと似ている。

つまり、そのイメージとは、伊木が想像した実の妹京子のイメージである。だが、同時にそのイメージは伊木自身の姿でもある。何故なら伊木が実の妹・京子のイメージとして津上京子を思い浮べるのだから、それが虚像だと分かった瞬間、そこには伊木が想像したイメージだけしか津上京子の軀に映っていないことになる。それこそ、ベルメールが女性の軀に描いた男性のイメージと相似形になっているのである。

ジャック・ラカンの『虚像論』によれば、相手の人物を見ている人は、相手の人物から見ると相手の眼の網膜に映っているが、その人自身の眼には、相手の網膜に映っている人自身の姿が見えない。いわば、ベルメールのイメージは、被写体もその被写体を見ている人も両方がセットになっている状態をキャンバスに絵画化している。

伊木の場合、少し複雑なのは、伊木が自分で勝手に作ったイメージで津上京子を見ていることである。映画を例にとるならば、静止画は映像が動いていない状態である。その静止画が動くと、人間の眼は錯覚を起こし、静止画が動画になって動いていると思こんでしまう。

或いは、ピグマリオンは自己愛で自分の理想の姿を模った人形師である。伊木一郎の場合、薄明な妹の京子とは兄妹なのだから、そのイメージとは伊木の分身でありピグマリオン自身でもあった。コッペリウスはコッペリアを作る。そして、コッペリアはコッペリウス自身が作ったイメージである。

アントナン・アルトーの『演劇とその分身』ではドゥーヴルが重要な

手掛かりになるコンセプトである。だから、赤の他人の津上京子と血縁関係のある京子とはいわば「ドゥーヴル」なのであり分身でもある。確かに、赤の他人の津上京子と血縁関係のある京子とは血の繋がりはない。けれども、片割れの京子が逝去して消えて無くなった後では、もはや伊木と津上京子は無関係ではいられなくなる。

実は、『砂の上の植物群』にはもう一つ仕掛けがしてある。やはり、冒頭で、小説の中に忽然と登場した作者の「私」はアダムとイヴの時代に親兄弟姉妹がお互いに関係があったから人類は膨大に増えたと述べる。

アダムとイヴの二人きりしかいなかったとしたら、人間が現在の数にまで増えるためには、親子相姦兄妹相姦の一時期があった筈だ。
(148)

アントナン・アルトーは『ヴァン・ゴッホ』論で、ゴッホはテオであり、父であり、母であり、妹であると論じている。

(11)

Cela veut dire que la mère est père, que c'est la mère qui est le père ...

伊木が妻と亡父の関係を疑ったり、或いは津上京子を異母系の妹だと疑念を懐いたまま、恋愛し合うことに倫理的な罪悪感を覚える。その関係は、オイディプス・コンプレックスに起因するタブーの成せる業であった。

『砂の上の植物群』の重要なテーマは、伊木が語るように、若くして亡くなった父が妻に嫉妬した揚句、妻に仕掛けた復讐の罠であった。オイディプスの悲劇にあるように、オイディプスは、父ラーイオスとは知らず父を殺し、また母イオカステと知らず結婚し子どもを授かる。そ

のような神託がテーパーにくだった。神託の予言通り、オイディプスは父を殺したばかりでなく、母とも交わってタブーを犯し、亡父の呪いに復讐される。

或いはシラーの『ドン・カルロス』には父殺しのテーマがあるが、ドストエフスキーはシラーの『ドン・カルロス』に受けた作品『カラマゾフ兄弟』⁽¹²⁾があり、父殺しがテーマになっている。

伊木にとって、亡父の復讐という仮定は、伊木の妄想によって膨れ上がった。しかし、伊木の苦悩が終わって平安を得ると、今度は、亡父は伊木と代わって伊木の心身の中で成長し始める。

吉行は生来アレルギー体質で喘息持ちであり結核患者でもあったので、絶えず、死と隣り合わせて生きた。だから、『砂の上の植物群』の中に描かれるもう一人の異母の妹であった京子の儂い命は、他人事ではなかった。

伊木は、津上京子を亡父が異母に生ませた妹の京子だと信じていた。けれども、苗字違いの京子は、血の繋がっていた京子が既に亡くなっていたことが判明したとき、摩訶不思議なことに、亡くなった京子と生きている京子とが重なり「ドゥーヴル」になった。

確かに、伊木の思い違いは明示され、間違いだったことが判明するが、それにも拘らず薄明な妹の存在は、生きている津上京子の前で陽炎のような存在になっている。こうして、この二人の京子は、アントナン・アルトーが『演劇とその分身』で説いた「ドゥーヴル」を表していることになった。⁽¹³⁾ここのところは、『ノルウェイの森』の直子の死とレイコとが無関係ではなかったことを示している。たとえば、心の病を抱えた直子を看護していたレイコは、直子が自殺した後、直子の代わりになって、「ボク」(ワタナベ・トオル)と共にして一日だけであるが体と心を交差させる。いわば、レイコは死んだ直子でもある。何故なら、レイコは血の繋がりはないけれども、亡くなった直子をいちばん身近に居て心を通

わせていたからである。

伊木が津上京子を血縁のある京子とずっと信じていた時、苗字違いの津上京子は赤の他人ではなくて血の繋がった京子であり続けた。だが、伊木が、眼の前に居る京子が赤の他人で苗字違いの京子であることを知った時、血の繋がった京子と信じていたイメージは突然消えて無くなる。

従って、伊木にとって、眼の前に居る京子は確かに血縁関係のない京子であるが、少なくとも、伊木は血が繋がっていると信じていた間中ずっと、亡父の娘である京子であり続けた。

この関係は、一見すると『ノルウェイの森』の直子と「ぼく」の関係と真逆で全く異質に見える。だが、『砂の上の植物群』では、伊木にとって、死んだ実の妹の京子と眼の前に居る赤の他人の京子は、『ノルウェイの森』では「ぼく」にとって、死んだ直子と眼の前に居るレイコとの関係と同じであることに変わりはない。

複雑なのは二人の京子のダブルイメージだけではない。更に、京子には妹の明子がいる。だが、この姉妹の性格は正反対に見える。ところが、この姉妹は合わせ鏡のように互いに似ている。伊木一郎は津上京子に向けて次のように告白する。

「いま、きみはそっくり同じ顔をしている」

「え？」

不意に、京子の軀の波動が停まった。

「きみと明子と、そっくり同じ顔だ。さっきまで違う顔だったのに、同じ顔になってしまった」(115)

この場面は、シェイクスピアのドラマ『十二夜』の第五幕第一場で、ヴァイオラとセヴァスチャンの二人の兄妹が向かい合う時、ちょうど二人の間に眼に見えない自然界の鏡が置かれ、二人でありながら、一人で

もあるかのように双子の兄妹のように二人は似ているようになる。

Duke. One face, one voice, one habit, and two persons,
A natural perspective, that is and is not!⁽¹⁴⁾

シェイクスピアが作劇したドラマ『間違いの喜劇』には双子が登場する。だが、『十二夜』では同じ双子でも、ヴァイオラが男装しているが、兄と妹の双子で姿と形が幾分違う。しかしよく見ると似ている。ちょうどヴァイオラとセヴァスチャンのように、京子と明子は性格も違うがよく見ると似ているのである。

『ノルウェイの森』では、死んだ直子やレイコと、性格が正反対な小林緑とが最初違うように見える。だが、最後に、三人が、メヴィウスの輪のように関連し合い、摩訶不思議なことに、この三人が少なからず互いに似ていることが分かる。

一見、複雑そうに見える二人の京子と明子の関係も、直子とレイコと小林緑との関係を考え、メヴィウスの輪を当て嵌めてみると、お互いに関連している事が明らかになる。更に、ベルメールが『イマージュの解剖学』で描いたイメージを当て嵌めて想定するならば、吉行の『砂上の植物群』と村上氏の『ノルウェイの森』との間に関連しあったアイデアが浮かび上がってくる。

さて、『砂上の植物群』は、先ずオイディプス・コンプレックスのテーマで始まる。次いで、この小説は推理小説のスタイルをとっていく。ところが、作者伊木一郎の推理が上手く機能せず忽ち頓挫してしまう。その間に、伊木一郎は京子の妹・明子と会い、明子から姉を痛めつけて復讐して欲しいと依頼される。やがて、伊木は京子と会い妹の依頼を実行する。こうしてみていくと、作者伊木一郎の推理小説ともう一つ別の小説とは平行していくのではなくて、次第に分離していくのである。こ

ここで、今一度『砂の上の植物群』を整理して纏めてみると、小説の枠組みとして見た場合、推理小説仕立てのスリラーに、全く別の物語が展開していくことが明らかになってくる。

更に、全く別仕立ての物語では、夕陽の赤い色が重要な役割を果たしていることが、やはり次第に明確になっていく。

スリラー小説と別仕立ての物語に加えて、もう一つ、この二つの小説の構造にパウル・クレーの絵画『砂の上の植物群』が加わることになる。スリラー小説と別仕立ての物語に、パウル・クレーの絵との関係を繋ぐのは赤い色の夕陽である。

買って来た画集を開いた。その瞬間、彼はおもわず身構える姿勢になった。開いた本の上で、夕焼けが真赤に燃えていた。(185-186)

この赤い夕陽が象徴するのは血の色であり、また真っ赤に染める赤い色は、伊木一郎の父が若くして死んだ符牒を象徴していて、こうして巡り巡って、夕陽の赤い光線が伊木の身体全体を刺し貫く。

また、この赤い色は、オイディプスが生みの父とは知らずに殺害し、母とも知らず交わる血縁の血の色を象徴的に現している。つまり、この赤い夕陽は、亡父が夕陽となって伊木一郎を刺し貫くシンボルとなった槍として機能している。

ギリシア悲劇では、オイディプスは母と交わり近親相姦の罪を犯す。『砂の上の植物群』では、伊木一郎は、母ではなくて、父が他の女性に生ませた娘と交わる。

パウル・クレーの絵画『砂の上の植物群』に夕陽があたるとき、比喩的に見れば、絵に血が沸き起こる。

夕陽は亡き父が伊木一郎に投げつけた槍を象徴している。夕陽が何故伊木一郎を貫くかといえば、亡父は若くして死んだので、父の死は嫉妬

の象徴として夕陽のように拡散していく。夕陽の拡散は、同時に亡父が数知れない女性と関係したイメージを現している。譬えであるが、アダムとイヴの時代から始まって多くの人間が誕生していく過程をイメージすると、亡父の振る舞いは、無意識のうちに子孫を残したいという欲望を象徴していることになる。

けれども、伊木一郎は最初津上京子と血の繋がりががあると信じていたが、結局京子とは血の繋がりがなかったことが判明する。だがその後、伊木は京子との関係をどうすればよいのかという新たな問題が起こる。

この三日間は、彼は津上京子を自分の妹と信じ込んでいた。三日間のどの時刻を取り出してみても、そこには彼の陰惨ともいえる決意があった。そのために、一種異様な充実が齎されていたのである。(191)

特に伊木と血の繋がりがあった京子は数年前に死んだとなれば、亡父が異母の妹と近親相姦の罪を犯すことになるという呪いは意味が無くなってしまふ。

同一人物ではなかった、としたとき、やはり彼は深い安堵を覚えた。と同時に、彼の充実に似た姿勢が崩れ去ってゆくのを感ぜないわけにはいかなかった。(191)

吉行は、オイディプス・コンプレックスを母との関係ではなく、異母の妹との近親相姦にずらして顕在化させてみせた。更に、ベルメールが『イマージュの解剖学』で、男が女性の身体に入り込むイメージを絵画として表したように、吉行は異母の妹・京子のイメージを赤の他人の京子の肌を描いてみせた。

確かに小説『砂の上の植物群』は、作家吉行の妄想の上に成り立って

いる。だが吉行の亡父吉行エスケは自身が前衛作家で辻潤、清沢清志、高橋新吉らと交流があり、実際多くの女性と数知れない恋愛関係があった。従って、吉行が幼いころから亡父の女性関係に悩まされて育ったことはフィクションとはいえ『砂の上の植物群』に濃厚な影を落としている。エスケは女性遍歴が数知れず多かったのだから、吉行の思い過しは完全なフィクションとして簡単に片付けられないのである。

ハロルド・ピンターはドラマ『昔の日々』の中で「起こらなかったことも起こったことのひとつだ」と台詞を書いている。

ANNA: There are some things one remembers even though they may never have happened. There are things I remember which may never have happened but as I recall them so they take place.⁽¹⁵⁾

ピンターは、生の現実だけでなく、死んだ物にも霊気が漂い、また現実にはない光媒体の無機質な映画を見て感動したり、夢なのに現実の出来事よりも驚愕したりすることを事実以上にリアリスティックに描いてしまった。

吉行が告白した病んだ心身の描写は、間欠泉のように、死んだ物でしかない世界を生气で漲らせる。『砂の上の植物群』の結末で、伊木一郎は、夢から目覚めた生人間のように生气が無くなっている。むろん、相手の京子は、ちょうどアルベール・カミュが『シジフォスの神話』で描いているように目覚めた寝台に見知らぬ女性が眠っている時に懐く不条理を指している。

De même qu'il est des jours ou sous le visage familier d'une femme, on retrouve comme une étrangère celle qu'on avait aimée il y a des mois ou des années, peut-être allons-nous désirer même ce qui nous rend soudain si seuls.⁽¹⁶⁾

伊木一郎は、シジフォスが不条理な岩を山の麓から頂上まで転がしたように、亡父の復讐から立ち直ろうと決意する。

そのとき、虚空から彼の耳に声が聞こえてきた。

「勘違いするな、三十四歳で終わった俺の人生のつづきを、お前に引継がせているのだ」(195)

従って、吉行は、決して上野千鶴子氏が批判するようなミソジニーではなくて、オイディプスの悲劇が小説『砂の上の植物群』の背景で大きく機能しているのだ。

03. 村上春樹の『風の唄を聞け』

村上春樹氏が著した『風の唄を聞け』と『ノルウェイの森』に共通してみられるテーマは女性の不可解で謎に満ちた自殺である。ゴリーキーの『どん底』では役者が首吊って死ぬ。状況は異なるが、ベルメールの伴侶ウニカ・チュルンも自殺する。

村上春樹氏は『風の歌を聞け』の中で、サリンジャーが『ライ麦畑で捕まえて』に示した心の闇を自作の小説に採り入れた。けれども、サリンジャーとは異なるところがある。その相違点は、主人公の少年「ぼく」のほうではなくて、むしろヒロインのほうが能動的になって自殺を遂げてしまうことだ。また、『風の歌を聞け』の語り手の「ぼく」は、ミシュレの魔女を引用して、魔女自身が自死を遂げる例を挙げている。因みに、ミシュレは『ジャンヌ・ダルク』論でジャンヌを殉教者として描いている。

『風の歌を聞け』では、「ぼく」の相手となった三番目の女の子は、大

学の図書館で知り合った仏文科の学生で、翌年の春休みに林で首を吊って自殺する。

かつて寺山修司は三島由紀夫の自死についての批評で「他者を殺害する行為と自死とは同じだ」と論じた。⁽¹⁸⁾ もしも、寺山の考えを『風の歌を聞け』に当て嵌めるなら、3番目の女の子は、自死を遂げたのだから、彼女は文字通り人を殺すように自分自身を殺害したことになる。仮にそうだと仮定するならば、女の子には殺意があったわけだから、場合によっては、女の子の方が「ぼく」を殺害した可能性が出てくる。或いは、ここで、もうひと捻りして、語り手の立場を逆転してみたらどうなるか。つまり、語り手の「ぼく」の方が言葉で女の子を殺した行為はどうなるか。となると、「ぼく」の方が三番目の女の子を言葉で殺害したことになりはしないか。

村上氏は、『風の歌を聞け』の「あとがきにかえて」の中で、「ぼく」はハートフィールドの自殺を書いている。ところが、あとがきを書いている「ぼく」は村上氏である。従って、本文の「ぼく」とあとがきの「ぼく」とは人格が異なる。つまり二人の「ぼく」は相異なるキャラクターである。フィクション『風の歌を聞け』の中の「ぼく」と、解説を書いている「ぼく」は同人物ではない。しかし、実は、ハートフィールドはフィクションだから、リアルな村上氏と異なり、ハートフィールドは物語に登場する人物にすぎない。となるとハートフィールドの自殺は作者の生みだした妄想なのだろうか。たとえば、ハムレットが殺したホレイシヨウの死体が舞台から消えてしまいどこにもない。結局、ハートフィールドの自殺も村上氏が心の悩みを紡いで編みあげた虚構であったことになるのだろうか。

亀山郁夫氏は「『悪霊』神になりたかった男」所収の「テキスト「告白」(ドストエフスキー『悪霊』より)」の中で、スタヴローギンの心理を綿密に辿って翻訳している。スタヴローギンは、マトリョーシャが自殺す

るのを予感しながら阻止しなかったことで、後になってから苦悩する。⁽¹⁹⁾ いっぽう、村上氏は、『風の歌を聞け』の中で「ぼく」は三番目の女の子が自殺した後になって事件の顛末を語る。しかも、村上氏は三番目の女の子の苦悩を、マトリョーシヤの苦悩ほど微に入り細に入り描いていない。この点ではスタヴローギンと「ぼく」は全く違う人格である。けれどもマトリョーシヤが自殺した後でスタヴローギンがマトリョーシヤの死を確認する状況を見つめ、それからもう一度『風の歌を聞け』で三番目の女の子が自殺した状況と重ねると奇妙な類似点があることに気がつく。まず、スタヴローギンは意識的に、そして「ぼく」の方は何の前触れもなく、女性友達の自殺と遭遇する。ドストエフスキーが語るように、キリスト教ではなく、異端で全能なる神は、善も悪も知る悪霊の視点があり、そこどころが、スタヴローギンと「ぼく」は異なる。次いで見方を変え、神聖なる愚か者「ぼく」の観点から見ると、スタヴローギンと「ぼく」はある一面で似ている。更に、完全な叡智の全能なる神でなく全能なる悪霊でもない、いわば、善と悪が不分明な無垢な子供を想定してみると、村上氏の「ぼく」は如何なる規範にも囚われずに行動していることが分かってくる。この点で、少なくとも、スタヴローギンと「ぼく」は、如何なる規範にも囚われずに行動するところは互いに似ている。それでいながら、スタヴローギンと「ぼく」は、似て非なるものでもある。スタヴローギンの場合は抑圧や道德の倫理感で苦しむ。いっぽう、「ぼく」は旧時代的な道德や倫理観に拘束されない。ここに、村上氏の「ぼく」がドストエフスキーのスタヴローギンよりも新しい時代人であることが判明する。

村上氏は、『風の歌を聞け』の中で「ぼく」の心に浮かぶ闇の根源を着きとめようとしている。後年、村上氏が著わした『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』の多崎つくると「ぼく」を比べて両者の痕跡を辿ると、既に『風の歌を聞け』には「ぼく」が見つけている闇がみえ

てくる。

04. 村上春樹の『海辺のカフカ』

村上氏が表わした『海辺のカフカ』は、父殺しのオイディプス・コンプレックスが描かれている。カフカ少年は直接父殺しに関与していないが、自分が父を殺したと思っている。カフカ少年はパラノイアで心身を喪失しているわけである。だが、それだけでなく、アントナン・アルトーが『ヴァン・ゴッホ』で展開している論述によれば、ゴッホは弟のテオであり、両親であり妹であるという。この考え方を敷衍すれば、カフカ少年の父殺しは、一概に精神病患者の戯言とは言い切れないのである。

カフカ少年が若返った母と恋愛感情を懐くのは、オイディプス・コンプレックスを想起させる。先に、『砂の上の植物群』で述べたが、伊木一郎が、母ではなく、異母の妹であると信じた津上京子と愛し合う。『砂の上の植物群』は伊木一郎の妄想が前提になっている。だが、カフカ少年は、間接的に父を殺して、母のような女性と愛し合う。ところが、カフカ少年が対峙している世界はそれ自体掴みどころのない夢の世界を表している。カフカ少年はその夢のような世界の中で生活している。

吉行淳之介の時代はデジタルの映画やアニメーションもなかった。だが、村上春樹氏が生きている時代は、ジェームズ・キャメロン監督が製作した『アバター』のように、現実とバーチャルな世界の間を線引きするのが難しくなった世界であることを想定しなければならない。村上氏が創作する時代は世界が仮想現実化し、アニメーションやゲームによって倫理観が希薄になり、殺人もゲーム感覚で見ようになり、リアルな現実が益々希薄になって来た。その意味では村上氏は2010年代のサブカルの時代を克明に描いていることになる。

05. 『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』

村上春樹氏は『アンダーグラウンド』や『約束された場所で』で、1995年3月20日に起きたサリン事件を被害者と加害者の双方にインタビューした。『アンダーグラウンド』の序文とあとがきや『約束された場所で』の河合隼雄との対談を合わせて読むと、村上氏が『ねじまき鳥クロニクル』のノモンハン事件や『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』のSF小説の中で、地下鉄が走る地下壕に建設されたテロ組織を描き、その後で、現実に関東で起きたサリン事件を究明しようとしたことが明らかになる。こうして、村上氏の描いたSF小説とドキュメンタリーは繋がりがあることが次第に浮き彫りになる。

従って、何故、村上氏が、サリン事件のドキュメンタリーを纏める為に、多くの被害者やオウム真理教の信者と大幅にインタビューを行ったのかは、『ねじまき鳥クロニクル』と『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』を『アンダーグラウンド』や『約束された場所で』と合わせて読むと、その背景となっている日本の歴史文化の謎が氷解する仕組みとなっている。

トマス・ピンチオンは『V.』を、SF風に小説に著したが、村上氏の『ねじまき鳥クロニクル』や『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』のようなSF小説と『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』のドキュメンタリー性を合わせ備えたような小説とをセットにして描いてみせた。村上氏の新機軸は、『V.』と異なって、フィクションとドキュメンタリーとを総合し、いわば現実と仮想現実とをワンセットにして近代日本の精神史を表したことだ。

06. まとめ

村上春樹氏が描いた『ノルウェイの森』の直子や『海辺のカフカ』で描いたカフカ少年は、生の現実ではなく、ハロルド・ピンターが脚色化した『昔の日々』でアンナが「起こらなかったことも起こったことのひとつ」と表白する異次元に住む住民たちである。吉本隆明が論じているが、「昔は考える時間が多くて長かった。だが現代では人々は忙しくて充分考える時間をとれなくなり、ますます短い時間で創作活動をやり過ぎている」という。現代ではゲームの遊戯装置がコンパクトになり何処へでも持ち運びが可能になり、誰もが簡単に長時間仮想世界にのめり込み、自分で考えることがなくなり受動的になった。かつて、ゴヤは「理性の眠りは怪物を生む」（『カプリチオス（気まぐれ）』No. 43）と題して寓意画を描き世界に警告を発した。

人々は長時間考えなくなると心が病む。たとえば、バルザックは『浮かれ女盛衰記』でヴォートランが「独房の囚人は痴呆状態になる」と綴っている。村上氏は日本全体がホブズの論じるような牢獄となりそこに心を病んでいる人々が群がっている状況を示し、『アンダーグラウンド』では、サリン事件のルポタージュを通していわば日本版『リヴァイアサン』を著した。

漱石は、『草枕』でインターネットやアイフォーンが未だなかった時代に、軍国主義が巨大化していく状況を敏感に感知し、いち早く近代の産業化時代を予知した。その為に、神経衰弱に陥り、胃潰瘍を併発させて孤独の世界に迷い込み、『心』や『明暗』を執筆した。確かに漱石の小説は明治時代が時代背景として描かれ、近代日本社会で既に失われてしまった過去に縛り付けられている。だが、明治時代の描写とは反比例するように、漱石の心の闇は底なしの闇の中に堕ちていった。漱石は、近代化の波にも過剰でしかも敏感に反応していた。だからこそ、漱石の

孤独感は2010年代以降になっても生き続けているのである。

村上春樹氏が描いた『ノルウェイの森』の直子や『海辺のカフカ』で描いた「僕」、田村カフカ少年は、漱石の小説『心』や『明暗』の闇が深いように、底なしの穴に吸い込まれていく恐怖感を掻き立てている。

吉行淳之介の小説『砂の上の植物群』はパウル・クレーの世界を心身で病む人の視線で敏感にとらえている。更に、吉行は絵画『砂の上の植物群』に赤い夕陽を照射し、ベルメールの『イマージュの解剖学』へと変貌させて心を病む悪夢の世界を夕陽に換喩して浮き彫りにしてみせた。

吉行淳之介とねむの木学園の関係は、吉行が創作で行き詰まっていた時、知的障害者が描く絵に触発されて描いた小説によって新しい文学の地平が拓かれた。因みに、ねむの木学園の児童が描く絵は、クラシック音楽関係者も触発されレコードやCDの表紙に使われている。パウル・クレーの前衛絵画は宮城まり子氏が園長のねむの木学園の児童が描く絵へと繋がっていく。

吉行が著わした『暗室』は『砂の上の植物群』の変奏曲で、鬱状態に陥った男の中田修一が死を意識しながら辛うじて夏枝や多加子やマキらと恋愛を繰り広げる。浦山桐郎監督が撮った映画『暗室』では、夏枝が結末で知的障害を持つ弟を介護する場面で締めくくっている。『暗室』を小説と映画をワンセットにして見ると、純文学小説家の吉行だけでなく、鬱病患者の吉行の心の病が闇の底から浮かび上がってくる。

この吉行と浦山桐郎のコラボレーションから発展した小説や映画が村上春樹氏の『ノルウェイの森』の直子や『海辺のカフカ』のカフカ少年の心の闇にも顕著に見られ、一種の変奏曲として吉行の影響を具に見ることが出来る。

村上氏の小説は2010年代に至る世相を描いて、先の見えない、また予測の出来ない状況を捉えて小説に描いている。吉本隆明が述べたよう

に、昔は創作に費やす時間が長かったが、現代は仕事に忙しくて創作にかける時間は限られている。吉本とほぼ同時代人であった吉行淳之介は目まぐるしい現代生活に逆らって、自らの病や鬱病と闘いながら『暗室』を書いた。村上氏は『アンダーグラウンド』に象徴される現代の日本社会で生活する人たちが、サリン事件に巻き込まれながらも、病と仕事の両方に板挟みになって、忙しくて慌ただしく生きていく姿を描いた。まさに、現代の労働者は過重労働で睡眠不足になり慢性の鬱病にかかっている。こうして村上氏は時代の最先端に居る若い世代の心の闇をドキュメンタリー・タッチで活写し病める社会の全貌を浮き彫りにしたのだ。

ひるがえって、1970年代以降の世相を、吉行は持病の為鬱病を併発して苦しみながら生きる市井の人たちを書いた。漱石は戦前日本が戦争に突き進む狂信的な軍国主義の中で、心を病み胃潰瘍で苦しみながら『心』や『明暗』を執筆した。漱石にしても吉行にしても元々体の弱い文人たちであった。村上氏は漱石や吉行と比べ、健康について不平を言わず、次第に磨滅していく現代日本の病める人間像を堅実に造形化している。従って、村上氏は、漱石や吉行と同じように心の闇を書いたが、同時に漱石や吉行と異なって、あくまでも、情報の洪水の中を漂流している現代人を丸ごと客観的に造形してのけたのである。

村上氏や吉行淳之介や漱石の創作に一樣に見られるのは、いわばシラーの『ドン・カルロス』の如く、父殺しによって世界が無秩序になり、人々は舵を失った舟に乗って洪水の海を漂流する光景である。世界は機械が支配し、人々は過剰な情報の泥海の中で一樣にパラノイアに陥っている。漱石は近代の軍事的な機械産業を予感したが、村上氏は機械化によってドゥルーズの『アンチ・オイディプス』を想定して、母胎回帰が出来ない人たちの懊悩を描いた。吉行はオイディプス・コンプレックスと闘いながら亡父の負の遺産を受け継いでいく。けれども、村上氏は父すら見いだせずしかも母胎回帰の見えない底無し沼へと墜ちていく。村

上氏の新機軸はドゥルーズの『アンチ・オイディプス』を乗り越え、吉行の世界へと立ち帰り新しい地平を切り拓いたところに見てとれる。漱石は日進日露戦争を、吉行は第二次世界大戦を見すえていたが、村上氏はノモンハンからサリン事件まで時代を横断的に見すえ、混沌とした状況を創作し続けている。それは村上氏が自らの創作によって、漱石や吉行淳之介の小説を解読し、2010年代に流れこむ混沌とした激流の中からそのエッセンスを読みとろうとしている姿勢からはっきりと感知出来るのである。

注

- (1) 吉行淳之介「昭和二十三年の澁澤龍彦」(『澁澤龍彦』新文藝読本、河出書房新社、1993)、29-31頁。
- (2) Bellemer Hans, *Petite Anatomie de l'image* (Editions Allia, 2008), p. 36.
- (3) Cf. Bellemer Hans, *photographe* (Filipacchi Centre Gerges Pompidou, 1983), pp. 117-127.
- (4) 丸谷才一「新ハムレット吉行淳之介『砂の上の植物群』」(『遊び時間』大和書房、1977)、211頁。
- (5) *The Complete Works of William Shakespeare* (Hamlet Act 2 Scene 2 Spring Books 1972), p. 959.
- (6) 吉行淳之介『砂の上の植物群』(新潮文庫、1980)、186頁。
- (7) 丸谷才一「イメージと論理」(『文章読本』中央公論社、1995)、205頁。
- (8) 『江藤淳著作集2 作家論集』(講談社、1967)、111頁。
- (9) 三浦朱門「隠者の叫び」(『群像』講談社、1977.2)、278頁。
- (10) Algren, Nelson, *The Man with the Golden Arms* (Seven Stories Press, 1990), p. 142.
- (11) Cf. Artaud, Antonin, *Oeuvres Complètes VII Héliogabale* (nrf Gallimard, 1967), p. 20.
- (12) 亀山郁夫『ドストエフスキー父殺しの文学(上)(下)』(日本放送協会、2004) 参照。
- (13) Cf. Artaud, Antonin, *Le Theatre et son Double* (Idees/gallimard, 1964)

- (14) Shakespeare, William, *Twelfth Night* (Kenkyusha, 1993), p. 98.
- (15) Pinter, Harold, *Old Times (Complete Works: Four)*, Grove Press, Inc., 1981), pp. 27–28.
- (16) Camus, Albert, *Le Mythe de Sisyphe* (nrf Gallimard, 1942) p. 29. Camus, Albert, *The Myth of Sisyphus* translated by Justin O’Brien (Penguin Modern Classics, 1975) p. 20. Just as there are days when, under the familiar face of a woman, we see as a stranger her we had loved months or years ago, perhaps we shall come even to desire what suddenly leaves us so alone.
- (17) 村上春樹『風の歌を聴け』(講談社文庫、1997)、82頁。
- (18) 寺山修司、野坂昭如「三島以後のエロス」(『それは三島の死に始まる』)、47頁。
- (19) 亀山郁夫『『悪霊』神になりたかった男』(みすず書房、2001)

参考文献

- Yoshiyuki, Junnosuke, *The Dark Room* Translated by John Bester (Kodansha International, 1975)
- Yoshiyuki, Junnosuke, *Toward Dusk and Other Stories* Translated by James Dorsey (Kurodahan Press, 2011)
- Bellemer Hans, *Petite Anatomie De L'image* (Editions Allia, 2008)
- Alexandrian, Sarane, *Hans Bellemer* (Rixxoli, 1972)
- Fitzgerald, F. Scott *The great Gatsby* (Penguin, 1967)
- Chandler, Raymond, *The Long Good-Bye* (Penguin, 1976)
- Salinger, Jerome David, *The catcher in the rye* (Penguin, 1966)
- Bataille, Georges, *La pratique de la joie devant la mort* (Mercure de France, 1967)
- Bataille, Georges, *Madame Edwarda — Le mort Histoire de l'oeil* (Jean-Jacques Pauvert, 1967)
- Murakami, Haruki, *A Wild Sheep Chase* (Vintage, 2003)
- Murakami, Haruki, *After Dark* (Harvill Secker, 2007)
- Murakami, Haruki, *Norwegian Wood* Translated by Jay Rubin (Vintage, 2003)
- Murakami, Haruki, *Sputnik Sweetheart* Translated by Philip Gabriel (The Harvill Press, 1999)
- Murakami, Haruki, *The Wind-up Bird Chronicle* Translated by Jay Rubin (The Harvill Press, 1998)

- Murakami, Haruki, *Underground* (The Harvill Press, 2000)
- Murakami, Haruki, *Underground: The Tokyo Gas Attack and the Japanese Psyche* (Panther) Translated by Alfred Birnbaum (Random House, 2001)
- Murakami, Haruki, *Kafka on the Shore* (Vintage, 2005)
- Murakami, Haruki, *Dance Dance Dance* (Vintage, 2007)
- 澁澤龍彦『ファンム・アンファンの楽園 澁澤龍彦ベルメール論集成』(ガレリア・アミカ、2001)
- Unica Zurn et Hans Bellemer『ユニカ・チュルン ハンス・ベルメール』森今日子、多賀邦臣、岡田邦雄編 (アーツスペース美蕾樹、1992)
- Unica, Zurn, *Hexen Texte* ユニカ・チュルン『魔女文書—アナグラム詩とデッサン—』宮川尚理訳 (ガレリア・アミカ、2001)
- 『メゾン・ブランシュでの休暇 ユニカ・チュルン遺稿集』宮川尚理訳 (ガレリア・アミカ、2001)
- ベルメール、ハンス『イメージの解剖学』種村季弘、瀧口修造訳 (河出書房新社、1992)
- アレクサンドリアン、サラヌ『ハンス・ベルメール』澁澤龍彦訳 (『骰子の7の目』河出書房新社、1974)
- サヤグ、アラン『ハンス・ベルメール写真集』佐藤悦子訳 (リプロポート、1983)
- 吉行淳之介、『砂の上の植物群』(新潮文庫、1980)
- 『吉行淳之介全集』第一巻～第十七巻、(講談社、1984)
- 『吉行淳之介全集』別巻1～3、(講談社、1984)
- 吉行淳之介『夢の車輪パウル・クレーと十二の幻想』(文藝春秋、1983)
- 吉行淳之介『詩とダダと私と』(作品社、1979)
- 吉行淳之介『詩とダダと私と』(講談社、2010)
- 吉行淳之介『街角の煙草屋までの旅』(講談社、2009)
- 吉行淳之介『夕暮まで』(新潮社、1982)
- 吉行淳之介『原色の街・驟雨』(新潮社、2012)
- 吉行淳之介『娼婦の部屋・不意の出来事』(新潮文庫、新潮社、2002)
- 吉行淳之介『花束』(中公文庫、1975)
- 吉行淳之介『鞆の中身』(講談社、1990)
- 吉行淳之介『星と月は天の穴』(講談社、1989)
- 吉行淳之介『暗室』(講談社、1988)
- 吉行淳之介『浮気のすすめ』(新潮社、1960)
- 吉行淳之介『珍獣戯話』(毎日新聞社、1982)

- 吉行淳之介『あの道 この道 いろの道川柳選』(光文社、1986)
- 吉行淳之介『夢・鏡・迷路』文学談義(潮出版、1981)
- 吉行淳之介『夢を見る技術 わが文学生活1975～1977』(潮出版、1982)
- 吉行淳之介『石膏色と赤』(講談社、1976)
- 『吉行淳之介自選作品Ⅲ』(潮出版、1975)
- 吉行淳之介『やややはなし』(文藝春秋、1992)
- 吉行淳之介『エアポケット わが文学生活1977～1979』(潮出版社、1982)
- 吉行淳之介『『暗室』を語る』(三田文学、1971)
- 吉行淳之介『恐・恐・恐怖対談』(新潮出版、1982)
- 吉行淳之介『猫背の文学散歩 吉行淳之介対談集』(潮出版、1974)
- 吉行淳之介『麻雀好日』(毎日新聞社、1977)
- 吉行淳之介・篠山紀信『ヴェニス 光と影』(新潮社、1979)
- 『吉行エイスケ 作品と世界』吉行和子監修(国書刊行会、1997)
- 『吉行淳之介』(吉行淳之介文学館、2000)
- 『とにかく吉行淳之介』(面白半分3月臨時増刊号、1979)
- 『特集吉行淳之介』(『ユリイカ』Vol. 13-13 青土社、1981.11)
- 「特集吉行淳之介—生と性の極北—」(『國文学解釈と教材の研究』17巻5号 學燈社、1972)
- 井原西鶴『好色五人女』吉行淳之介訳(日本の古典17井原西鶴、河出書房新社、1975)
- 井原西鶴『西鶴置土産』吉行淳之介訳(日本の古典17井原西鶴、河出書房新社、1975)
- 「特集 吉行淳之介」(『現点』3号、現点の会、1984.4.25)
- 「追悼特集・吉行淳之介」(『新潮』1994.10)
- 「追悼特集・吉行淳之介」(『群像』1994.10)
- 『人間・吉行淳之介』(文藝春秋、1995)
- 丸谷才一『文章読本』(中央公論社、1995)
- 丸谷才一「新ハムレット」(『遊び時間』大和書房、1976.12)
- 丸谷才一編『やわらかい話吉行淳之介対談集』(講談社、2001)
- 宮城まり子『まり子の目・子どもの目—ねむの木学園の〈教育発見〉—』(小学館、1986)
- 宮城まり子編『失敗を恐れないのが若さの特権である 愛・結婚・人生一言葉の花束—』(海竜社、2000)
- 宮城まり子『淳之介さんのこと』(文藝春秋、2001)
- 宮城まり子『宮城まり子 こどもたちへの伝言』NHK 知るを楽しむ人生の

- 歩き方』(日本放送出版協会、2007)
- ミラー、ヘンリー『愛と笑いの夜』吉行淳之介訳(河出書房、1968)
- ミラー、ヘンリー『不眠症あるいは飛び跳ねる悪魔』吉行淳之介訳(読売新聞社、1975)
- 井原西鶴『好色一代男』吉行淳之介訳(中央公論社、1981)
- 森茉莉「Caprice de Maria (キャプリス・ドゥ・マリア)」(『新潮』75巻9号、1978年9月)
- 『森茉莉 天使の贅沢貧乏』(KAWADE 夢ムック文藝別冊、河出書房新社、2003)
- 『森茉莉 津村節子 大庭みな子集』(筑摩現代文学大系91、筑摩書房、1987)
- 『花 森茉莉 片山廣子 城夏子』(百年文庫67、ポプラ社、2011)
- 森茉莉「夢を買う話」(日本の名随筆60 買物 原田宗典編 1996)
- 森茉莉「注射」(幼かりし日々 ちくま文学の森、1988)
- 森茉莉「恋人たちの森」「枯葉の寝床」「贅沢貧乏」(昭和文学全集7、小学館、1989)
- 森茉莉『恋人たちの森』(新潮文庫、1985)
- 森茉莉『私の美の世界』(新潮社、1974)
- 森茉莉「幼い日々」(森鷗外全集別巻、筑摩書房、1983)
- 「特集森茉莉」(『ユリイカ』No. 544, vol. 39-15、青土社、2007)
- 川村二郎『感覚の鏡 吉行淳之介論』(講談社、1979)
- 江藤淳「吉行淳之介試論」(江藤淳著作集 第2巻、講談社、1967)
- 江藤淳『成熟と喪失』(講談社、講談社文芸文庫、1993.10)
- 三浦朱門「隠者の叫び」(『群像』講談社、1977.2)
- 吉行和子『兄・淳之介と私』(潮出版社、1995)
- 吉行あぐり『あぐり 95年の奇跡』(集英社、2002)
- 綾目広治『反骨と変革』(御茶の水書房、2012)
- 大塚英子『暗室のなかで 吉行淳之介と私が隠れた深い穴』(河出書房新社、1995)
- 高山勝美『特別な他人 (若き吉行淳之介との四千日)』(中央公論社、1996)
- 瀧口修造本論・解説『パウル・クレー』(草月出版部、1963)
- ノバール＝ライザー、コンスタンス『クレー』本江邦夫訳(岩波世界の巨匠、岩波書店、1992)
- パウル・クレー、ヴァシーリィ・カンディンスキー『表現主義の詩』ドイツ表現主義1、(河出書房新社、1971)

- クレー、パウル、『教育スケッチブック』利光功訳（中央公論美術出版、1996）
- 「特集パウル・クレエ」（美術手帖、1959）
- 「パウル・クレエ特集」（アトリエ社、1951）
- 村上春樹『風邪の歌を聞け』（講談社、1979）
- 村上春樹『羊をめぐる冒険』上・下（講談社、1994）
- 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』1・2・3部（新潮社、1987）
- 村上春樹『ノルウェイの森』上・下（講談社、1987）
- 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』上・下（講談社、1996）
- 村上春樹『アフターダーク』（講談社、2004）
- 村上春樹『スポーツニクの恋人』（講談社、1999）
- 村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』上・下巻（新潮社、2010）
- 村上春樹『はじめての文学』（文藝春秋、2007）
- 村上春樹編訳『月曜日は最悪だとみんなは言うけれど』（中央公論新社、2000）
- 村上春樹『意味がなければスイングはない』（文藝春秋、2005）
- 村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文藝春秋、2013）
- 村上春樹『1Q84』BOOK1（4月－6月）後篇（新潮社、2012）
- 村上春樹『村上朝日堂ジャーナルうずまき猫のみつけかた』（新潮社、1996）
- 村上春樹『蛍・納屋を焼く・その他の短編』（新潮社、1984）
- 村上春樹『アンダーグラウンド』（講談社、1997）
- 村上春樹『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです村上春樹インタビュー集1997-2011』（文藝春秋、2012）
- 村上春樹『約束された場所で』（文藝春秋、1998）
- 村上春樹『走ることに語るときに僕の語ること』（文藝春秋、2007）
- 村上春樹『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』（中公文庫、1991）
- 村上春樹『やがて悲しき外国語』（講談社、1994）
- 村上春樹「僕が「僕」にこだわるわけ。」（『広告批評』35号、1982.3）
- 村上春樹「「カーヴァー・カントリー」を描くロバート・アルトマンの迷宮映画」（『本』講談社、1993.7）
- 村上春樹「「やさしい」映画を作ろうとするほど映像はデモニッシュになる『ツイゴイネルワイゼン』（『太陽』平凡社、No. 207 1980.6）
- 村上春樹「歌舞伎町のゲーム・センターで時折感じる“リアリテイ”。『スター・ウォーズ/帝国の逆襲』（『太陽』平凡社、No. 209 1980.8）

- 村上春樹「完璧な「書き割り」の平面に、ポランスキーの才気がひかる。『テスト』(『太陽』平凡社、No. 209 1980.9)
- 村上春樹「くだらない男は撃ち殺せ！八〇年代の女はタフにならねば。『ハンター』と『グロリア』」(『太陽』平凡社、No. 209 1980.9)
- 村上春樹「バルト海の底で僕を待ち受けていた鰻たちに関する「テーゼ」。『ブリキの太鼓』」(『太陽』平凡社、No. 218 1981.4)
- 村上春樹「ドライブ・マイ・カー 女のいない男たち」(文藝春秋、2013.12)
- 河合隼雄、村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』(岩波書店、1996)
- 小山鉄郎『村上春樹を読みつくす』(講談社現代新書2071、2010)
- 小山鉄郎『空想読解なるほど、村上春樹』(共同通信社、2012)
- 諏訪哲司「村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』を語る。」(『セツ寺通信』32号、2013年6月)
- 吉本由美『するめ映画館』(文藝春秋、2010)
- 鈴木和成『テレホン村上春樹、デリダ、康成、プルースト』(洋泉社、1987)
- 『村上春樹が分かる』(AERAMook Asahi Shinbun Number 75, 2001)
- 『村上春樹テーマ・装置・キャラクター』(国文学解釈と鑑賞、至文堂、2008.1.5)
- 「総特集村上春樹を読む」(『ユリイカ』Vol. 21-8 2000.6)
- 「村上春樹の世界」(『ユリイカ』Vol. 32-4 1989)
- 小森陽一『村上春樹論』(平凡社新書、2006)
- チャンドラー、レイモンド『ロング・グッドバイ』村上春樹訳(早川書房、2009)
- フィッツジェラルド、スコット『マイ・ロスト・シティ』村上春樹訳(中央公論新社、2012)
- 明里千章『村上春樹の映画記号学』(若草書房、2008)
- 清水良典『村上春樹はくせになる』(朝日新書、2006)
- 村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話』(文春新書、2000)
- 村上春樹、柴田元幸『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』(文春新書、2003)
- 柴田元幸、沼野允義、藤井修三、四方田犬彦『世界は村上春樹をどう読むか』(文藝春秋、2006)
- ルービン、ジェイ「何故世界中で読まれるのか「IQ84」翻訳者が語る村上春樹」(文藝春秋、2000)
- 村上春樹訳、解説「〈ポール・セローの世界〉」(『文学界』文藝春秋、1986.7)
- セロー、ポール『緑したたる島』村上春樹訳「ポール・セローの世界第二弾」(『文学界』文藝春秋、1986.8)

- 村上春樹訳、訳、構成「ジョン・アーヴィング〈特別インタビュー〉物語の力について」(『文学界』文藝春秋、1986.1)
- 村上春樹「怒りとその響きかた—J・アーヴィングへのインタビューについて—」(『文学界』文藝春秋、1986.1)
- セロー、ポール『文壇遊泳術』村上春樹訳「〈特別企画I〉」(『文学界』文藝春秋、1987.1)
- 村上春樹、村上龍『ウォーク・ドント・ラン村上龍 VS 村上春樹』(講談社、1986)
- 村上春樹、川本三郎『映画をめぐる冒険』(講談社、1985)
- 村上春樹『女のいない男たち』(文藝春秋、2014)

古英語における動詞・不変化詞構文の構造 について

石川 一久

1. 序

これまで生成文法において、動詞・不変化詞構文 (verb-particle constructions) (以下、V-prt 構文と呼ぶ) の統語分析は、現代英語が中心である。⁽¹⁾ 古英語 (Old English) (以下 OE と呼ぶ) については、Koopman (1985, 1990)、van Kemenade (1987)、及び Pintzuk (1991, 1993) らの研究がある。これらの研究では、動詞とその補部の語順を知る上で不変化詞の位置が重要な手がかりとなることが示されたが、OE におけるこの構文の構造については十分に検討がなされてこなかったように思われる。本論では、OE における不変化詞の特性と生起位置ついて考慮しながらこの構文の統語構造について詳細に分析する。

Ishikawa (1999, 2005) では、V-prt 構文は 3 つの型に分類されている。

- (1) a. He cut the branches off.
b. He cut off the branches.
- (2) a. She ran the pamphlets off.
b. He ran off the pamphlets. (ran off = printed) (Fraser (1974: 2))
- (3) a. I'll look the information up.
b. I'll look up the information. (look up = examine)

具体的にはまず、(1)を単純結合型 (simple combination type) と呼ぶ。これは、不変化詞が空間的な意味 (spatial meaning) を持ち、「動詞+不変化詞」全体が、動詞と不変化詞それぞれの文字どおりの意味を組み合わせた意味になる型である。次に、(2)の不変化詞はそれ自体の意味を失っており、かつ動詞も選択特性が本来のそれとは異なっている。このタイプを純粹イディオム型 (pure idiom type) と呼ぶ。(3)の不変化詞はそれ自体の「完了」の意味は保持しつつも、動詞の選択特性が本来のそれとは異なっている。このタイプを混合イディオム型 (hybrid idiom type) と呼ぶ⁽²⁾。単純結合型は、OE 期から存在しており、現代英語に至るまでに構造が変化したと考えられ、(2)(3)のイディオム型は、OE 期には存在しなかったと考えられる。本論では、単純結合型の OE における構造分析とその構造変化について考察する。

本論の構成は以下の通りである。まず2節で、Bowers (1993, 2001) の文構造及び Ishikawa (1999, 2005) の分析に基づいて、現代英語における単純結合型 V-prt 構文の構造を明らかにする。3節で、OE 期における単純結合型 V-prt 構文の構造について考察する。その際、不変化詞はどのような範疇として、統語上どの位置に生成されたのかについて詳細に分析する。4節は結語である。

2. 現代英語における単純結合型 V-prt 構文の構造

最近の研究では、現代英語の単純結合型 V-prt 構文の構造は、主に二つの立場から分析されてきた。一つは、Kayne (1985)、Hoekstra (1988)、Guéron (1991) 等の立場で、「目的語+不変化詞」を小節 (small clause) と分析するものである。もう一つは、Johnson (1991)、Koizumi (1993) 等の立場で、「動詞+不変化詞」が複合動詞として単一の語彙項目を形成

していると分析するものである。しかしながら、Ishikawa (1999: 333-337) で指摘されているように、これらの分析は幾つか問題を含んでいる。従って、これらの分析は採用せず、Ishikawa (1999, 2005) の分析に従う。

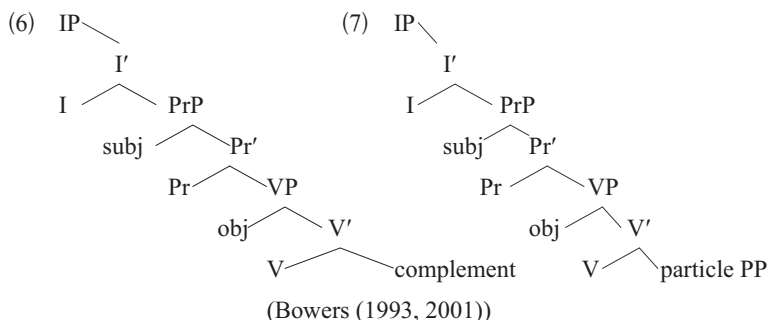
Ishikawa (1999: 342) は、(1) の off のような不変化詞が、意味的・統語的観点から、結果述語 (resultative predicate) に類似していることに注目している。意味の観点において、Visser (1963: 597)、Bolinger (1971: 85)、及び Tenny (1994:148) によれば、この不変化詞は終点 (terminus) または結果 (result) を表す (cf. Ishikawa (1999: 342))。次に、統語的観点において、この不変化詞は (1-3)b のように、目的語の前に生起できるが、(4) のように、結果述語も同様の分布が可能である (cf. *ibid.*)。

- (4) a. The president cut short his news conference. (Fraser (1974: 35))
 b. Break open the cask. (Bolinger (1971: 70))
 c. Will it bleach white the undies? (Bolinger (1971: 74))

更に、目的語が代名詞の場合、不変化詞は目的語の前に生起できないが、これは (5) に示すように、結果述語と同様である (cf. *ibid.*)。

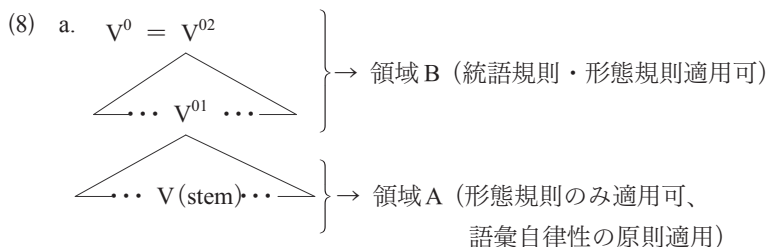
- (5) a. *He painted red it.
 b. *They set free him. (Fraser (1974: 36))

このことから、不変化詞は、結果述語と同じ位置に生成されると仮定できる。これまで、Rothstein (1983)、Ike-uchi (1991)、Carrier and Randall (1992) 等、結果述語に関する標準的な分析によると、結果述語は、V の姉妹 (sister) 位置に生成される。ここでは、(6) のような Bowers (1993, 2001) の文構造を仮定しているため、基本的に Ike-uchi (1991) の二項枝分かれ構造を採用し、単純結合型 V-prt 構文の構造を (7) のように仮定する。



尚、不変化詞を PP と分析したのは、Emonds (1972, 1976)、Aarts (1992)、den Dikken (1990, 1995) 等に従い、不変化詞は目的語を取らない前置詞 (intransitive preposition) とする立場に立っていることによる。

また、 V^0 内の構造に関しても、Ishikawa (1999, 2005) に従う。すなわち、主要部 V^0 は、更にその中で V^{01} と V^{02} の2つのレベルに分かれると考える。そして、(8) に示すように、 V^{01} より下位の要素の属す領域は純粋な形態論領域であり、語彙自律性の原則 (Principle of Lexical Integrity) (9) に従う領域で、領域 A (domain A) と呼ぶ。



(9) Principle of Lexical Integrity

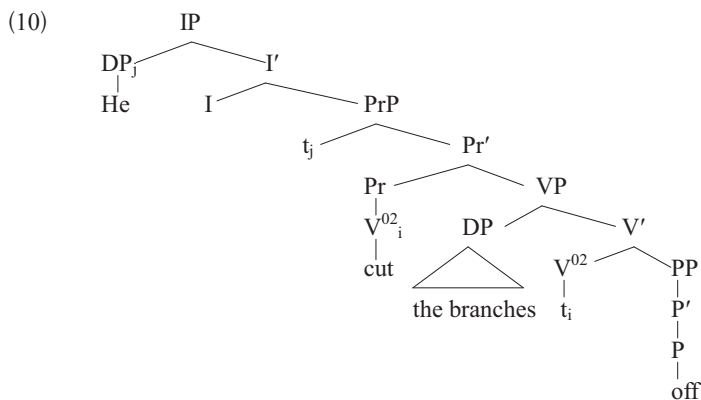
No syntactic rule can refer to elements of morphological structure.

(Lapointe (1980: 8))

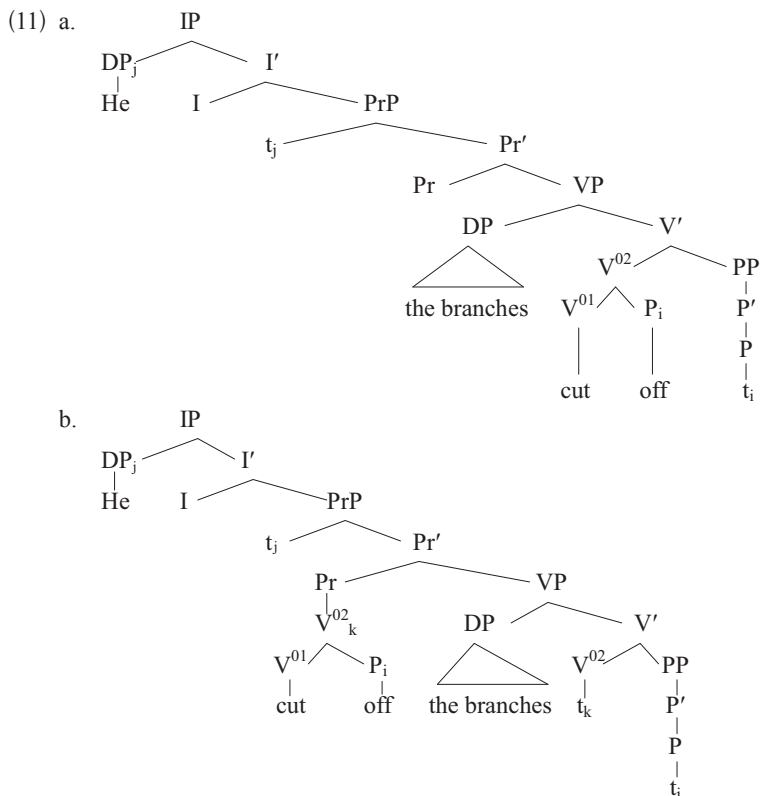
故に、領域 A では統語規則が適用できない。他方、 V^{01} 及び V^{02} の属す

領域は形態規則だけでなく統語規則も適用できる領域であり、(9)に従わない。従って、この領域内への要素の編入 (incorporation)、及びこの領域からの脱編入 (excorporation) が可能となる。(8) に示されるように、この領域を領域 B と呼ぶ。

次に、(7) に基づいて、単純結合型 V-prt 構文 (1a) 及び (1b) の派生を明らかにする。まず、(1a) の派生は、概略 (10) のようになる。



Bowers (2001: 302) に従い、Pr の V 素性 ([+V, -N]) は現代英語で強いと仮定すると、(10) に示すように、cut は Pr 位置に顕在的に (overtly) 移動する。主語 DP の He も、EPP の要請で、PrP 指定部位置から IP 指定部位置へと移動する。次に、(1b) の派生は (11) のようになる。



まず、(11a)のように、Pである off が、動詞 cut の領域 B 内に編入 (incorporate) し、複合動詞 V^{02} cut off が形成される。次に、(11b)のように、この複合動詞が Pr に移動する。

以上、現代英語における単純結合型 V-prt 構文の構造及びその派生の仕方を明らかにした。それでは、OE においてこの構文の構造はどのようであったのか。

3. OE 期の V-prt 構文

本節では、前節で見た Bowers の文構造に基づいて、OE の不変化詞がどの位置にどんな範疇として生成されたかについて考察する。

3.1 不変化詞の分類

不変化詞が生起する位置と範疇について考察する上で、Hiltunen (1983) が行った不変化詞の分類に注目することが重要である。Hiltunen は、不変化詞を (12) のように、句副詞 (phrasal adverb) と前置詞的副詞 (prepositional adverb) に分類した。

(12) a. phrasal adverb

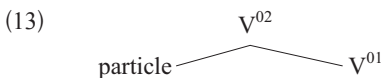
adun ('down'), aweg ('away'), forð ('forth'), up, ut ('out'), etc.

b. prepositional adverb

beforon ('before'), æfter ('after'), behindan ('behind'), ofer ('over'), on, in, betweenan ('between'), of ('off'), under, geond ('through'), þurh ('through'), wið, ymb, etc.

句副詞とは (12a) のように、通常前置詞として生起しないものを指し (cf. Hiltunen (1983: 20))、前置詞的副詞とは (12b) のように、目的語を取る前置詞としても用いられるが、目的語のないものを指す (cf. Hiltunen (1983: 21))。本論では、句副詞について取り扱うことにする。

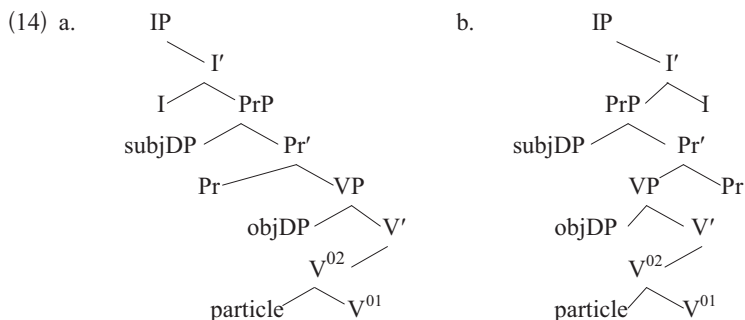
これまで Koopman (1985, 1990)、van Kemenade (1987) 等、OE における V-prt 構文の分析では、(11a) のような不変化詞の V^0 (= V^{02}) 内への編入操作はなく、不変化詞は V^0 内に基底生成される。(8) に基づく表記をすれば、(13) のようになる。



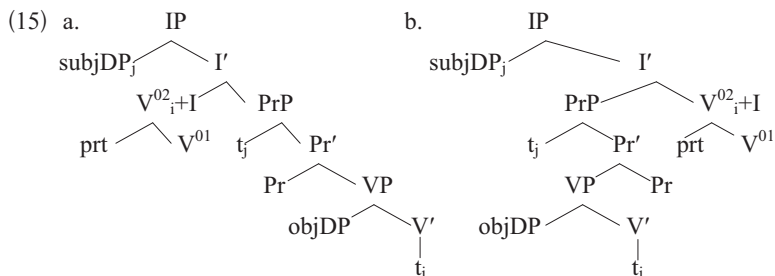
次節では、句副詞に関してこの構造が妥当であるかどうかについて具体的に検討する。

3.2 句副詞の生起する位置

(13) の動詞複合体は、もとは Bowers の文構造とは異なる文の枠組みで仮定された構造である。従って、まず Bowers の文構造のもとで、(13) が実際の語順を導けるかを検討する。具体的には、構造 (14) で正しい事実が得られるかどうかを見てみる。



まず、(14a, b)における V^{02} 全体を移動した場合、それぞれ (15a, b) の構造が得られる。



(15a, b) は、それぞれ (16a, b) に示すように、正しい予測であることがわかる。

(16) a. þæt heo onweg adyde þa gemynd þara treowleasra cyninga
(Bede 154.10)

that they away did the record of the faithless kings

(Koopman (1985: 112))

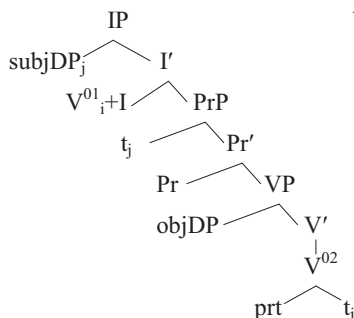
b. þæt he his stefne up ahof (Bede 154.28)

that he his voice up lifted

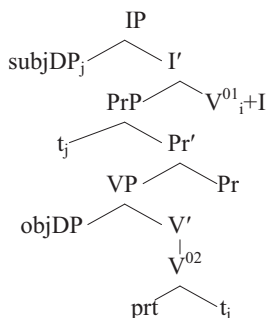
(Pintzuk (1991: 77))

(15a)(15b) の下線部要素の線形順序が、それぞれ (16a)(16b) で確認できる。更に、(14a, b) における V^{02} 内の V^{01} のみを移動した場合、それぞれ (17a, b) の構造が得られる。尚、この移動は、(8) における V^{02} の領域 B からの脱編入であり、(9) に違反していない。

(17) a.



b.



(17a, b) も、それぞれ (18a, b) に示すように、正しい派生であることがわかる。

- (18) a. þæt he wearp þæt sword onweg (Bede 38.20)
 that he threw the sword away (Pintzuk (1993: 16))

b. (= (16b))

- þæt he his stefne up ahof (Bede 154.28)
 that he his voice up lifted (Pintzuk (1991: 77))

ここで注意すべきことは、van Kemenade (1987: 32) 及び Pintzuk (1991: 91–92) の観察を総合すると、(19) のように、定形動詞と不変化詞がこの順で現れる場合、動詞の項で両者の間に介在できる要素は目的語 DP しかない。(18a) はこの制限に従っている。

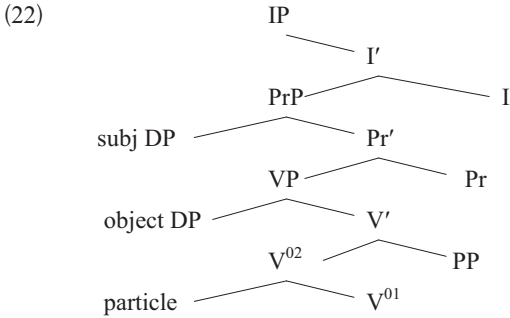
- (19) finite V - object DP - particle (van Kemenade (1987: 32))

Bowers の構造からすれば、不変化詞の左側にくる項は目的語 DP しかありえない。従って、(19) の語順はそのまま Bowers の構造に基づいた (17a) によって導かれることになる。

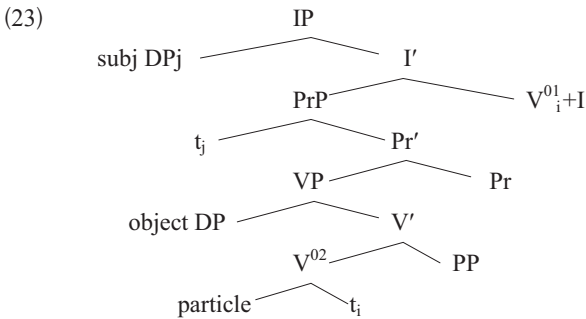
更に、不変化詞–定形動詞語順の場合にも、表層語順の制限があることに注意する。van Kemenade (1987: 32) の観察によると、(20) に示すように、両者の間に介在できる項は PP であり、目的語 DP は決して介在できない。具体例は (21) である。この制限も、Infl 後置の構造 (22) からすぐさま導かれる。

- (20) particle $\left\{ \begin{array}{l} \text{PP} \\ \text{*object DP} \end{array} \right\}$ finite V (ibid.)

- (21) þær he up of þæm sonde scyt (Or 11.10)
 where it up from the sand shoots (Pintzuk (1991: 77))



(22) の構造において、V⁰¹がIに移動したとすると、(23) のようになり、(20) の語順制限が正しく説明できる。



以上のように、ここでの枠組みの中で(13)を仮定しても、正しい事実が得られることを示した。

しかしながら、(13)は、まだKoopmanやvan Kemanade等の研究で十分に検討されたとは断言できない。従って、以下では、(13)を更に支持する論拠を示す。まず、不変化詞がV⁰²内に存在している証拠を挙げる。まず、(24a)の型である(24b)を見てみる。

(24) a. subject + particle + finite verb + ……

- b. hie ealle ut aflugon on Creca lond æfter Sillan 7
 they all out fled onto the land of the Greeks after Sillan and
 æfter Pompeiuse (Or 236.18)
 after Pompeius (Hiltunen (1983: 121))

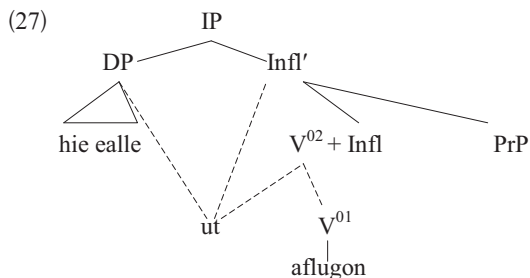
(24b) は Infl が VP に先行する型と言える。もし仮に、(24b) を Infl 後行型とした場合、(25) のように定形動詞の後の構成素はすべて Infl の後に右方移動しなければならない。しかし、複数のこの種の右方移動は、(26) の非文法性からわかるように、一般に許されない。

(25) *_{[IP} hie ealle t_i t_j ut _{[Infl} aflugon]] [on Creca lond]_i [æfter Sillan 7 æfter Pompeiuse]_j

(26) a. *John plays t_i t_j every night [nocturnes composed by little-known musicians]_i [on this violin of his brother's]_j.
 (中島 (1984: 77))

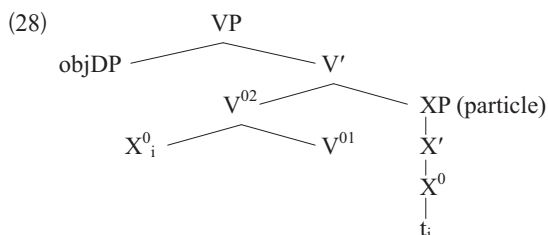
- b. *John sent t_i t_j by special delivery [his paper on binding theory]_i
 [to the reviewer for the journal]_j. (ibid.: 29)

このように考えると、Infl 先行型 (24b) の不変化詞 ut は、(27) に示すように、主語 DP に右から付加されているか、Infl' に付加されているか、V⁰² 内にあるかのどれかである。



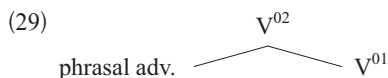
しかし、ut が修飾するのは、主語 DP でも Infl 要素でもなく動詞であり、ut は V^{02} 内にあると考えるのが妥当である。

次に、OE において V^{02} 内に存在する不変化詞は、統語規則によって編入されたものではなく、 V^{02} 内に基底生成されたものであることを示す。すなわち、(28) の理論的可能性を排除する。排除すべき (28) は、不変化詞 XP が V^{02} の外に生起し、その主要部 X^0 が顕在的統語部門で V^{02} に編入されて構造 (13) が形成される可能性である。Koopman や van Kemanade 等これまでの研究では、こうした検討はなされてこなかった。



先に述べたように、ここでは XP が句副詞の場合について考察する。

以下では、(28) を排除する論拠を示す。すなわち、句副詞は、(28) の V^{02} 外の XP 位置には生じず、(29) のように V^{02} 内に生成されることを示す。



3.3 句副詞の範疇と V^{02} 内生成の妥当性

(29) の具体的な議論に入る前に、句副詞の範疇を明らかにしておかなければならない。Koopman や van Kemanade 等の研究では、不変化詞の具体的な範疇について触れられてこなかった。従ってここでは、まずその点について考察する。Emonds (1972) によれば、現代英語において、

句副詞は通常の PP と同様の振舞を示すので、PP と分析される。例えば、(30) に示すように、強意語である *right* は、一般に PP のみを修飾する特性を持つが、(31) に示すように、句副詞も修飾⁽³⁾できる。

- (30) a. Bill put the spices right on the meat.
 b. Some people can't work right before dinner.
 c. *Bill visits Europe right often, frequently, etc.
 d. *Those girls were right attractive. (Emonds (1972: 551))
- (31) a. He put the toys right back.
 b. They looked it right up and left.
 c. John brought the bottles right down. (Emonds (1972: 552))

しかしながら、*OED* (= *Oxford English Dictionary*) の *right* の項目において、*OE* の強意語の用法の例に (31) のような例は存在しない。具体的に、*right* のここでの議論に関わるそれぞれの意味において、直後に句副詞が生起する句副詞と初出年代および初出例を次に示す。ただしここでは、句副詞の意味は文字通りの空間的な意味を示す場合を対象としている。

(32) *right* (*OED*)

- i) Of motion or position: Straight; in a direct course or line.
 forth: 1530 *Palsgr.* 827/1 Ryght forthe, tout droyt auant.
 up: c 1440 in *Househ. Ord.* (1790) 434 Dresse hit forthe, and almonds or paynes fryed, and styk hom right up therin.
- ii) In a straight or direct course leading quite up to a place, person, or thing; hence, all the way to, into, round, through, etc.; also with advbs. as down, along (also in sense 'all along' (chiefly U.S.)), in, back.
 down: 1530 *Palsgr.* 827/1 Ryght downe, tout droyt embas.
- iii) Quite or completely off, out, round, etc.
 off: c 1400 *Sege Melayne* 329 At þe erthe he smate righte of his

hede.

out: 1894 H. *Nisbet Bush Girl's Rom.* 115 We will, Captain, blot
them right out.

更に、ヘルシンキ・コーパスで調査しても同様である。⁽⁴⁾従って、OEの句副詞を PP と分析するのは困難である。それではどんな範疇であろうか。ここでは、(33) の下線部のように、句副詞が、to ('too'), feor ('far'), swiðe ('very') のように副詞を修飾する語にしばしば修飾されることに注目する。

(33) a. py læs hi for longum gesælþum hi to up ahæbban
(Ælfred, *Boeth.* (Fox) 228.3)
lest they for long felicity themselves too up raise
(Visser (1963: 599))

b. þonne hi hlifiað feor up ofer þa oðre eorðan
(*HomS* 40.1 (Nap 49) 255)
when they rise far up over the other ground
(Healey and Venetzky (1980))

c. Ðonne ahebbað ða synfullan swiðe up hira hornas
(K. ÆLFRED *Gregory's Past C.* liv. 425)
then raise the sinners exceedingly up their horn (*OED*)

d. ne hebbe ge to up eowre hornas. (CP 425.22)
not raise you too up your horns

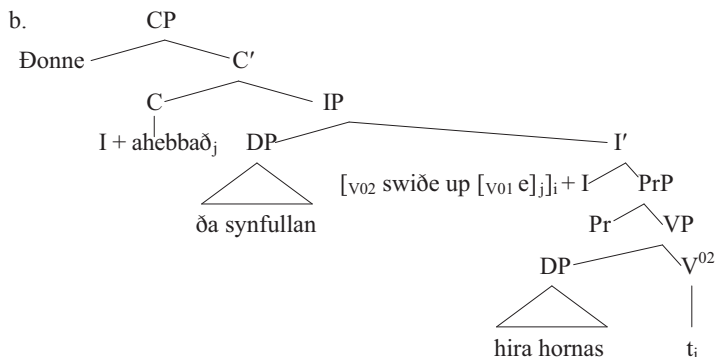
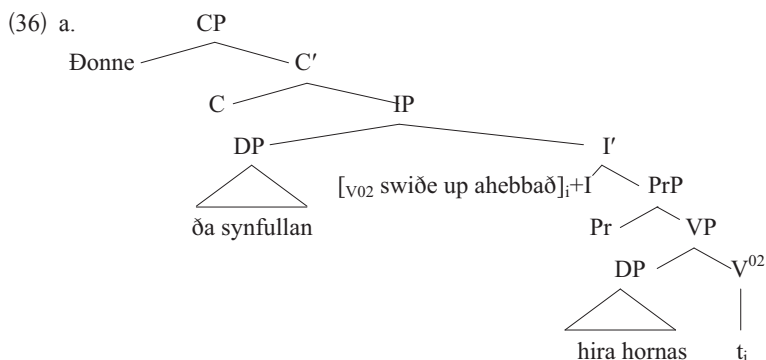
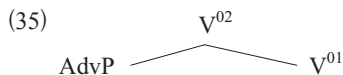
[The underlining is mine.]

先のようにこれらの強意語が指定辞であるとする、句副詞は (34) に示すように、XP 範疇である AdvP として分析できる。

(34) phrasal adverb: [_{AdvP} (intensifier) [_{Adv} Adv⁰]]

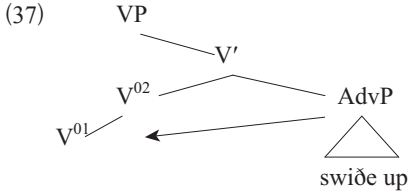
それでは、(28) でなく (29) が更に支持される論拠を示す。それは、(33c) と (33d) に関わる。(33c) では、目的語 *hira hornas* が、強意語 *swiðe*

のついた句副詞 *up* より後にある。ということは、*up* は何らかの方法で *hira hornas* の前に移動しなければならない。基底生成された構造 (29)、具体的には (35) を仮定すれば、(33c) は (36a)、(37b) の順でうまく派生することができる。

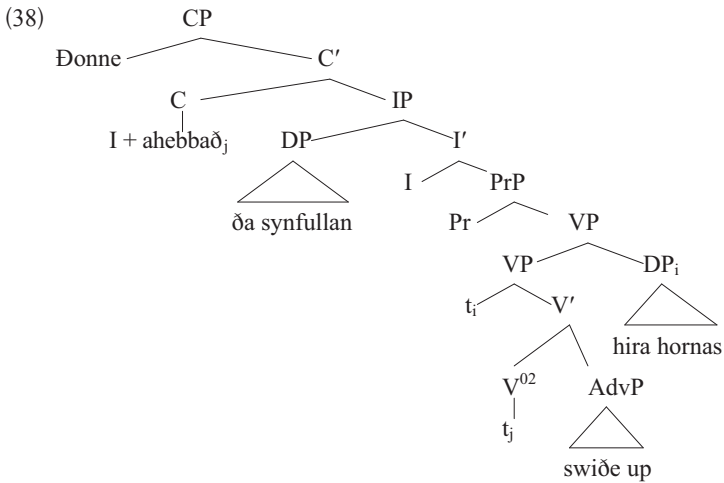


まず (36a) のように、複合動詞 V⁰²である *swiðe up ahebbað* が一体となって I 位置まで移動し、次に、(36b) のように、その I 位置から V⁰¹である *ahebbað* だけが C 位置に移動する。

一方、もし仮に、(28)のXP位置にAdvPの*swiðe up*があるとすると、(36a)と同じように複合動詞V⁰²としてI位置に移動するためには、(37)に示すように、一度このAdvPを統語的操作によってV⁰²内に入れ込む必要がある。



しかし、Baker (1988)等の研究によれば、編入操作は主要部移動であることから、この移動は許されない。それでは、(38)のように、このAdvPをそのままにして目的語の*hira hornas*を右方移動する派生が考えられるかもしれない。



しかし、van Kemenade (1987: 40), Pintzuk and Kroch (1989:125)によれば、

OEにおいて、CP後置やPP後置と異なり、DP後置は「重い (heavy)」要素のみが後置される重名詞句転移と分析されるべきだとしている。この見解に基づくと、目的語DP *hira hornas* は「重く」ないので、(38)のように後置したとは考えにくい。さらに(33c)と同じ語順を持つ(33d)にも、ほぼ同様の議論が成り立つ。以上から、句副詞が V^{02} (= V^0)内に生成される構造(35)が支持された。

尚、このようにXP範疇が X^0 範疇内に存在する構造について、Baker (1988)等これまでの研究では、通常XP範疇が X^0 範疇内に統語部門で編入されることは許されない。しかし、(35)のようにXP範疇が X^0 範疇内に基底生成されることは、これまでDiSciullo and Williams (1987), Iatridou (1990), Lieber (1992)等の研究で他の事例を根拠に認められており、不適當ではないと考えられる。例えば、Lieber (1992: 56)は形態論の立場から、(39)のような句複合語 (phrasal compound) に対して、(40)のようにXP範疇を N^0 範疇内に生成する分析をしている。

(39) a. floor of a birdcage taste

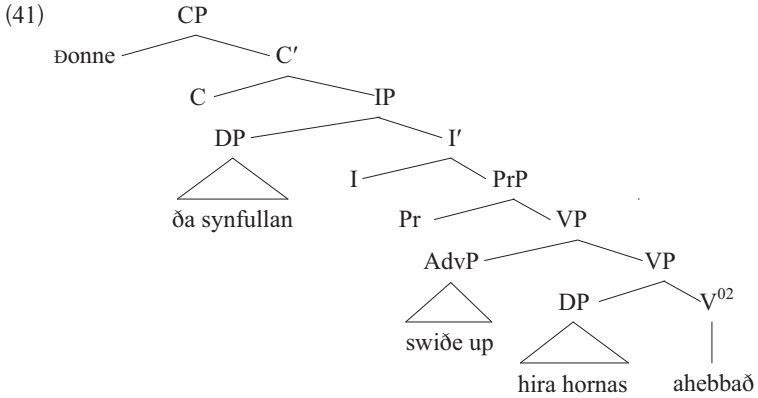
b. over the fence gossip

(40) a. [_N [_{NP} floor of a birdcage] [_N taste]]

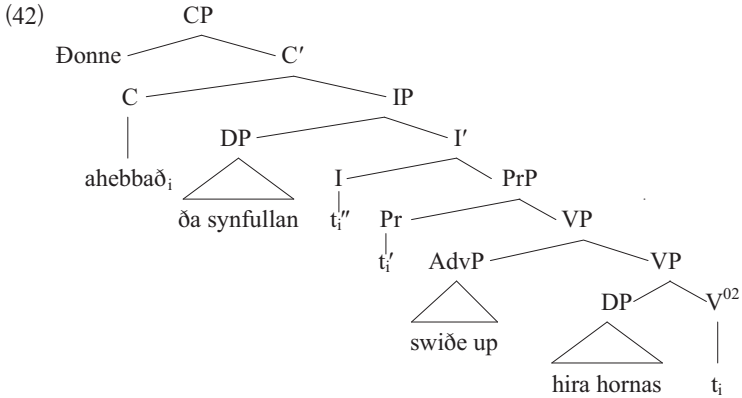
b. [_N [_{PP} over the fence] [_N gossip]] (Lieber (1992: 56))

このことから、(35)は支持されることとなる。

上の議論で、(35)が支持される論拠として、(35)を仮定すれば(33c)と(33d)の「upを含むAdvP-object DP」の語順を正しく導けることを示した。しかしながらここで、この語順を導く派生として、AdvPを V^{02} 内に生成せず、(41)に示した(33c)の基底構造のようにVPに付加する構造の可能性も考察しなければならない。不変化詞がいわゆるVP Adverbとして機能するという仮定である。この可能性を否定することによって、(35)はさらに支持されると言えよう。



確かにこの構造から、(42)に示すような派生で、(33c)の表層語順は得られそうである。

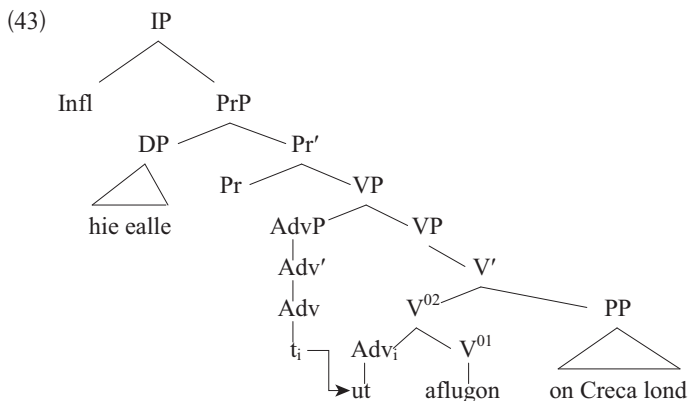


しかし、この VP 付加位置が一般に不変化詞 AdvP が生起する規範的な位置であると仮定すると、不変化詞と動詞が複合体として移動したと考えられる場合に理論上の問題が生じる。

ここでは、(24b)を例に取り考察する。ここに(24b)を再度提示する。

- (24b) hie ealle ut aflugon on Creca lond æfter Sillan 7
 they all out fled onto the land of the Greeks after Sillan and
 æfter Pompeiuse (Or 236.18)
 after Pompeius (Hiltunen (1983: 121))

(27) で議論したように、ut は V^{02} 内にあることが明らかになった。すなわち、 $[_{v02} \text{ ut aflugon}]$ という複合体として最終的に Infl に付加されている。ここで、ut が VP に付加されているというここでの仮定の下で、この複合体を統語規則によって形成すると仮定すると、下記に示すように、Adv の ut が V^{02} 内に編入される派生が考えられる。



(43) で、AdvP は VP に付加された位置にあり、その中から主要部 Adv が抜き出され V^{02} 内に編入されている。しかしながら、一般的に付加詞 (adjunct) からの抜き出し操作は許されない⁽⁵⁾。従って、(24b) を派生するのに AdvP を VP に付加することは支持されない。ゆえに、(41) の構造も排除される。以上の議論から、(29) すなわち (35) がさらに支持されると言える。

3.4 句副詞の V^{02} 内生成の新たな可能性

しかしながら、確かに (35) は支持されるわけであるが、(35) だけで古

英語の V-prt 構文を扱うことは困難である。それは、次の例に関わる。

- (44) a. þærrihthe æt þam forman gedelfe swegde ut ormæte wylspring
 (YCOE: cocathom1,ÆCHom_I_37:499.77.7)⁽⁶⁾

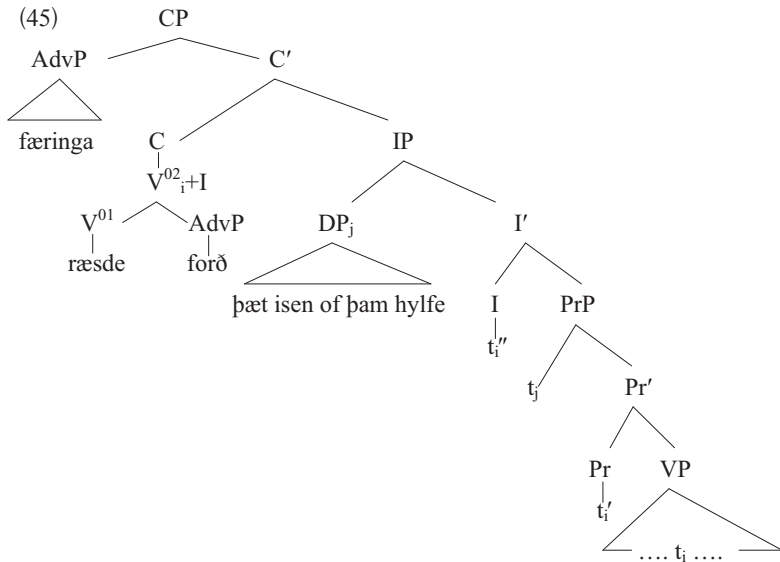
immediately at the first delving rushed out immense well-spring

- b. þa færinga ræsde forð þæt isen of þam hylfe

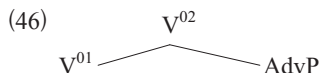
(YCOE: cogregdH,GD_2_[H]:6.113.23.1101)

then suddenly rushed forth that iron of the helve

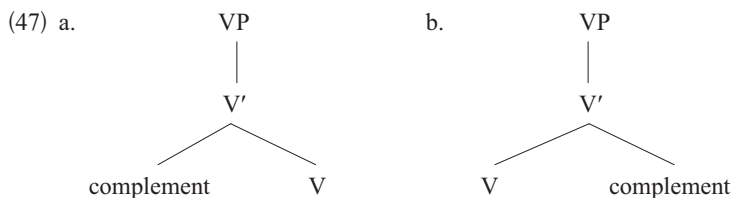
(44a)では、先頭要素 þærrihthe æt þam forman gedelfe の後に、動詞＋句副詞 swegde ut が生起しており、その後に主語 ormæte wylspring が続いている。(44b)も同様に、動詞＋句副詞 ræsde forð が、先頭要素 þa færinga に後続し、その後に主語 þæt isen of þam hylfe が生起している。これらの構文は、いわゆる V2構文と考えられ、(45)に示すように、「動詞＋句副詞」が複合体 V^{02} として C^0 位置に繰り上がっていると仮定することができる。



このように、明らかに「動詞+句副詞」の語順で複合体をなしていると考えられる事例は、(35)では派生できない。このことから、(35)の他に、(46)に示すように、動詞が副詞に先行する V^{02} 構造も仮定することが妥当であると考えられる。



ここでは、(35)と(46)の両方を仮定することに関して、Pintzuk (1991)の二重基底部仮説 (The Double Base Hypothesis) に準ずるものとする。Pintzuk は OE の VP 内の主要部 V とその補部の位置関係、および IP 内の主要部 I とその補部 VP の位置関係について、主要部先行型と主要部後行型の 2 種類の構造を仮定した。例えば、前者の位置関係については以下に示される通りである。



この仮説にならって、ここでは V^{02} 内の領域 B でも同様な統語的原理が関与できると考える。具体的には、主要部 V^{02} 内の更なる主要要素を V^{01} と見なすと、 V^{02} 内においても、AdvP - V^{01} と V^{01} —AdvP の両方の線形順序となる構造 (35) と (46) が仮定できる。

更に、(35)と(46)を間接的に支持する論拠として、OEにおいて、句副詞が動詞の存在に依存していたことが挙げられる。このことは、ヘルシンキ・コーパスの OE の部分および YCOE における調査の結果、本動詞のない (48) や (49) のような現代英語の構文が存在しないことから

明らかである。

(48) He is out.

(49) a. Out!

b. Back!

c. Head up!

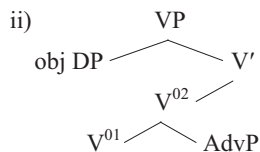
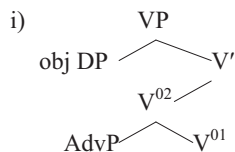
d. Toes out!

(Bolinger (1971: 87–88))

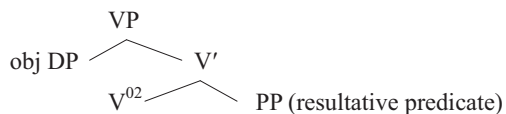
以上、(35)と(46)の構造が正しいことを示した。

以上のことから、OEの不変化詞は、必ずV⁰²内に生成されたことがわかる。このように、不変化詞である句副詞は本動詞と密接に関わっていたと言える。ここで、OEと現代英語におけるV-prt構文のVP構造の違いについて、まとめると、(50)のようになる。

(50) a. OE



b. PE



(50b)のように、不変化詞が結果述語PPとして動詞の姉妹位置に生成されるようになったのは何が原因であろうか、又、その変化は英語史上いつ頃であろうか。この点については、また稿を改めることにする。

4. 結語

本論では、Ishikawa (1999, 2005) の分析、及び Bowers (1993, 2001) の文構造に基づいて、不変化詞が句副詞の場合について、単純結合型 V-prt 構文の OE における統語構造について考察した。X⁰ 範疇内に統語規則が適用可能な領域 B を仮定することによって、OE 期においては、不変化詞は PP としてではなく、AdvP として動詞 V⁰² 内に、V⁰¹ の右側あるいは左側に生成されたと主張した。

注

- (1) 本論の「不変化詞」とは Fraser (1974: 2)、嶋田 (1985: 4-5) に従い、(i) のように、動詞の目的語の後にも生起できるものを指し、(ii) のように、それができないものは不変化詞とは見なさないものとする。
- (i) a. The child put away the plate. (Shimada (1985: 4))
 b. The child put the plate away. (ibid.)
- (ii) a. They looked at the picture. (ibid.)
 b. *They looked the picture at. (ibid.: 5)
- (2) ここでは、Ishikawa (1999) に従い、2つのイディオム型を区別するために、不変化詞の直前に強意語 *right* をおけるか否かを判断法としている。混合イディオム型の不変化詞は固有の意味を保持しているので、強意語 *right* をその直前に置くことができる。
- (i) a. I'll look the information right up. (Fraser (1974a: 25))
 b. The plane took right off. (ibid.)
- 一方、純粋イディオム型は、それが不可能である。
- (ii) a. *John put his vacation right off until Christmas. (put off = postpone)
 (Emonds (1972: 552))
 b. *The store keepers took the students right in. (take in = deceive)
 (ibid.)
- (3) (31b) の *up* は、「上方を」という文字どおりの意味で用いられている。
- (4) The *Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic and Dialectal*, ICAME

(International Computer Archive of Modern English), supervised by Matti Rissanen and Ossi Ihalainen, 1991.

- (5) 伝統的には、Huang (1982) の抽出領域条件 (Condition on Extraction Domain (CED)) にその議論が本格的に始まる。その後開発される一連の理論の枠組み内で、付加詞からの抜き出し操作に関して説明が試みられている。付加詞からの主要部抜き出しが禁止される現象に関しては、例えば、Baker (1988) は、GB 理論の枠組みで下記のような空範疇原理 (Empty Category Principle (ECP)) で説明を試みている。

(i) The Empty Category Principle (ECP)

a. Traces must be PROPERLY GOVERNED.

b. A PROPERLY GOVERNS B iff A governs B, and A and B are coindexed. (Baker (1988: 39))

- (i) のもとでは、(43) において、AdvP が付加位置にあるため、ut の痕跡 t_i は Adv_i に適正統率されない。

なお、ミニマリスト・プログラム (cf. Chomsky (2000, 2001)) における位相不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition (PIC)) による CED 効果の説明の妥当性については、Boeckx (2012) 参照。

- (6) YCOE = the *York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*, Ann Taylor, Anthony Warner, Susan Pintzuk, Frank Beths, Department of Language and Linguistic Science, University of York, Heslington, York

参考文献

- Aarts, B. (1992) *Small Clauses in English: The Nonverbal Types, Topics in English Linguistics 8*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Boeckx, C. (2012) *Syntactic Islands*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- Bowers, J. (1993) “The Syntax of Predication,” *Linguistic Inquiry* 24, 591–656.
- Bowers, J. (2001) “Predication,” in M. Baltin and C. Collins, eds., *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, Blackwell, Oxford.
- Carrier, J. and J. H. Randall (1992) “The Argument Structure and Syntactic Structure

- of Resultatives,” *Linguistic Inquiry* 23, 173–234.
- Chomsky, N. (2000) “Minimalist Inquiries,” in R. Martin, D. Michaels, and Juan Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, N. (2001) “Derivation by Phase,” in M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Dikken, M. den (1990) “The Structure of English Complex Particle Constructions,” in R. Bok-Bennema and P. Coopmans (eds.) *Linguistics in the Netherlands 1990*, Foris, Dordrecht.
- Dikken, M. den (1995) *Particles: on the Syntax of Verb-Particle, Triadic, and Causative Constructions*, Oxford University Press, New York and Oxford.
- DiSciullo, A.-M. and E. Williams (1987) *On the Definition of Word*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Emonds, J. (1972) “Evidence that Indirect Object Movement is a Structure-Preserving Rule,” *Foundations of Language* 8, 546–561.
- Emonds, J. (1976) *A Transformational Analysis to English Syntax*, Academic Press, New York.
- Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan, Tokyo.
- Guéron, J. (1991) “Particles, Prepositions, and Verbs,” in Mascar, J. and M. Nespor, eds., *Grammar in Progress*, Foris, Dordrecht.
- Healey, A. D. and R. L. Venezky (1980) *A Microfiche Concordance to Old English*, Centre for Medieval Studies, University of Toronto, Toronto.
- Hiltunen, R. (1983) *The Decline of the Prefixes and the Beginnings of the English Phrasal Verb*, Turun Yliopisto, Turku.
- Hoekstra, T. (1988) “Small Clause Results,” *Lingua* 74, 101–139.
- Huang, C.-t.J. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation. MIT.
- Iatridou, S. (1990) “About Agr(P),” *Linguistic Inquiry* 21, 551–557.
- Ike-uchi, M. (1991) “On Extraction of Secondary Predicates in English,” *MIT Working Papers in Linguistics* 13, 125–162.
- Ishikawa, K. (1999) “English Verb-Particle Constructions and a V⁰-Internal Structure,” *English Linguistics* 16.2, 329–352.
- Ishikawa, K. (2005) “Types and Derivations of English Particle Verb Constructions (*Particle Verbs in English: Syntax, Information Structure, and Intonation*. Nocola Dehé (Review Article)) *English Linguistics* 22.1, 103–132.

- Johnson, K. (1991) "Object Positions," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 577–636.
- Kayne, R. (1985) "Principles of Particle Constructions," in J. Guéron on et al. (eds.) *Grammatical Representation*, Foris, Dordrecht.
- Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Koizumi, M. (1993) "Object Agreement Phrases and the Split VP Hypothesis," *MIT Working Papers in Linguistics* 18, 99–148.
- Koopman, W. (1985) "Verb and Particle Combinations in Old and Middle English," in R. Eaton, O. Fischer, W. Koopman and F. van der Leek (eds.) *Papers from the 4th International Conference on English Historical Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.
- Koopman, W. (1990) *Word Order in Old English with Special Reference to the Verb Phrase*, Doctoral dissertation, University of Amsterdam.
- Lapointe, S. (1980) *A Theory of Grammatical Agreement*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Lieber, R. (1992) *Deconstruction Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- 中島平三 (1984) 『英語の移動現象研究』 研究社、東京。
- Pintzuk, S. (1991) *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- Pintzuk, S. (1993) "Verb Seconding in Old English: Verb Movement to Infl," *The Linguistic Review* 10, 5–35.
- Pintzuk, S. and A. S. Kroch (1989) "The Rightward Movement of Complements and Adjuncts in the Old English of Beowulf," *Language Variation and Change* 1, 115–143.
- Rothstein, S. (1983) *The Syntactic Forms of Predication*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- 嶋田裕司 (1985) 『句動詞』, 大修館, 東京。
- Tenny, C. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Visser, F. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, Part I, Brill, Leiden.

ベケット、迷宮の庭

堀田敏幸

一、道に迷う

ベケットの主人公たちは、放浪生活に人生の生きがいを見出そうとする。彼らは住居を所有せず、仕事を放棄し、家庭に拘束されることもなく、一所不住の生活を送ることに満足感を得ている。このような野外で暮らす放浪者が場所を移動する時に、道に迷うことがあるだろうか。放浪者は一日に長い距離を歩くわけではない。彼らは家庭持ちのように生活道具を多く所有していることはないとはいえ、必要最小限の日用品を持参しているであろうから、それらを運びながらの移動は苦労を要するであろう。車があれば便利であるが、ベケットの作中人物にそれを所有する者はいない。荷馬車とか荷車のような運搬道具も使われない。自分で持てる範囲の少ない荷物であるとしても、手に持って運ぶとなれば重労働になる。『ゴドーを待ちながら』で、重いトランクを持たされているのは召使いのラッキーで、彼はひどく疲弊している。ラッキーと主人のポゾーは浮浪者ではないが、生活道具を持った放浪者が歩行によって一日に移動する距離は、おのずと限られてくる。そして、彼らは恐らく身軽な時にすでに通ったことのある道のりを歩くのであろう。このような行動範囲であれば、彼らが道に迷うという事態はほとんど生じないこ

とになる。

ベケットの小説『マーフィー』（一九三八年）は、無職のマーフィーがセリアという女性と出会い、結婚を約束するところまで愛情が進むが、マーフィーはなぜか結婚後も無職のまま働きたくないと考えている。そこで家計を支えるために、恋人のセリアが以前の仕事に戻って働くことを提案するが、これもマーフィーは拒絶する。そこで彼は仕方なく、精神病院で雑役係として住み込みで働く職を見つける。しかし、結果は彼の部屋のガス爆発により死を迎えることで、彼らの愛情生活も破綻するという話である。これはこの小説の中心となる本筋であって、他にも多数の人物が登場し、その場面ごとにそれぞれの恋愛を繰り広げたり人物探しをしたりする。こうした副人物の一人に、学校の教授であるニアリイがいる。彼は心臓を止められるという奇妙な特技の持ち主で、マーフィーもこの人物に教えを受けたことがある。ある時、ニアリイはダブリンの郵便局のところに立っていた銅像に、大した理由もなく自分の頭をぶつけていた。これを見つけた警官が注意しようとしたところ、偶然にもニアリイの教え子のウイリイがその場にやって来て、ニアリイを救おうとした。警官とウイリイは口論になったが、何とかウイリイは先生のニアリイを警官から引き離して、市電に乗せることができた。その後、二人は喫茶店に入ると、そこでニアリイは突然こんな言葉を口走った。

「一体どうして…」と、ニアリイはうなだれて言った、「道に迷った人間に光が与えられるのだろうか。」⁽¹⁾

この言葉は喫茶店のウェイトレスが飲み物の注文を聞きに、二人のテーブルへやって来た時に発せられた。ウェイトレスの女性とウイリイは知り合いだったので、女性がニアリイにも挨拶をした時に、ニアリイは唐突にもこの言葉を言ったのけたのである。これに対しウェイトレスは

無反応でやり過ごし、その後でコーヒーを運んできた。すると、ニアリイの様子を作者は、「飲み物を一口飲むと、ニアリイの道は明るくなった⁽¹⁾」と語る。「どうして道に迷った人間に光が与えられるのだろうか」という自問と、コーヒーを飲んで「道は明るくなった」ということとは、どう結びつくのだろうか。支離滅裂のように見えるが、敢えて推測してみるなら、こういう説明になるだろうか。ニアリイは気分が朦朧^{もうろう}として、銅像に頭を自分からぶつけた、これが「道に迷った人間」を意味する。そしてこの行為を警官に咎^{とが}められたところを、教え子のウイリイに助けられた、これが「光が与えられる」ことを意味している。つまり、自分の窮地を他人が救ってくれたことを、こう表現したのである。そして、コーヒーを飲んで「道が明るくなった」とは、警官から完全に逃れて、コーヒーを飲む程に安堵できたことを表しているのであろう。

しかし、このように物語の流れに従って解釈するとしても、これだけの推理を一般の読者が喜んでするだろうか。普通なら、ベケットの小説は飛躍が多くて分かりづらいの一言で、読み飛ばされてしまうであろう。少なくとも初めてベケットの小説を読んだ者であるなら、学者のニアリイは何か高尚なことを勝手に口走っているなとばかりに、無視するところであろう。そうすると、「道に迷った人間に光が与えられる」の表現が、窮地に立った人間は助けられるという意味だと文脈上、理解するとしても、作者のベケットはなぜこのような唐突な言葉を日常会話の中に投入するのだろうか。他人とのコミュニケーション、この場合、ウエイトレスとの会話をたとえ一言とはいえ中断するような表現を挿入して、平気でいられるのだろうか。ベケットの初期の小説『並には勝る女たちの夢』、『蹴り損の棘もうけ』、『マーフィー』、そして『ワット』には、日常の決まり切った慣行に対して、反逆の精神をあらわにしている作者が散見されるのである。

「どうして道に迷った人間に光が与えられるのか」、これを文脈から切

り離して捉えてみるのもまた興味をそそるであろう。なぜなら、この言葉が発したニアリイは、道に迷った時に光が与えられて救助されることを望んでいるのだろうか、という疑問が湧いてくるのである。彼は頭で銅像を叩いて警官に咎められているところを、知人によって助けられた。普通なら素直に救出されたことを喜べば良いところを、なぜ助けられる必要があるのかと、彼は反問を投げ掛けているのである。ニアリイがなぜ銅像を頭で叩き始めたのか、その理由を作者は、突然帽子を脱いで銅像の足をつかみ頭をぶつけた、と言うだけで説明しようとしな。銅像を叩いたことは社会への鬱憤晴らしなのか、個人的な気分からくる衝動的なのか、それとも精神的な病の発作なのか。一体、何がこの行動の原因なのか判明しないということは、「道に迷った人間に光が与えられる」という作用が、このニアリイの特定の行動だけに結びついているのではなく、この登場人物の、つまりは作者ベケットの常日頃からの思念として形成されているのではないかと推測されるのである。

普通の人間であるなら、道に迷ったとき光によって地理的状况が明らかになることを望むであろう。ところが、「どうして光が与えられるのか」と自問する人間は窮地に立たされたとき、すぐに解決策ともいえる光が提供されることを期待していない、というように理解できる。なぜすぐに救助されることを避けようとするのだろうか。それは「道に迷う」という苦難の中に、何かその者にとっては為になるような事があるからではないか。道に迷うということはその者において、その時、どのように行動したら良いのか判断を狂わされていることなのだから、彼は一刻も早く理性を取り戻し、この危機を脱出しなければならない。迷子の状態に留まっていたのでは、命の危険さえも生じかねない。こうした時、この閉塞状態から救ってくれるものを期待するのは、誰においても当然であろう。ところが、ベケットにおいてはこの錯乱した状態から脱出することを、素直には歓迎しない人物がいるのである。それがニアリイであ

って、彼は危難の時にあって、救いの光を安易に与えられることに危惧の念を抱かざるを得ない。公共物破損の罪で警官に取り調べを受けそうになったとき、これを「道に迷った」という表現で表すのが適当かどうかは疑問だが、兎に角、ニアリイは道に迷うという状況を歓迎しているように受け取れる。

道に迷うという行為は何の為になるのか。人間、苦難を体験することは、その後の人生において強靱な精神を作り出すからであろうか。それも確かにあるであろう。ところがベケットの場合、そうした試練の場としての経験を問おうとしているのではない。小説『マーフィー』、『ワット』に続いて、第二次世界大戦終了後にフランス語で執筆された小説『メルシエとカミエ』（執筆一九四六年、出版一九七〇年）は、二人の青年が特別することもなく街中をたむろして過ごす話である。ある時、彼らは人生においてどのように対処して生きるべきかを、夜の酒場で考えてみる。そして思いついたのが十三箇条の教えであって、その一つは次のような教訓であった。

完全に行きづまっていること、それは思索をもたらす⁽²⁾。

「完全に行きづまっている」、それは道に迷った状態と同じであろう。人生やること為すこと全てが思い通りにいかなくて、明確な計画が立たない。次の新たな試みを考えてみるが、それも実現しそうにない。こうして思案に暮れるわけだが、この深まった思案の積み重ねの中に、絶対的とも思える人生の指針が見つかるのであろう。しかし、人の生き方で絶対的なものなどあるだろうか。そこが問題となるわけだ。先の十三箇条の教訓の第一番としてメルシエとカミエの二人は、「金銭の欠乏は不幸である。しかし、それは幸福となりうる⁽²⁾」というのを挙げているが、金銭の欠乏が確実に幸福をもたらすという保証はない。そういう場合も

起りうるという可能性の話である以上、進んでそれに全身全霊を捧げられるかということ、躊躇の厚い壁の前に立たされる。しかしながら、ベケットはこの人生の大問題に大胆にも挑戦することを拒まない。マーフィーは収入を得るための労働は愛情を破壊すると、恋人に宣告した。ベケットは人間の生き方を根本的に問おうとしている。人間が生存するためには労働が必然であるという根底を、彼は覆そうとしている。しかし、この根本問題を完全に実現することは、マーフィーに見るように至難の上ないと言わざるを得ない。

道に迷い、袋小路に陥り、絶体絶命の窮地に身を置くことは、しかしながら、不可能と思えることをもその人の思念の中に希望として浮かび上がらせる。苦しみの中であって、人はその苦しみの意味を問い直すだろう。容易には解決できない問いであるからこそ、思念の中で反転を繰り返しながら憧憬の地を探し当てるのである。ベケットの同時代の思想家であり小説家のジョルジュ・バタイユは、『内的経験』の中で述べている。「私の心を動揺させる相矛盾した不安定な気分には脱出口がない。しかも、その脱出口がないからこそ、そうした気分は私を充足させる⁽³⁾」。「脱出口がないからこそ、私を充足させる」とバタイユは言う。人は何か新しいことを考えようとする。しかし、それは現実の有り様と食い違っていて、矛盾を生じさせる恐れがある。矛盾が生まれると知りながらも、そのことに執着しなければならぬのが、熱意を一度でも抱いた者の宿命である。これ以上一步も前には進めない。かといって退いたところで、待っているものは情熱家の死でしかない。こうした時どこにも逃げ出せないで、それでも覚悟を決めて、矛盾という罟が押し寄せるのを排除しようとする錯乱の中にこそ、奇跡と言うべき真実が与えられるのであろう。

道に迷って行く手を阻まれる。そこで人は絶望に陥る。しかし、ここで道を照らし出す光が与えられるとしたら、その人の命は救われるであ

ろうが、道に迷うことになった事情の重大性は失われてしまうであろう。単にハイキングで山道を歩いていて、登山道を見失う。これなら誰か人が通りかかって、救助されることを願うのも当然であろう。ところが、何か重大な、その人にとっては運命を決するようなことを判断しなければならぬとき、その思案がどうしても現実とは矛盾して途方に暮れてしまうことが起こる。この時、安易な妥協案に走ってしまったのでは、真の理想に近づくことは出来ない。自分の意志を貫き通そうとすると、社会との軋轢あつれきが生じる。しかし、この不可能とも思える思考の中にこそ、人間性の新しい価値が込められている。人は日常的に安楽に生きたいと願う。しかし、或る人にとっては、この安楽が人間性の尊厳をけがしているように見える。なぜ地上の幸福を捨てて、不運の真正を選ばなければならないのか。それはその道を切望した人の謎であるだろう。しかし、何かの不可能性を前にしてその事の真意を見捨ててしまうのは、ベケットのような人間性の根源を考える作家には耐え難いのであろう。道に迷うことの絶望の中に、真実への気概が示されているのである。

ニアリイの発した問い、「どうして道に迷った人間に光が与えられるのか」は、比喩的な表現となっている。ここで「光」とは救助を意味している。ところが、この文を比喩的と見なすのは一般的な場合であって、ベケットにおいては、光というのは特殊な作用を為すのである。主人公マーフィーは、光の消え去った世界を格別に愛好する。

彼〔マーフィー〕が見ることが出来るためには単なる暗闇ばかりか、彼自身に宿る暗闇が必要であることも、セリアに通告されているようだった。マーフィーは自分の暗闇ほどの暗闇はないと信じていた。⁽⁴⁾

光が与えられることを嫌う人間は、道に迷った状態を歓迎する。光に照らし出されて自分の進む道が明らかになることは、そこでの思考を放

棄して安楽な世界へと戻ることを意味している。ベケットにとっては、小説の中のマーフィーにとっては、現実の決まり切った世界は生きるだけの価値を持たない。彼は進むべき道が隠されている「暗闇」の世界にいて、彼の真に生きることの出来る世界はどこなのか思案する。この深い思案の中に身を置いている状態こそが、恐らく人間が生きることの真実を教えてくれるのであろう。その思案は、人間の生存にとっては矛盾した生き方を示すであろう。なぜなら、人間は社会の中であって労働に身を捧げて生きる糧^{かて}を確保しなければならないが、マーフィーの求めるものは精神界の自由であって、地上での栄光ではないのである。彼は言うだろう、「見ることが出来るためには、彼自身に宿る暗闇が必要である」と。彼は行き先の途絶えた暗闇の中であって、自分の生きる道を考える。しかし、暗闇は彼を取り囲んでいる外界の暗がりだけでは十分ではない。外界の暗闇は彼に思案する環境を一応与えてはくれる。まるで牢獄の中に閉じ込められたかのように、身体が幽閉された分だけ思考を自由に解放してくれるのであろう。しかし、彼はそれだけの暗闇では不十分であると断言する。

「彼自身に宿る暗闇」とは何を意味するのだろうか。マーフィーが生存している現実生活での苦悩を言っているのだろうか。彼は無職の状態であって、眠るための住居もなければ、今日の食料も事欠く有り様であると。この現実世界の窮乏はマーフィーがすでに選択した生き方としての結果であって、彼自身の内面に宿る暗闇ではない。彼自身の暗闇とは、こうした人間の現実生活を真実の生活からは掛け離れたものであると、判断を下さざるを得ない彼の精神性を表明しているのであろう。人間の社会生活に対して従順に彼の生き方を共鳴させることの出来ない孤立感を、暗闇の部分として捉えるのである。

《俺は大きな世界の人間じゃない、小さな世界の人間だ》は、マー

フィーの昔からの口癖であり、一つの信条、二つの信条であり、まず最初に否定であつた。⁽⁵⁾

マーフィーは現実の「大きな世界」ではなく、自分一人だけの「小さな世界」の人間だと言う。小さな世界とは彼の精神界を指しているのであつて、その精神の基本は現実に対して「否定」をもって対抗することであつた。自分の生存している現実世界を根本から否定しようとする人間は、その明るい陽光を絶って暗闇の精神世界に生きることを信念とする。マーフィーにとって、暗闇の世界は道に迷った閉塞状態に等しい。行き場のない精神はその肉体以上に緊張感を高めて、生存の真実を求めて彷徨を企てるであろう。

二、《幸せなベラックワ》の矛盾

ベケットは現実世界の様態を、あるがままに見ることを嫌っている。彼は自分の生存している世界が本来の場所ではないかのように、自分の視界から抹殺することを願う。『マーフィー』よりも先に執筆された短編集『蹴り損の棘もうけ』（一九三四年）の中で、主人公のベラックワは、「それにしても、目とは何になるのだろうか？ 精神の裏門。閉じておく方が安心というわけだ」⁽⁶⁾と述べて、「目」が精神にとっては余り有効ではないことを訴えている。外界の状況を判断する手段としては、人間の感覚器官の中で最も重要と考えられている目が、なぜベラックワにおいては忌避されるのであろうか。それは彼が現実の正確な様相を把握しようとするのではなく、彼の思考にとって役立つかどうかの基準で捉えているからである。彼は現実に存在するものでは満足しない。むしろ現実を否定して、彼の精神の王国を打ち立てようとする。そのとき視覚に映

し出される実際の存在物は、彼の思考作用を俗悪なものへとおとしめるのである。

ベラックワは彼の人生において怠惰をモットーとする人物である。彼は臨終に際しても、この怠惰を改悛しようとはしなかった。なぜそれ程にまで日々の日課を嫌い、生身の人間として生活することに嫌悪を覚えるのか。『蹴り損の棘もうけ』の中の短編「なんたる不幸」は、ベラックワをこう描く。

それゆえに、彼〔ヘアリー〕はその時自分の置かれた状況にかんがみて、『幸せなベラックワ』という概念に矛盾が含まれていること、ベラックワがそのような異質な人間に墮するようにと願うことには理不尽なものがあることなどを、見事ともいべき支離滅裂さで長々と述べて立るのであった。⁽⁷⁾

ここでヘアリーなる人物が言いたいことは、ベラックワという人間の人物像についてである。ベラックワはこの短編小説において、最初ルーシーという女性と結婚したが、この女性は車の事故にあい体の調子が悪かった。そして結婚後二年余りで亡くなったけれども、ベラックワはこの妻に対して憐憫の情を示さない。そして彼は資産家の娘である別の女性セルマと再婚することになるが、この時の状況をヘアリーは述べようとしている。一般的に再婚であろうと、女性と結婚しようとする男性は「幸せ」なものであろう。だから、ベラックワにおいてもそのように思われて当然であろうのに、ヘアリーは「《幸せなベラックワ》という概念には矛盾が含まれている」と語る。「幸せなベラックワ」という有り様を「概念」という捉え方で理解するのも奇妙に聞こえるが、それは兎も角として、なぜベラックワが幸せであることに「矛盾」が生じるのであろうか。彼が幸福であってはいけないのか。更にヘアリーは「幸せな

ベラックワ」を捉えて、「そのような異質な人間に墮するようにと願うことは理不尽だ」というように、幸福に対し負の評価を下すのである。

「幸せなベラックワ」とは「理不尽」な存在であるのか。それでは、理不尽でないベラックワとはどのような人物であれば良いのか。短編「愛と忘却」の中では、ベラックワは無責任な人間であり、彼の行動には確かな動機が伴っていないというように説明される。そして、「精神の家こそが彼の住み処であった」と断言する。⁽⁸⁾ベラックワは現実生活において、社会の慣習に従うような人間ではない。彼は怠惰であることに無上の喜びを覚えるのであるから、結婚生活においても、妻との共同生活を盛り上げるという努力を行わないであろう。愛の結婚生活に楽しみをもたらそうとしない人間が、幸福になることが有り得るだろうか。妻の献身によっては実現も可能かもしれない。しかし、ベラックワは愛情豊かな家庭生活、家もあり食事も十分に取れ、未来への希望に満ちた会話のある家庭生活を望むことはないであろう。彼は実生活よりも、彼の想像により作り出される「精神の家」にこそ強く憧憬を抱いている。

精神界に生存の基盤を置こうとするのがベラックワであるとするれば、先に引用した「《幸せなベラックワ》という概念に矛盾が含まれる」という表現の中の、「概念」ideaという言葉は何を意味しているのだろうか。「幸せな」という感情表現は一般的に現実の様態に対して使用されるにも係わらず、ベケットはこれを「概念」として捉えようとしている。一読すると違和感が生じるが、この作家が精神世界を重視していることを考えると、この表現も可能かと思える。「《幸せなベラックワ》という概念」とは、そもそも現実生活を生きているベラックワが存在するか、という意味になる。小説の中でベラックワは空想世界の中で生存しようとしているのであるから、現実のベラックワは仮の存在と理解される。仮の存在であれば、それは概念の世界、思考による本質的世界の存在者には相応しくないであろう。結婚生活をするベラックワは一時的な存在で

あって、真のベラックワは彼の精神世界にいる。結婚による「幸せなベラックワ」とは現実の様態を表現しているのであるから、これを「概念」として捉えるとなると、その生存形態が疑われるのである。

彼〔ベラックワ〕が逃げ出してきたのは、自分の観念や他人の観念の中にじっとして座っていることからではなかったのか？ 再び動き出せるなら、今の彼はどんな犠牲も惜しまなかったであろう！ 観念から逃げ出せるなら！⁽⁹⁾

これは「ディーン・ドーン」という話に出てくる文で、ベラックワの思考形態について語っている。彼には物事を、彼の思考上の「観念」として把握しようとする傾向がある。ところが、この思考が短時間で終了せず、長々と同一の事柄を巡って彼は逡巡を繰り返す。ついに彼は、いつまで経っても完了しない観念形成から脱出したいと願う。ところが、これが容易に叶えられないのである。それはなぜか。ベラックワには相反する事柄を結びつけて、自縄自縛に陥ることがよく起こる。この「ディーン・ドーン」の中で、語り手の「私」はこう解説する。「彼は私に例の《移動的休止》moving pauses について説明してくれた。彼には⁽¹⁰⁾ 撞着語法に対する大きな弱点があった」。

精神の中では、現実には起こり得ないようなことが容易に発生する。空を飛べない人間が翼もなしに空中に浮かんでいる。これなどは夢の中でならよく見る光景である。ベラックワは場所を移動しながら、同時に停止していることが出来るという訳である。夢の中でなら、手も足も動かさず停止しているのに空を動いていく、というような光景は起こりうる。しかし、覚醒状態においてこのような思考をするとなると、不都合が生じるであろう。先に取り上げた「幸せなベラックワ」、これが撞着語法になるかといえば、これだけを聞いたのであるなら、何の矛盾も生

じない文であろう。ところが、ベラックワとは怠惰を本領とする人物であって、家庭生活の幸福などには無関心である。こういう人物が結婚して幸せになれるかといえば、一時的には可能であろうが、永続性は望めない。従って、この人物を概念的に規定しようとする限り、「幸せなベラックワ」というワン・セットになった実像は生まれない。

「ディーン・ドーン」の中では、語り手はベラックワの撞着語法が「大きな弱点」であったと言う。人が移動しているにも係わらず停止しているという「移動的休止」においてなら、夢のような行動であるので、これを現実のこととして認識しようとする、確かに異常として受け取れる。しかし、ベケットの主人公のベラックワにしるマーフィーにしる、彼らは人間の社会的慣習に対して強い反逆精神を抱いている。彼らは生活の基本である労働に対しても、人間性の墮落であると信じている。こうした人間は必ずや周りの人間と軋轢あつれきを起こす。一方は労働が生活の必要不可欠なものと信じているのに対し、他方はこれに軽蔑の目を向ける。こうした時、社会の慣習に従うことのできない者は、なぜ働く必要があるのかという難問に直面する。彼は容易に答えを出すことは出来ないであろう。なぜなら、彼が生きている以上、労働によって収入を得、食料を確保しなければならないからである。マーフィーは労働が神から課された原罪に過ぎないとして、労働の債務を無視できるのか。彼は生存の岐路に立たされるであろう。

撞着語法は夢の中でなら起こりうることを、言葉の上で表現している。その意味上の矛盾が、必ずしも不合理なものとして認識されるわけではない。人間は言葉の表面上の意味に対し、裏側に隠されたもう一つの真意を知ろうとするからである。ベケットは小説『マロウンは死ぬ』（一九五一年）の中で、主人公に真意の捉え方を教えている。

杖をなくしてみて初めて、それが何であったのか、それが自分に

って何を意味していたのかを理解する。そして、そこからあらゆる偶然性を取り払った《杖》自体の理解、決して予想だにできなかった理解へと痛ましくも高まってゆくのだ。それは何という精神の拡大であることか。だから、我が身に降りかかってきたこの又とない破局の中に、不幸を幸福へと変えるものを私は見過ごさない。⁽¹¹⁾

杖をなくしてみて、その本質を知る。確かに杖を実際に使用している時には、その利便性を受け入れて、それが当然の在り方であると人間は信じている。もし杖がその機能を発揮しなくなれば、人はそれを杖とは呼ばず、単なる棒として認識することになる。だから、杖が歩行困難となった人間の足代わりとして有用であることを改めて意識するためには、それが紛失したり破損したりして使用不能になる必要がある。物の不在はその本質を教えるであろう。紛失物が単なる物体であるなら、その本質を理解することは比較的容易である。それでは、人間自身の幸福、不幸という精神面に関して、すぐさまその本質へと迫ることが可能であろうか。杖は歩行者の支えであった。それがなくなった今、歩けない人物の「破局」は幸福をもたらすであろうか。それはその当事者の認識次第であろう。歩行の不可能は現実生活での不幸を意味しているが、一箇所に固定させられた肉体は、その代償として人間の頭脳活動である精神を活性化させるであろう。マーフィーは体をロッキング・チェアに自ら縛り付けて、精神の自由を謳歌したではないか。

肉体の破局は精神の幸福を生み出す。確かに両者がうまく連動して、精神は肉体の場から離れ、自由の王国を作ることも可能である。ところが、そのような場合は稀であって、多くの場合、精神も苦悩の中へと落ち込む。マロウンは言うだろう、「私の内側にも外側にも、私はいかなる秩序も決して目にしたことはないのだ」と。「内側」とは精神であり、⁽¹²⁾「外側」とは肉体を含めた現実世界を指している。外側の日常世界が秩

序を持たないのは、ベケットの文学では、その主人公たちが社会に対して違和感を抱き反逆精神を発揮するからであるが、内側の精神界においても秩序を見出せないのは、「杖」の場合のように単純に破局を幸運へと変換できないためである。杖の紛失であれば、歩行の不可能が精神界の扉を開いてくれる。しかし、その精神界へと飛び立った人物はその自由の中にあっても、完全に元の現実世界から離脱した存在では有り得ない。彼は精神界にあってなお現実世界の無秩序と不幸を背負いながら、その意味を問い直すことを強いられている。杖の場合のように一つの事物に対してだけ、その本質を会得することは可能かもしれないが、人生全体の意味を問うとなると、それは一直線の真っ直ぐな秩序を構築しないのである。

精神の内面においても秩序を見出せない。その根本問題は、恐らく精神の所有者であるその人物の自己というものが、一つのまとまりあるものとして構成されないためである。自分は誰であるのかという問いは、小説『名づけえぬもの』（一九五三年）の語り手が直面する難問である。彼は自分がマロウンじゃないかと思う。マロウンとは、この作品の前に書かれたベケットの小説の主人公だ。そして、モロイじゃないかと思う。モロイとは更にその前に書かれた作品の主人公だ。しかし、それも確信が持てない。彼は自分が誰であるか、本来の名前を作者によって与えられることもなく語り続ける。そして、バジル、マフード、ワームというような名前を思いつくが、どれも自分自身と符合する名前ではない。ついには、本当の自分が話しているのかどうかさえも疑わしく思い始める。

俺はしゃべっているらしいが、これは俺じゃない。俺のことを話しているらしいが、それは俺のことじゃない。始めるに当たっては、一般論を幾つかしようか。どうするんだ、どうするつもりなんだ、どうすりゃいいんだ、こんな状態でどうやって話を進めるんだ？ まった

くのアポリアでいくのかね、それとも話す先から無効となってしまうような、あるいは遅かれ早かれ無効と分かってしまうような、肯定や否定を並べたてるのかね。⁽¹³⁾

いま話している自分が、本当に自分なのかどうか理解できない。この話者が自分のことについて話すという行為を連綿と続け、しかもその聞き手も自分しかいないという状況の中では、混乱を起こすのも当然と思える。話す内容も、話し手も、そして聞き手も自分しかいないとなれば、その話す内容の現実感も失われようし、話す場の臨場感も薄れる。問いを放つても、それに返事を返してくれる人物は自分に他ならないのだから、話す内容は堂々巡りを繰り返すばかりで、自縄自縛に陥ることになる。一体、話の内容は前へと展開することがあるのだろうか。或る時期のことについて話をする。そして、その次に起こったことに話題を進める。しかし、ここで時間の観念がまたしても狂ってしまって、出来事の発生した前後の流れが淀んでしまう。まさに語り手は、自分の物語の迷宮の中に入ってしまうことになる。「どうして道に迷った人間に光が与えられるのだろうか」と問うことの出来る人間は、まだ完全に迷宮の中に陥ってはいない。迷子になりそうになっている初期の段階であって、彼は光を得て引き返すことも可能であれば、反対に迷宮の手前で思念に没頭することも出来る。しかし、話す自分は存在している、同時に話す自分は他者だという相反する命題の前に立たされたとき、その者は「アポリア」、自家撞着の迷宮に陥るのである。

心理学者のカール・グスタフ・ユングは『心理学と錬金術』の中で、信仰についてこう言っている。「充溢せる生をおおよそなりとも捉えるのはひとり背理のみであって、一義的な明白さとか矛盾の無さとかいうものは物事の一面にしか通用せず、従って把握し難いものを表現するには不向きである⁽¹⁴⁾」。ユングは宗教に関して、論理的に矛盾したもので

ある背理が精神性を強化するには必要であることを説いているが、背理が必要とされるのは宗教においてだけでなく、人間の生存の仕方全般においてであろう。人間はなぜ生きるのか、人間はなぜ社会規範にのっとった生き方をしなければならぬのか。これは人間誰もが問う問題であり、特にベケットにおいては現実世界よりも精神界を重んじるために、必然的に問われることになる。「行きづまっていることは思索をもたらす」と言うとき、この行きづまりとは自己矛盾の中に陥っていることである。右にも左にも行けない袋小路の迷宮の中で社会規範に従っていたのでは、その者の生き方として満足のいく答えは得られない。敢えて死を覚悟しながら、真実の生を選び取らなければならない。現実の死と精神界の生とは両立するのか。ここに背理が生じるのであり、この不可能と思える生存の迷宮の中に、ベケットの人物たちは生きている。

三、迷宮の庭

ベケットの迷宮は心の中に生まれる。「行きづまっていることは思索をもたらす」とメルシエとカミエが言うとき、道に迷っている段階では、まだ彼らは迷宮の中に落ち込んではいないであろう。モロイやモランが足を痛め松葉杖をつかなければならないほど森の中をさ迷った時も、彼らは完全に迷子になることはない。モランは捜査から帰宅するのに一冬の間さ迷ったにも係わらず、森の植物を食べながら、最後には何とか家に戻ることが出来た。そもそもベケットの主人公たちは、マーフィーにしろワットにしろ、そしてウラジミールとエストラゴンの二人連れにしろ、放浪の旅を好んでいる。一体、放浪者が道に迷うことがあるだろうか。当然のことながら、それは何度でも起こり得る。しかし、迷った段階で彼らが絶望に陥ることは少なからう。なぜなら、彼らは目的地も定

めずにさ迷うことを希求しているのだから、むしろ道に迷うことを彼らの人生の一行程と捉えるであろう。道に迷って行き詰まりの袋小路に追いやられることは、彼らの思索、つまり人間が真に生きるとは何かを考える好機となる。だから、ベケット作品の登場人物が道に迷ったとしても、迷宮に陥るといような絶体絶命の危機に遭遇することは稀である。彼らの迷宮は心の中にむしろ発生する。

私〔モラン〕は眠れない時のようにやってみた。ゆっくりと心の中をさ迷い歩き、我が庭の小道のように親しいが、それでいていつも初めてのような小道、うまい具合に人気がなかったり、不思議な遭遇に心ときめいたりする小道のある迷宮の細部をこまごまと書きとめた。⁽¹⁵⁾

これは、探偵モランがモロイの捜索に出発する前の状況を語っている。彼は「心の中をさ迷い歩く」と言う。このような行為は眠れない時に、その眠りの妨げとなっている原因を探そうとして試みることになる。しかし、モランは単に眠れぬ原因探しをただけではない。その心の中の状況を、「我が庭の小道のように親しい迷宮」として捉えている。迷宮とは閉鎖的な空間の中に閉じ込められて出口を見失い、脱出方法が何としても見つからない状況のことである。ところが、モランは彼の迷宮に対して、自分の庭にあるような親しい小道が存在すると述べる。なぜ迷宮のような恐怖の場に、「親しい小道」が出現するのだろうか。親しいのは小道だけであって、その他の庭の樹木や置き石や家屋などは見知らぬ事物に過ぎないのだろうか。恐らく樹木や家屋も既知のものであろうが、夜の暗がりの中であってよく見えないのであろう。人の歩くことになる小道だけが、特に注意を引いたことになる。

迷宮の中にある小道が親しいのはその小道だけでなく、この迷宮全体がモランにとっては親しいものであることを意味する。そして、この迷

宮は彼の「心の中」に生まれている。心の中の迷宮、それは森や街中を歩いていて、道に迷った時に発生する迷宮と同質のものであろうか。心の中の迷宮は突然の切っ掛けによって発生するというよりも、常日頃から心の中を覗いてみようとすする習性を持った者に起こる。心の中を覗くことは、何か自分のことに関して思案を繰り返すことである。いつも覗いている心の中が、迷宮に変容するのだろうか。人間は何事であれ見つめ過ぎたり考え過ぎたりすると、却ってその対象がよく分からなくなってしまう。最初には東の方向と思ったものが、次に考えた時には西の方角に変わる。一回目にはその事が真実と思えたのに、二回目にはなぜか虚偽としか考えられない。物事を追求しすぎると、まったく反対の理解へと反転してしまうのである。

心の中の迷宮にあって親しいものは小道だけではない。親しいものは、その小道のある「庭」全体であるだろう。モランが心の中をさ迷うとき、彼は自分の家の庭を彷徨しているのである。彼が見る心の迷宮とは、彼の庭そのものではないだろうか。彼は自分の眺める庭の中に、自分の心を投影している。庭を見るのが先なのか、それとも心を見つめる方が先なのか。庭と心はモランにおいて重なっている。つまり、思索が思うように完結せず煩悶はんもんしているとき、その思索の場となっている庭も脱出口のない迷宮と化しているのである。

私は家の中よりも庭の方が好きだった。というのも、そこで過ごした長い時間から判断すると、私は天気が良いかろうと悪かろうと、昼間(日)や夜の大部分を庭で過ごしていたからである。

この「家の中よりも庭の方が好きだ」という人物は、先の心の中の迷宮をさ迷ったという探偵のモランではなく、彼が追求しているモロイの方である。人物は違っているが、この二人は名前がよく似ているように

同一人物のようなところがあって、一方が他方の中に自分の真なる自己を探求しているとも捉えられるであろう。そうすると、モロイは何のために家の中ではなく、「庭」で一日を過ごそうとするのか。しかも昼間だけでなく、夜もそこで過ごすと言う。彼はどうやって庭で眠るのだろうか。彼は庭で眠るのではなく、徹夜で目を覚ましていたと言うのだ。眠ることがあるとすれば、朝になってからであるらしいが、徹夜をして彼は一体何をするというのであろうか。小説の作者ベケットであるなら、夜中に作品を書くことも大いに有り得よう。作中のモロイも自分の物語を書こうとするが、それは彼の母の家に帰ってからのことであって、この庭のある家においては書き物をしていないと思われる。それでは、彼は夜中に起きたままで何をするのであろうか。

モロイが夜中に庭ですることは、彼の心の中を覗いてさ迷うことであろう。彼は果てしのない瞑想に浸るのである。それにしても家の庭に閉じこもったままで、外へ散歩にでも出ないのだろうか。散歩がモロイなる人物に相応しくないとすれば、街中をさ迷って放浪すると言い換えても良からう。放浪は、ベケットの作中人物が大いに愛好する時間の過ごし方である。ところが、モロイは外出しないで、自分の家の庭に留まると言う。神学者のヴォルフガング・タイヒェルトは、『象徴としての庭園』の中で庭について述べている。「小さくて居心地のよいものは、人がそのなかでおのれの『ふさぎの虫』に熱中することのできる完璧な楽園であった、というか、逆に言えば、よりよき世界はそのミニアチュール、つまりほかならぬ庭だけが存在することができたのであった⁽⁷⁾」。タイヒェルトは庭においてだけ「ふさぎの虫」、つまり自分の憂鬱に熱中できると語る。四方を家屋や塀や生け垣で囲われた庭は、他人によって誰からも邪魔されることのない私有物である。そこでは人は思う存分、自分の憂鬱に浸ることが許される。勿論、庭でなくとも家の中に自分用の個室を持っている者であれば、そこで十分に憂鬱を満喫することは可能で

ある。しかし、庭にはまた個室とは違った趣があるのであろう。そこでは花が咲き、枝が木陰を作り、月明かりが優しく差し込む。小鳥がさえずり、蝶が移り気に舞い、花の香りが心を包む。こうした場所では人間ごとの雑事から解放されて、自然の中で自分自身の憂鬱を遠ざけるどころか、享樂することも叶えられるのである。

モロイは庭で憂鬱を楽しんだであろうか。恐らく彼にとっては、憂鬱を楽しむというだけの精神的余裕はなかったであろう。彼は足を悪くして満足に歩くことも出来ず、自分の名前さえも忘れるほどに思考力を失っている。こうした生活の安定しない人物が憂鬱を享樂するような余裕は、とうの昔に失っていたであろう。彼が庭で楽しむとすれば、それはよく知った自分の庭をさ迷うことであるに違いない。しかし、なぜよく見慣れた場所をさ迷うのだろうか。見慣れた場所とはリラックスして解放感に浸る所でありこそすれ、決してさ迷うような所ではない。知悉した場所をそもそもさ迷うことが可能であろうか。モロイは、しかしながら、その親しい庭をさ迷うと言う。それが可能なのは、彼の庭が単に人の心を落ち着かせるための安らぎの場ではなく、彼の庭が彼の心と重なっていたからである。

庭が人の心であれば、その人は自分の見慣れた庭を何度でもさ迷うことができる。庭の有り様は季節によって変化するとはいえ、その地形は変わらない。その変化のない庭をさ迷うことが可能なのは、そこに投影された心が謎を秘めているからである。心は人の想念を何度でも受け入れることができる。何か一つのことを決定して、それが正しいと判断を下した矢先から、思考はそれが間違っていたと否定を突きつけてくる。この矛盾した二重性をも心はその中に受容して、その容量を増やしていく。心は人が何度変更を繰り返そうと、それを拒みはしないで迷路を延ばしていただくだけである。だから、庭に心を投影している人間は庭のわずかな小道を歩きながらも、無数に入り組んだ迷路を歩いているに等しい

ことになる。彼の見ているのは庭の小道であるにも係わらず、彼の想念はどこにも脱出することの出来ない袋小路の迷宮へとハマっていくのである。

しかし、私は自分のただの確信に従いたい、つまり、モロイ、お前の地方は広大で、お前は一度もそこから出なかったし、また決して出ることもないだろうと、私に告げる確信に。だから、お前がこの遠い境界線内をどこまで迷っても、永久にまったくのと同じことなのだ。⁽¹⁸⁾

モロイは彼の住んでいた地方をかつて迷った。しかし、その地方の「遠い境界線」まで歩いたところで、彼の状況は変わらない。なぜなら、自分の足で実際に歩いて自己の真実の姿を追求してみたところで、そこから得る結果は満足のいくものでは有り得なかったからである。勿論、現実の土地を放浪することが全くの徒労に終わったという訳でもなからうが、真実の自己を求めれば求めるほど、それは却って崩壊の道筋へと進むことになる。モロイは更に続けて語るだろう、「私の部屋の、ベッドの、体の境界線は、輝かしかった頃の私の地方の境界線と同じほどに私から遠い⁽¹⁹⁾」と。なぜ自分のいる部屋、ベッド、そして自分の体までもが、「境界線」を持つことになるのだろうか。モロイにとっては自分の部屋や体までもが彼からは遊離していて、彼自身が確信を持って統制できないものであるのか。自分が誰であるか分からないとき、自分に付随する体やベッドまでもが遠い彼方のものになってしまい、それを取り戻そうとすれば、手の届かない、歩いても行けない遠い距離にまで探し求めなければならないのであろう。

自分の体さえも距離を置いたところに存在している。それでは、心は自分の中に収まっているのだろうか。恐らく、そうであろう。なぜなら、

モロイはまだ自分の物語を書こうとしているのだし、彼の思考は名前を一時忘れたとはいえ、まだ十分に働いている。彼は真実の自分を探して、心の中を覗くだろう。余りに何度も覗いたものだから、彼の心は自分の家の庭のように親しくなっている。しかし、この親密さは外観だけのことには過ぎない。心の中を通っている小道はよく見慣れたものであるにも係わらず、それは安楽な場所へと導いてはくれない。それは袋小路になっていて、彼の思考を矛盾したままに閉じ込めてしまうばかりである。マロウンは言うだろう、「形を持たぬこと、言葉を言わぬこと、無関心でいること、暗闇、手探りで歩き続けること、隠れたままでいることを、永久に自分のものとした」と。心の中を覗く人間は、一体何を見ることが出来るのだろうか。暗闇を見てしまうのだろうか。その暗闇はマーフィーが言うように、何か真実なものを浮かび上がらせてくれるのだろうか。マロウンにとっては自分の身を「隠れたまま」にして、手探りで発見するしか方法がない。

モロイは昼間だけでなく、夜も覚醒したまま庭で過ごした。彼は夜の闇の中で何を見ていたのだろうか。ただし夜であっても暗黒の闇ということはなく、目が慣れれば人は回りの光景を明かりなしに十分見ることができる。まして自分のよく知った庭であれば、その有り様は目を閉じていても浮かんでくる。自分の庭を眺める人間は、一体庭に対して何を求めているのであろうか。恐らく、そこにいつもと変わらぬ自分の心を投影するのであろう。なぜなら、自分の心を見たいと思っても、容易にその姿を捉えることは難しい。鏡を前にしても、心を映し出してくれることは稀である。心は余りにあからさまに見られることを避けようとする。だから、自分の心を見たいと思えば、知悉したはずの庭に照らし合わせてみれば、心の変化に気付くであろう。果たして、庭に映る心は何か。それは思案すればするほどに、窮地に追い込まれていく迷宮の姿であるだろう。道は先へと通じているはずなのに、どこかで行き止まって、

またしても元の位置へと送り返されてしまう反復の構図に他ならない。すぐ手の届く位置にありながら、瞑想の境界線は近づくほどに遠ざかっていく。ベケットは眠らぬまま自己の真実を求めて、迷宮の庭に対峙している。

注

- (1) サミュエル・ベケット、『マーフィー』、Samuel Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 46
- (2) 『メルシエとカミエ』、Beckett, *Mercier et Camier*, Les Éditions de Minuit, 1970, p. 117
- (3) ジョルジュ・バタイユ、『内的体験』、Georges Bataille, *L'Expérience intérieure*, Gallimard, 1943, p. 45
- (4) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, p. 83
- (5) 前掲書、p. 153
- (6) 『蹴り損の棘もうけ』、Beckett, *More Pricks than Kicks*, Faber and Faber, 2010, p. 153
- (7) 前掲書、p. 124
- (8) 前掲書、p. 82
- (9) 前掲書、p. 33
- (10) 前掲書、p. 32
- (11) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, pp. 133-134
- (12) 前掲書、p. 59
- (13) 『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, Les Éditions de Minuit, 1953, pp. 7-8
- (14) カール・グスタフ・ユング、『心理学と錬金術、I』、池田紘一、鎌田道生訳、人文書院、1976年、30-31頁。Carl Gustav Jung, *Psychologie und Alchemie*, 1944
- (15) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 164
- (16) 前掲書、p. 78
- (17) ヴォルフガング・タイヒェルト、『象徴としての庭園』、岩田行一訳、青土社、1996年、222頁。Wolfgang Teichert, *Paradiesische Kulturen*, 1986

- (18) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, p. 99
- (19) 前掲書、p. 100
- (20) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, p. 9

Language Assessment Literacy in Theory and Practice

Daniel DUNKLEY

Abstract

After examining several definitions of assessment literacy, or basic knowledge of testing, the testing awareness needs of several different groups are discussed. Firstly, what do teachers need to know about testing, and how is this knowledge best delivered to them? Then we observe the needs of stakeholders who are not directly involved in education, namely, policy makers, followed by those of university administrators. Finally the situation in university teaching is presented, and recommendations for improving assessment literacy are suggested.

The term literacy has broadened considerably in its scope over the last 100 years. Initially of course it means the ability to read and write, a skill which for many centuries was the exclusive preserve of social elites. In a fairly static society and before the wide availability of texts with the invention of printing, illiteracy was hardly a handicap for the mass of the population. However, with the increasing complexity of society and the resulting need for gaining knowledge by reading and writing, individuals were motivated to make the effort to become literate, and finally in advanced countries the state enforced literacy by providing free compulsory education. Naturally this worked two ways: people were able to advance socially through their knowledge, but the

state's power to influence citizens' thought and behavior was greatly increased by the rise of mass newspapers. However, the metaphor of literacy as a positive, beneficial skill has remained, and it has come to be a metaphor for the minimum level of ability required in a certain area for an individual to function competently in society. Thus the terms *technological literacy* means the ability to operate common domestic machines such as vacuum cleaners or telephones, and more recently *computer literacy* refers to a similar familiarity with personal computers. Equally the term has been used of more abstract skills such as cultural literacy or social literacy.

While literacy is thus a metaphor for minimum competence, it must be noted that literacy is not simply a binary concept. Just as with spoken language, each user of written language only has access to a subset of the complete repertoire of grammar and vocabulary. This becomes apparent when one glances at a specialist magazine, clearly written by people with the same common basic literacy as the general reader, but who have, for professional reasons, acquired a further specialist literacy. Thus literacy is best imagined as a continuum of skill, where the lower end is occupied by those who find it hard to function smoothly in society, the middle part is the mass of the population, while the top third possess extra literacy appropriate to their profession, which depending on the case may be largely irrelevant to those in different occupations.

When we transfer the term literacy to assessment or testing in education, an initial definition seems obvious: the minimum knowledge to be able to test effectively. But there are difficulties to add: Who needs this literacy? Should there be some system of mandatory enforcement? Is it just knowledge, or practical skill? Who decides who needs what degree of literacy? The more one considers assessment literacy the more difficult it is to devise a practically useful definition. As Inbar-Lourie (2013, 304) puts it: "Language assessment literacy is a multilayered entity, and ... defining it presents a major challenge."

As for a history of the term Assessment Literacy, its first coining is ascribed to Stiggins over twenty years ago (Stiggins, R. J. (1991)), referring to the training of language teachers. However, the scope of Assessment Literacy has broadened considerably, as it was realized that more and more categories of people were affected by testing, and as tests became more widespread in scope and more globalized.

It is not only teachers who are concerned with testing, but naturally students and their families, then those who use test results such as university admissions officers or employers. Finally, anyone in society who has the power to set minimum standards in any field will probably have to decide standards on the basis of tests, whether for example in the field of immigration or professions such as medicine or banking. Thus few members of society are immune from testing, and many must deal with tests as an ancillary skill to their main field of competence and responsibility.

As a result of this expansion of the number of people connected with testing, more recent definitions have tended to be more nuanced and necessarily wordy. Thus we read Fulcher's (2012, 125) definition: "The knowledge, skills and abilities required to design, develop maintain or evaluate large-scale standardized and/or classroom based tests, familiarity with test processes and awareness of principles and concepts that guide and underpin practice, including ethics and codes of practice." This seems to be, rather than a description of the average language teacher's competence, a taxonomy of skills possessed by few other than language testing researchers. If this is taken as a statement of basic competence, then we seem to be condemning the vast majority of people concerned with testing to illiteracy or incompetence.

On the other hand, in contrast to this rather comprehensive and demanding definition, it has been pointed out that different people need different degrees of literacy. For example Taylor (2009, 25), an exam administrator and researcher,

writes “an appropriate level of assessment literacy needs to be nurtured not just among technicians ... or even among language teachers ... but much more broadly in the public domain if a better understanding of the function and values of assessment tools and their outcomes are to be realized across society.” This concept of different levels for various needs has been systematized in relation to scientific literacy by Bybee (1997), who suggests a scale of five stages, from *illiteracy*, through the lower stage of *nominal literacy*, the middle stages of *functional literacy* and *conceptual literacy* to the highest level of *multidimensional literacy*. Moving from theory to practice in assessment literacy, what these levels might mean for the various stakeholders in language testing will emerge from an analysis of several research projects and practical implementations.

Assessment literacy for teachers

Regardless of the problems of arriving at a universal working definition of assessment literacy, many projects have been undertaken to implement a greater understanding of tests in several different countries and educational fields. We will examine one example originating in the UK, and one in the USA.

The first example comes from the University of Bedfordshire, U.K. where there is a relatively new institute named CRELLA (Center for Research into English Language Learning and Assessment). Here Professor Anthony Green and his team are developing material for teacher training courses in Russia. The reason for working on assessment literacy is that they detect a lack of communication between teachers and testers, which has led to a weakness in teachers’ testing skills. Teachers could find out much more about what their students have learned and what they are not learning if they used more effective

tests. Green remarks: “I think we’re seeing a realization that teachers can actually benefit a lot from understanding how assessment works, and they can get a better understanding of what tools they can use to really find what their students are able or aren’t able to do.” (Dunkley, 2014, 15)

In addition to giving training teachers a grasp of the principles of assessment, and skill in choosing the correct test format, there is the question of washback. This is the influence of the test on classroom teaching and on students’ attitude; generally speaking if the features of the test are known, then students and teachers will pay more attention. To give but one familiar case, the introduction of a listening component in the Japanese Center examination for university entrance has led teachers and students to pay more attention to speaking and listening to English than previously, when the exam was on grammar, vocabulary and reading only. Green explains: ‘How can we harness the power of the test in ways that helps people to get something useful out of that process [of study for the test], rather than just trying to “trick the test”.’ (Dunkley, 2014, 15) In this way the test can be a stimulus to more interesting and effective teaching.

CRELLA’s project in Russia is ambitious. In co-operation with the Russian Ministry of Education and the national association of teachers of English they are realising a project known as *Promoting sustainable excellence in testing and assessment of English*. This aims to train not just new teachers entering the profession, but every secondary school teacher of languages, in the basic concepts of language testing and assessment. This policy should slowly contribute to the improvement of language teaching in Russia.

Assessment literacy online for teachers

While initial teacher training needs to include an assessment literacy course, as in Green's project above, the needs of currently serving teachers should not be neglected. These days in-service training of teachers is increasingly migrating to the internet, in a wide range of disciplines and course lengths, from short courses to diploma and Master's level offerings. It is through the internet that CAL, The Center for Applied Linguistics in Washington D.C. chose to improve assessment literacy among teachers, sponsored by the U.S. Department of Education, in a project lasting from 2005 to 2009. The result is an online tutorial entitled *Understanding Assessment: A Guide for Foreign Language Educators* (www.cal.org/flad/tutorial).

The need for a minimum level of assessment literacy was detected in several studies in which teachers' testing behavior was found to be unhelpful to their students. For example, a study of EFL teachers in Colombia (Lopez Medoza and Bernal Arandia (2009)) found two main problems resulting from a lack of testing knowledge: assessment was mainly summative (evaluating past learning) rather than formative (motivating future learning), and test scores were reported to students in term of degrees of failure rather than degrees of success, or one global grade which did not separate skills such as reading, writing, grammar and speaking, in other words ways which do not "facilitate the learning process" (p.57). To remedy these issues the authors suggest that teachers need to receive training in the making of tests and interpreting test results.

In response to various calls for improved assessment literacy among teachers, CAL developed an online tutorial, to be freely available to anyone with an internet connection. The ideal was to make it possible for all teachers to assess competently, based on the premise that "Strong properly implemented

assessment provides teachers, students and all testing stakeholders with important information about student performance and about the extent to which learning objectives have been attained in the classroom.” (Malone, 2013, 330) However, deciding on the content was a complex problem. What exactly do teachers need to know, and to what depth?

CAL’s strategy was initially to create a first version of the tutorial, then to elicit opinions and make a second version in the light of these criticisms and finally, after subjecting it to evaluation again, to make the final version. The tutorial was divided into seven sections, entitled: *introduction*, *reliability*, *validity*, *practicality*, *impact*, *putting it together*, and *resources*. There were two distinct groups of critics: language teachers and language testing experts, and the principal method of data collection was group interviews with written feedback. 44 teachers, the majority from K-12 schools and the minority from universities, covering seven different foreign languages, took part. The language testing experts, recruited from US government agencies and academe, were divided into two groups, one (17 people) taking part in a group interview and one (14 people) completing an online survey. The results showed a wide divergence between the priorities of teachers and experts: teachers were more concerned with user-friendliness, or “presentation and delivery” (*ibid*, 338) while the experts focused on testing concepts. In short, teachers wanted a quick and easily understandable tutorial, while experts favored the inclusion of detail and theory, in other words “clarity and conciseness” as opposed to “accuracy and detail.” (*ibid*, 340). In the light of these results the authors modified the tutorial to reconcile these two almost diametrically opposed points of view, but concluded with the question: “How can resource developers combine fidelity of definition with succinctness, particularly given the often nuanced and technical nature of language testing definitions?” (*ibid*, 342) These considerations are relevant not just to this specific online tutorial project, but to teacher training

courses in general, beyond the field of assessment literacy.

Assessment literacy for policy makers

As we noted above, a vast number of people are affected by testing and test results in their lifetime. These are often called the stakeholders in testing. In general tests, especially those on which life-changing decisions about college entrance or professional qualification depend, often arouse fear and anxiety in candidates, but one must remember that before tests in many fields were introduced, the alternative was the cause of great uncertainty, insecurity and inefficiency. Take for example the civil service: for centuries posts were allocated on the basis of acquaintanceship or kinship in an enveloping web of patronage, and finally only from the mid-19th century did examinations ensure that entry was based on merit rather than connections.

Far removed both from teachers and candidates are the administrators who make use of test scores to decide admission to the professions. They have crucial power, which if misused deliberately or accidentally, can have serious consequences. They are people “who use language test scores as the basis for decisions ... [and] may make assumptions about tests ... that are at odds with what is intended ... by the language testing community” (Pill and Harding, 2013, 382). Naturally they are laymen compared to language test developers or teachers, but what knowledge should be considered essential for them? Where do they need to be along the assessment literacy continuum?

One way to answer this question is to assess what administrators know and what gaps appear to exist in their knowledge. Rather than attempt this by means of a survey or a test, two researchers in Australia took an original approach: they studied a verbatim record of a parliamentary committee concerned with

professional accreditation. The committee's task was to recommend ways by which the process of registration of foreign doctors might be simplified and accelerated. Currently two tests are used to assess candidates' English skills: the IELTS test and the *Occupational English Test*, an Australia-specific test in English for medicine.

The author found that there were widespread misconceptions about the tests. The first problematic area was knowledge of tests and responsibilities. Frequently the two tests were confused, whereas they are distinct - one general, the latter occupational. Another problem was that no-one was aware which organ is responsible for setting pass marks. In fact the provider (IELTS or OET) produces results for each candidate, while the Medical Board of Australia determines what is a satisfactory result. A second area of difficulty was erroneous notions of tests and testing procedure. In one instance a committee member assumed that the tests being discussed are written only, whereas in fact they both include a speaking section. Additionally, the person who said "This community is being denied a doctor because probably her grammar is not very good" (*ibid*, 391) assumed that a written test is a grammar test. Furthermore an ignorance of test delivery practices was evident, with some participants indicating that they thought that if you take the same test twice you are looking at the same questions again, which is not true. In sum, many participants in this committee's activities showed a serious lack of knowledge about the relevant language tests.

Based on these indications, the general level of assessment literacy of those involved in the discussions ranged from *illiterate* to *nominal literacy*. The authors conclude "There is a need for a fuller understanding among policy makers, test users and the general public of the scope of language tests and the claims that can be made based on their results". (*ibid*, 401) To achieve this they recommend a PR offensive, or *language assessment communication* effort to

raise awareness.

Assessment literacy for college administrators

Many of the major public examinations around the world are taken by young people for the purpose of entering higher education. As a result, the three main stakeholders in this context are the candidates, the exam makers and the college administrators. These administrators can be in several different categories: admissions, marketing, academic and English language departments. Among these functions, admissions decisions are the most crucial, where an understanding of the tests on which admission criteria are based plays a vital role in ensuring fairness.

Recently university admissions have come to be based on a series of well-known standardized tests, especially where the admission of foreign students to English-speaking universities is concerned. In North America TOEFL is the standard, while in the UK and Australia IELTS is preferred. In certain circumstances several factors relating to each candidate, other than test scores, are considered when admitting foreign students, especially for higher degrees (Banerjee, 2003), but in many institutions, especially at the undergraduate level, only the test score is taken into account. This has led to criticism of the reliance on test scores alone. Spolsky (2008, 300) regretted that the public has “an oversimplified view of the ease of production of meaningful measurement”, and pointed out that numerical scales are blunt tools in measuring something as complex as language ability: “... proficiency is dynamic, ... a single measure at one time does not permit predicting what it will be later.”

In a recent series of studies O’Loughlin (2011, 2103) has investigated the use of proficiency test scores by admissions administrators in Australian

universities, where the usual test is IELTS. He found that the minimum score was determined more by tradition than as a result of consideration of the language needs of future students. Furthermore, there was no system for checking whether a high IELTS score on entry resulted in a more successful college career. In conclusion, it appears that there were “no beneficial educational consequences flowing from use of the test” (O’Loughlin, 2103, 366.)

In his most recent study O’Loughlin (2013) set out to analyze the assessment literacy needs of university admission staff, using an online survey and interviews. In general it was found that staff are mainly interested in basic information about IELTS, especially the minimum score needed, rather than the meaning of or reporting of the scores. The respondents were mainly satisfied with the information provided by IELTS on its website and in the printed IELTS guide (2009). However, there was a general opinion that more could be done to educate staff about the test. The author concludes that there is over-reliance on a single score and that IELTS’ own advice urging admissions decisions to be based on a broad range of criteria such as “age and motivation, educational and cultural background, first language and language learning history” (IELTS Handbook, 2009, 5) is being ignored. To improve the situation, the author suggests that web-based information should be available, to be accessed by staff according to their needs: in other words “adaptive and interactive online tutorials” (O’Loughlin, 2103, 377.)

Conclusion: the assessment literacy continuum in practice

We have seen that different stakeholders in the field of testing have widely differing assessment literacy needs, from a knowledge of concepts such as

validity and reliability in the case of teachers, to a much less specialized range of awareness for policy makers. As a result, a blanket definition such as that of Fulcher (2012) is perhaps too restrictive. A more practical definition is given by Inbar Lourie (2008, 389), who states that assessment literacy is “having the capacity to ask and answer critical questions about the purpose for assessment, about the fitness of the tool being used, about testing conditions, and about what is going to happen on the basis of the results.”

An extension of this idea appears in Taylors’s (2013) suggestion that each stakeholder group has a different assessment skill profile. To graphically illustrate her concept of differentiated assessment literacy she presents three concentric circles. The inner circle is the one closest to the tests, occupied by researchers and test makers, where theory and statistical knowledge are important. The next circle, numerically larger, is occupied by teachers, who need less theory and more practical skill. Finally the outer circle, the peripheral group, is where the public and the policy makers are to be found, needing a simplified but accurate understanding of testing. This scheme helpfully complements Pill and Harding’s (2013) notion of the assessment literacy continuum.

Where on the continuum do teachers really need to be? In a recent study of testing practice at a Japanese university, Dunkley (2004) analyzed the testing procedures of seven experienced native-speaker teachers of English “oral communication” for non-specialist freshmen. Most teachers set a written examination with a mixture of vocabulary, grammar and listening questions, while speaking was not tested directly because of the large classes (40–50 students). However, the crucial difference between these tests and large-scale high stakes tests is that the teacher has a wealth of data on the students’ progress as result of meeting them 15 times in the semester: thus additional factors such as attendance rates, attitude in class, pronunciation and homework performance

are added to the test scores to give a semester grade.

As for the teachers' attitudes to academic testing knowledge, most of them were glad that they had taken a testing module as part of their TESOL training courses, while the minority saw testing as practical activity where theory and statistics were hardly relevant. It seems therefore that for practicing teachers each person finds his or her own appropriate level of assessment literacy, depending on a number of factors. For example, the level of importance of the course plays a role: testing in a specialist subject is handled more rigorously than in a minor subject. Additionally, the students' stage in the university career affects the teachers' attitude to the test, thus for example senior students' examinations are very carefully checked for content validity, and marked with greater care, with the results reported to the students in greater detail.

As a result of these considerations, it is reasonable to conclude that assessment literacy for teachers is best furthered through its inclusion in initial teacher training courses. Subsequent refresher courses can be delivered online, to be used as and when teachers feel the need for them. For other stakeholders on the periphery, online resources and easily understandable media coverage, especially at times of year when examinations, especially university entrance examinations are a current topic (August in North America and the EU, February in Japan, for example), would be the best way to increase the level of assessment literacy. As with other types of literacy, it is only when people become aware of gaps in their knowledge that they are motivated to seek out information. Now, thanks to the new media, easily accessibility and well presented content, the motivated person can improve their level of knowledge quickly and thus achieve a suitable level of assessment literacy.

References

- Banerjee, J. (2003) Interpreting and using proficiency test scores (unpublished PhD thesis) Lancaster University, Lancaster, U.K.
- Bybee, R. W (1997) *Achieving scientific literacy: From purpose to practices* Portsmouth, NH: Heinemann
- Dunkley, D. (2004) Current practice in the testing of oral communication: a case study in a Japanese university *Aichi Gakuin General Studies Journal*, 51, 3, 73–80
- Dunkley, D. (2014) Britain's new Language testing powerhouse: an interview with Profesor Tony Green *The Language Teacher*, 45(4), 13–16
- Fulcher, G. (2012) Assessment Literacy for the Language Classroom *Language Assessment Quarterly*, 9(2), 113–132
- Inbar-Lourie (2008) Constructing a language assessment knowledge base. A focus on language assessment courses. *Language Testing*, 25(3), 385–402
- Inbar-Lourie (2013) Guest editorial to the special issue on language assessment literacy *Language Testing*, 30(3), 301–307
- Lopez Medoza, A. A. and Bernal Arandia, R. (2009) Language Testing in Colombia: A call for more teacher education and teacher training in language assessment *PROFILE*, 11(2), 55–70
- Malone, M. (2013) The essentials of assessment literacy: Contrasts between testers and users *Language Testing*, 30(3), 329–344
- O'Loughlin, K. (2011) The interpretation and use of proficiency test scores in university selection: How valid and ethical are they? *Language Assessment Quarterly*, 8(2), 146–160
- O'Loughlin, K. (2011) Developing the assessment literacy of university proficiency test users *Language Testing*, 30(3), 329–344
- Pill, J. and Harding, L. (2013) Defining the language assessment literacy gap: Evidence from a parliamentary inquiry *Language Testing*, 30(3), 381–402
- Spolsky, B. (2008) Introduction- Language Testing at 25: Maturity and Responsibility? *Language Testing*, 25(3), 297–305
- Stiggins, R. J. (1991) Assessment Literacy *Phi Delta Kappan*, 72(7), 534–539
- Taylor, L. (2009) Developing Assessment Literacy *Annual Review of Applied Linguistics*, 29, 21–36

Notes

1. The author acknowledges the receipt of an Aichi Gakuin University Research Grant to gather information at the Center for Applied Linguistics in Washington D.C. in March 2014.
2. The author acknowledges with gratitude the assistance of his colleague at Aichi Gakuin University (Liberal Studies Department) Professor Geoffrey Blair in reading and commenting on this article.

Nathaniel Hawthorne's *The House of the Seven Gables* and Marshall McLuhan's "Global Village"

Minoru MORIOKA

I.

There is a sense in which Nathaniel Hawthorne anticipates Marshall McLuhan. In McLuhan's view, electric technologies were extensions of our nervous system and the world was destined to become an interconnected society through improved technology. In his book *Understanding Media*, he named his vision of this the "Global Village." The idea for this is derived from a passage in Hawthorne's *The House of the Seven Gables*, in which one of the characters, Clifford, exclaims that the world of matter will become a great nerve with the spread of electricity. In his book *Laws of Media*, McLuhan acknowledges the strong influence from Hawthorne on his own view of the media: "Nathaniel Hawthorne was particularly sensitive to the implications of electric information and not infrequently remarked on them, as in *The House of the Seven Gables*."

At the time of the novel the idea may have sounded fanciful, but today it seems perfectly possible, for signs of it are apparent in electrical developments of media such as facsimile machines, cellular phones, compact discs, high definition TV and the Internet. According to McLuhan, the world is undergoing a vast material and psychic shift from the values of linear thinking in visual space to those of multi-sensory experience in acoustic space. Hawthorne's

writing is rich in ambiguities which produce a holistic view of the word very like McLuhan's multi-sensory, integral awareness and "Tetrad" thinking. This paper inquires into the kind of influence the novel had on McLuhan's work *Understanding Media*.

II. Clifford in *The House of the Seven Gables*

There are few public catchphrases that have stirred up as much discussion as the prediction of "Global Village" of Marshall McLuhan. He is one of the leading prophets of the electronic age. A Canadian born in 1911, McLuhan wrote twelve books and hundreds of articles. The subject that would occupy his career was the task of understanding the effects of technology on the lives of human beings. Concerning the new status of man in the new technological and media-dominated society, he said:

If the work of the city is the remaking or translating of man into a more suitable form than his nomadic ancestors achieved, then might not our current translation of our entire lives into the spiritual form of information seem to make of the entire globe, and of the human family, a single consciousness? (McLuhan, 1964: 61)

The new electronic interdependence recreates the world in the image of a global village." (McLuhan, 1962: 36)

In these statements, he affirms the existence of a "global village," which he had been developing all through the early 1960s. In the "global village," our technologies are fundamentally extensions of ourselves. Machines are extensions of the human body. The wheels are extensions of the feet. The telescope is an extension of the eye. A loudspeaker is an extension of the voice. Our machines allow us to reach out beyond the limits of our flesh. And in a

similar sense, these days, electric technologies have developed as extensions of our nervous system. The world is destined to become an interconnected society, a “global village”, through the advantage of technology.

Where did McLuhan get the idea for this prediction?: “The new electronic interdependence recreates the world in the image of a global village.” According to his cooperative researcher, Bruce R Powers, McLuhan obtained a hint from the novel, *The House of the Seven Gables* (1851) by Nathaniel Hawthorne (1804–64) in 1851. The kernel for McLuhan’s vision can be found in chapter 17, “The flight of Two Owls.” Before becoming known as an authority Media Studies, McLuhan had already lecture on the “symbolism” of Hawthorne in Wisconsin University where he began his teaching career. McLuhan generally supported multifaceted and nonlinear thinking in a position he shared with Hawthorne.

Many early readers of Hawthorne complained that he did not come to definite conclusions. Some of his novels have inconclusiveness endings. Most modern critics have found the romance form unsatisfying, while his characters seem insubstantial. But in McLuhan’s view, Hawthorne’s ambiguity is deliberate and can be made meaningful to the suitably prepared modern reader. Modern critics err when they analyze Hawthorne’s works as if they were just novels. They must be read as “romances” as Hawthorne intended. Hawthorne uses ambiguity to reveal the complexity of humanity and the dilemma man faces in achieving a unified view of existence.

Nathaniel Hawthorne published *The House of the Seven Gables* in 1851. This novel includes fantastical occurrences, improbabilities, and attempts to connect the past with the present. The connection between the past and the present is the most pressing of Hawthorne’s concerns in *The House of the Seven Gables*. The story goes like this: The House of the Seven Gables, in New England, was built in Puritan times by the respectable Colonel Pyncheon, on land acquired

by dubious means. He had had the previous owner charged with witchcraft and then bought the property for himself. The Colonel was later found dead with a bloody hand-print on his throat, giving rise to a rumor that the house was cursed. More recently, this pattern of events has repeated itself. The head of the house has been found dead, and his nephew, Clifford, imprisoned for years for his murder, on rather poor evidence. As a result, another nephew, known in the story as Judge Pyncheon, has taken his place as owner of the property. At the start of the narrative, the house has just two other inhabitants: Clifford's elderly and impoverished sister Hepzibah, and a young lodger, Holgrave, who later turns out to be the descendant of the falsely accused original landowner.

Into this household comes a 17-year-old country cousin, Phoebe Pyncheon, who has just been orphaned. Shortly afterwards, Clifford also returns home after his release from prison, a frail and broken old man, but still receptive for ideas of social progress and improvement. Around Phoebe's bright good nature, these wronged characters begin to recover some of their old energies. But Judge Pyncheon tries to repress this, until one night he is found dead. Fearing that Clifford will be accused of murder again, Hepzibah flees with him to the town's new railroad station where they embark, without any fixed destination, on a train—which at that time was still a technical novelty. This is the episode which Hawthorne humorously calls “The flight of two owls.”

Reenergized by this train escapade, Clifford eagerly chats with the conductor and passengers, although his grasp of the technical realities is quite tenuous. In the end, the episode fizzles out, as he and Hepzibah get off, pointlessly, at a desolate station in the middle of nowhere.

Meanwhile, the plot resolves itself without them. It becomes clear that the Judge's death was a natural stroke, suggesting that the same was probably true of the earlier death of Clifford's uncle. The young lodger then declares his love for Phoebe Pyncheon, and reveals his own identity as the ancient heir to the

property, in proof of which he easily retrieves the title deeds from their ancient hiding place.

One highlight of the action is in the ‘The Flight of Two Owls’ (Chapter 17): Hepzibah and Clifford set off on their strange escapade away from the house. They attract a great deal of attention as they arrive at the train station. Hepzibah wonders if this is a dream, but Clifford says that he has never been so awake before. Clifford chats with the conductor on the train, and says that the railroad is destined to do away with outdated ideas of the home and fireside, replacing them with something better. When Clifford talks to an old gentleman, Hepzibah tells him to be quiet, for others will think that he’s insane, but he continues his conversation. The old gentleman becomes vexed by Clifford’s enthusiastic reflections on such modern inventions as the telegraph. Clifford indulges in dreams of social progress for which he is entirely unqualified.

As the escape from ‘the House of the Seven Gables’ brings Clifford to life once more, in this bizarre kind of way, he draws energy from the rush of new experiences. But part of the energy is also due to the way he wants to do away with the past, represented by ‘The House of the Seven Gables,’ which is associated for Clifford with Judge Pyncheon. To Clifford, the house represents the decrepitness of the Pyncheon legacy.

In his talk with the old gentleman, Clifford praises the steam locomotive as the embodiment of modern science.

My impression is, that our wonderfully increased and still increasing facilities of locomotion are destined to bring us around again to the nomadic state. You are aware, my dear sir,—you must have observed it in your own experience, —that all human progress is in a circle; or, to use a more accurate and beautiful figure, in an ascending spiral curve. While we fancy ourselves going straight forward, and attaining, at every step, an entirely new position of affairs, we do actually return to something long

ago tried and abandoned, but which we now find etherealized, refined, and perfected to its ideal. The past is but a coarse and sensual prophecy of the present and the future. (Hawthorne, 1851: 259)

This remark by Clifford is matched by a description in McLuhan's book, *Understanding Media*.

"The medium is the message" means, in terms of the electronic age, that a totally new environment has been created. The "content" of this new environment is the old mechanized environment of the industrial age. The new environment reprocesses the old one as radically as TV is reprocessing the film. For the "content" of TV is the movie. TV is environmental and imperceptible, like all environments. We are aware only of the "content" or the old environment. (McLuhan, 1964: ix)

"The medium is the message" is no doubt McLuhan's best-known aphorism. Its fundamental meaning is that any communications medium has a far greater impact on us than the content of any communications that the medium may convey. However, his critics and casual readers have often mistaken that for a claim: the content—what it is we read in newspapers or watch on TV—is relatively unimportant. But obviously this cannot be the main point that McLuhan is making. After all, there is no such thing as a medium without content, for if it had no content, it would not be a medium. So, McLuhan prepares another explanation: "The 'content' of medium is always another medium. For instance, "The content of writing is speech, just as the written word is the content of print and print is the content of the telegraph."

McLuhan explains "The medium is the message" through the metaphor, "rear-view mirror."

When faced with a totally new situation, we tend always to attach ourselves to the objects, to the flavor of the most recent past. We look at the present through a rear-view mirror: We march backwards into the

future. (Marshall McLuhan and Quentin Fiore, 1967: 74–5)

The content of any medium is never anything else than a prior medium, taken up from its former wild, invisible state, and brought before us in full view. Not only is the content important, but also it may be the best way of examining a medium and its impact. McLuhan stresses that the content of a particular medium can aid our understanding of media in general. He points out that media suddenly become more visible and more attractive as objects of study when they are superseded by newer media, and become transformed into new content. The rear-view mirror is, like the global village, among McLuhan's easiest to understand and most powerful insights. We move into the future with our sight on the past. The telephone was first called the talking telegraph, the automobile the horseless carriage, the radio the wireless. Even the Internet is a combination and transformation of books, television, and other media such as telephone. McLuhan's notion of the "global village" is itself of course a rear-view mirror, or an attempt to understand the new world of electronic media with reference to the older world of villages.

Thus, with this observation that the "content" of medium is always another medium, McLuhan may be saying that because of the invisibility of any environment (medium) during the period of its first introduction, man is only consciously aware of the environment that has preceded it; an environment becomes fully visible (content) only when it has been superseded by a new environment; thus we are always one step behind in our view of the world.

This reflection helps to shed light on Clifford's observation quoted above: "While we fancy ourselves going straight forward, and attaining, at every step, an entirely new position of affairs, we do actually return to something long ago tried and abandoned, but which we now find etherealized, refined, and perfected to its ideal," McLuhan describes a similar implication in the preface to *Understanding Media* (Paperback Version):

When machine production was new, it gradually created an environment whose content was the old environment of agrarian life and the arts and crafts. This older environment was elevated to an art form by the new mechanical environment. The machine turned Nature into an art form. For the first time men began to regard Nature as a source of aesthetic and spiritual values. They began to marvel that earlier ages had been so unaware of the world of Nature as Art. Each new technology creates an environment that is itself regarded as corrupt and degrading. Yet the new one turns its predecessor into an art form. When writing was new, Plato transformed the old oral dialogue into an art form. When printing was new the Middle Ages became an art form. (McLuhan, 1954:, ix)

When McLuhan observes that “The machine turned Nature into an art form,” he is referring to a fundamental consequence of the competition between media: new technologies do not so much bury their predecessors as put them upstairs to a position from which they can be admired, if no longer used.

III. Teilhard de Chardin and McLuhan

Hawthorne lived during a time when the American version of Romanticism still pervaded intellectual thought; and he participated in the Transcendental Movement led by Emerson. In this sense, his formative environment was rich in reactions against rational and scientific views of nature. However, unlike many Transcendentalists who saw their connection to nature in individualistic ways, Hawthorne’s view seems to have been a more universal one that connects all parts of nature into one. It is the holistic reaction to “rational and scientific thought” that made Hawthorne (even though he was a Protestant) a figure of enduring constancy as a kind of counterpoint to prevailing moods and

narratives.

In Hawthorne's view, the artist is an individual who sets himself or herself apart from others and, as a consequence, is in turn isolated from the larger society. But in Hawthorne's cultural background, this separation was combined with specifically religious ideals such as "secular calling." For Hawthorne, America, the New Eden, is replete with uneducated citizens antagonistic to the arts and culture. At the same time, there are also characters of another kind like Holgrave in *The House of the Seven Gables*, who work in new ways or in new media (Holgrave is a photographer), allowing Hawthorne to introduce questions about the way technology influences art in addition of how the artist may feel distanced from his culture and its values. Hawthorne explores the relationship between artists and their surrounding culture, and arrives at larger, more general overview.

When Clifford and Hepzibah finally alight from the train at the end of their 'Flight of Two Owls' (Chapter 17), they are physically and metaphorically isolated, alone in an empty, abandoned town. While chatting with the old man, the ideas that Clifford proposes do not suit him in his spirit; his musings about the future indicate emotions contrary to those of Holgrave. While Holgrave approaches a changed future as a great thing, Clifford feels that there is the sense of chaos and confusion to the future, as if he does not truly understand what he is saying. Clifford is a McLuhan and a Hawthorne.

Those familiar with McLuhan will also know that McLuhan was a Roman Catholic. McLuhan was influenced by the thought of a relatively fringe Catholic paleontologist, theologian and philosopher, Teilhard de Chardin (1881–1955, who, in *The Phenomenon of Man*, spoke of technology creating "a nervous system" for humanity. McLuhan cites this part entirely.

As though dilated upon themselves, they each extended little by little the radius of their influence upon this earth which, by the same token, shrank

steadily. What, in fact, do we see happening in the modern paroxysm? It has been stated over and over again. Through the discovery yesterday of the railway, the motor car and the aeroplane, the physical influence of each man, formerly restricted to a few miles, now extends to hundreds of leagues or more. Better still: thanks to the prodigious biological event represented by the discovery of electro-magnetic waves, each individual finds himself henceforth (actively and passively) simultaneously present, over land and sea, in every corner of the earth. (McLuhan, 1962: 37)

Teilhard de Chardin's view McLuhan cites on the culture of electrical technology matches the remark of Clifford in *The House of the Seven Gables*.

Is it a fact—or have I dreamt it—that, by means of electricity, the world of matter has become a great nerve, vibrating thousands of miles in a breathless point of time? Rather, the round globe is a vast head, a brain, instinct with intelligence! Or, shall we say, it is itself a thought, nothing but thought, and no longer the substance which we deemed it! (Hawthorne, 1851: 264)

Clifford is usually calm. Why does he talk with enthusiasm? Clifford has been framed for murder by his vicious cousin, Judge Jaffrey Pyncheon. Clifford hates the past or “the old” accompanied by misfortune, so he anticipates “the new” instead of “the old.” He calls the electric telegraph “A spiritual medium.” (264) The core argument of McLuhan—our central nervous system is technologically extended to involve in the whole of mankind—has already appeared. McLuhan has accepted and speaks in *Understanding Media* as follows:

By putting our physical bodies inside our extended nervous systems, by means of electric media, we set up a dynamic by which all previous technologies that are mere extensions of hands and feet and teeth and bodily heat-controls—all such extensions of ore bodies, including cities—will be translated into information systems. Electromagnetic technology

requires utter human docility and quiescence of meditation such as benefits an organism that now wears its brain outside its skull and its nerves outside its hide. (McLuhan, 1963: 57)

Thus, the chain of Clifford, Chardin and McLuhan has been completed.

IV. Transition of Clifford and “Global Village”

Clifford also speaks of the transition. “Global Village” is made up when the world becomes like the tribe, and we obtain the metaphor, “Global Village”, on the level of the planet. In a time when “Global Village” has been achieved, the rapid transition such as from the fixed house to the mobile dwelling, from substance to spirit, and so on is available in a flash. McLuhan is enlightened by the words Clifford shouts:

Transition being so facile, what can be any man’s inducement to tarry in one spot? Why, therefore, should he build a more cumbrous habitation than can readily be carried off with him? Why should he make himself a prisoner for life in brick, and stone, and old worm-eaten timber, when he may just as easily dwell, in one sense, nowhere,—in a better sense, wherever the fit and beautiful shall offer him a home?” It is my firm belief and hopes that these terms of roof and hearth-stone, which have so long been held to embody something sacred, are soon to pass out of men’s daily use, and be forgotten. (Hawthorne, 1851: 260)

The reflection of the transition like this leads us to realizing the meaning of “Angelism” or “discarnatism.” E. Carpenter says that electricity has made angels of us all. In this case, Angels are not in the Sunday school sense of being good or having wings, but spirit freed from flesh, capable of instant transportation anywhere. “Discarnatism” is derived from McLuhan’s “discarnate

man.” McLuhan says:

Discarnate men are as weightless as an astronaut but can move much faster. He loses his sense of private identity because electronic perceptions are not related to place. (Marshall McLuhan and Bruce R. Powers, 1989: 97)

“Discarnate man” by being spiritual has the godlike attribute of being everywhere at once, which leads to the growth of centers everywhere. The notion of centers everywhere obviously relates the “global village,” McLuhan has got a hint from *The House of the Seven Gables*.

Nathaniel Hawthorne was particularly sensitive to the implications of electric information and not infrequently remarked on them, as in The House of the Seven Gables: “Is it a fact that ... by means of electricity the world of matter has become a great nerve, vibrating thousands of miles in a breathless point of time? Rather, the round globe is a vast head, a brain, instinct with intelligence! Or, shall we say, it is itself a thought, and no longer the substance which we deemed it!” When people are on the telephone or on the air, they have no physical bodies but are translated into abstract images. Their old physical beings are entirely irrelevant to the new situations. The discarnate user of electric media bypasses all former spatial restrictions and is present in many places simultaneously as a disembodied intelligence. (Marshall and Eric McLuhan, 1988: 71)

McLuhan recognizes the contributions of artists to human beings ahead of his times. For him artists are prophets. The idea of “Global Village” is also given a hint by the artist, Hawthorne. We have extended our central nervous system in a global embrace, abolishing both space and time as far as our planet is concerned. The underlying concept of McLuhan’s view of electronic technology is that it has become an extension of our senses. McLuhan suggests is that a new ability to experience almost instantly brings about the effects of our actions

on a global scale, just as we can supposedly do in our physical situations. Thus, “The new electronic interdependence recreates the world in the image of a global village”.

V. “Novel” and “Romance”

The 19th century Hawthorne writes *The House of the Seven Gables* saw the tremendous scientific advancement. Technological revolutions such as telegraph, telephone, railroads, electricity generated a kind of blind faith in the promises of science and technology to solve our ills. The furiously energetic march of progress also engendered the alienation of the individual in the face of social conformity or the religious crisis of faith. At the time, Hawthorne endeavors to restore the traditional religious belief. He admits not only the “progress” amenable to scientific technology but also divine “providence.” The idea of nineteenth-century “progress” persisted is that even religion has the operation of divine laws through unexpected agencies and conflicting events.

Hawthorne’s chief accomplishment was his ability to impress “the idea of original sin upon a nation which would like to forget it. By reminding Americans of the power and influence of original sin, Hawthorne maintained that the first and foremost real reform should be the “moral reform,” and such reform is not possible until one had remembered original sin. This position placed Hawthorne in direct disagreement with the increasingly influential Transcendentalists, whose optimism about human nature had erased sin as a check to man’s appetites and behavior. Although Hawthorne would eventually lose his battle with the Transcendentalists, he believed that the “Progress” in society is possible, but that it must be accompanied with “Providence,” where religious imagination works. His spiritual inspiration scares away a large class

of sympathies. Although his strictly New England atmosphere seems to chill and restrain his dramatic fervor, he continues to be novelist who penetrates or far into individual conscience.

Hawthorne with religious imagination writes his novels in a way cherishing symbolism rather than character, that is, “Romance.” Hawthorne distinguished between the novel and the romance in his well-known Preface to *The House of the Seven Gables*:

When a writer calls his work a Romance, it need hardly be observed that he wishes to claim a certain latitude, both as to its fashion and material, which he would not have felt himself entitled to assume, had he professed to be writing a Novel. The latter form [Novel] of composition is presumed to aim at a very minute fidelity, not merely to the possible, but to the probable and ordinary course of man’s experience. The former [Romance]—while, as a work of art, it must rigidly subject itself to laws, and while it sins unpardonably so far as it may swerve aside from the truth of the human heart—has fairly a right to present that truth under circumstances, to a great extent, of the writer’s own choosing or creation.

(Hawthorne, 1851: 1, Preface)

Although both “Novel” and “Romance” aim at the grasp of “the truth of the human heart,” but the romance achieves its goal by representational means of “the writer’s own choosing or creation,” while the novel describes “the probable and ordinary course of man’s experience.” Therefore, writing the “Novel” is restricted to “a very minute fidelity” to man’s daily realistic activities. On the other hand, writing the “Romance” can employ the improbable and extraordinary with “a certain latitude.” Hawthorne keeps the ideal and the real as his fixed points of reference in determining his artistic distance. Besides, he remarks “Romance” aims at connecting the “past” with “present”.

The point of view in which this Tale comes under the Romantic definition

lies in the attempt to connect a by-gone time with the very Present that is flitting away from us. (Hawthorne, 1851: 1, Preface)

Hawthorne seeks to create an attitude of reverence for the past, so that men may look backward their ancestry and by corollary look forward to their posterity. In the case of Puritanism, at least the memory of Puritanism, transformed in art, would serve as the new intellectual foundation for New England conservatism. In this respect, Hawthorne keeps a remembrance of the past for the future to come. Apprehension of the past ought to be fundamental to the projecting of any social reform. In fact, he wants to reform Puritanism foremost of social reform, for there is a crucial difference between his Protestantism and his ancestors' Puritanism. The former contains repentance. The latter contains penance. Hawthorne's doctrine of forgiveness requires repentance and asking a pardon from God Himself. In that case, the past, the present and the future are unified into one. In other word, all times come together at the present. As Romance has the attempt to connect the past with the present, it resembles a "rear-view mirror" McLuhan says. From the point of view of reality, for Hawthorne, the essence of reality could not be discovered by scientific materialism, but only human charity.

Hawthorne points out that "Romance" is characteristic of the nature of the past. Hawthorne is unique in the transcendentalists who always break away the past. Hawthorne says that men cannot leave the past so easily. The thought of Hawthorne is obviously similar to McLuhan's in this respect. The "Novel" "consists of rough divided segments without intuition connecting fragments. The "Novel" belongs to the left hemisphere of the human brain is the world of visual world—a world of linearity, connectiveness, logic, rationality, analysis, classification and so on. "Novel's image" is equal to Judge Pyncheon of the characters in *The House of the Seven Gables*. He is very satisfied with the money earned by exploiting his knowledge of laws. The law itself works into

the external world rather than the inner world. He is interested in extra money, dominated by the commercial greedy, and overwhelms the others.

We can contrast between prosaic Judge Pyncheon in the commercialism and poetic Clifford having artistic mood, between “Novel” and “Romance,” between the law and the literature. Hawthorne himself worried about lacking gradually of the imagination for creation for the sake of working for the Custom House. Those who have practical faculty can earn money and get a proper reputation. “Progress” belongs to the left hemisphere of the human brain’s world. McLuhan says:

Because the dominant feature of the left hemisphere is linearity and sequentiality, there are good reasons for calling it the ‘visual’ (quantitative) side of the brain; and because the dominant features of the right hemisphere are the simultaneous, holistic, and synthetic, there are good reasons for indicating it as the ‘acoustic’ (qualitative) side of the brain. The visual space is the result of left-hemisphere dominance, and its use is restricted to those cultures that have immersed themselves in the phonetic alphabet and thereby suppressed the activity of the right hemisphere.... The lineality of the left hemisphere is supported by an alphabet-based service environment of roads and transportation, and by logical or rational activities in social and legal administration. Dominance of the right hemisphere, however, depends upon a cultural milieu or environment of a simultaneous resonating character. (Marshall and Eric McLuhan, 1988: 69–72)

Hawthorne wants to enquire “the truth of the human heart” containing the darkness of the mind, and appeals the importance of imagination. He has desire to go and explore into the human deep inner life. So, he prefers to the “Romance” abundant with imagination in writing the novel. The spiritual forces of good—in particular, the frankness and rejuvenating sunshine of Phoebe embodying

<i>Left Hemisphere (Right side of body)</i>	<i>Right Hemisphere (Left side of body)</i>
<i>Speech/Verbal</i>	<i>Spatial/Musical</i>
<i>Logical, Mathematical</i>	<i>Holistic</i>
<i>Linear, Detailed</i>	<i>Artistic, Symbolic</i>
<i>Sequential</i>	<i>Simultaneous</i>
<i>Controlled</i>	<i>Emotional</i>
<i>Intellectual</i>	<i>Intuitive, Creative</i>
<i>Dominant</i>	<i>Minor (Quiet)</i>
<i>Worldly</i>	<i>Spiritual</i>
<i>Active</i>	<i>Receptive</i>
<i>Analytic</i>	<i>Synthetic, Gestalt</i>
<i>Reading, Writing, Naming</i>	<i>Facial Recognition</i>
<i>Sequential Ordering</i>	<i>Simultaneous Comprehension</i>
<i>Perception of Significant Order</i>	<i>Perception of Abstract Patterns</i>
<i>Complex Motor Sequences</i>	<i>Recognition of Complex Figures</i>

Reproduced courtesy of R.H. Trotter

(*The Laws of Media*, 68)

“Providence” and “Romance”—score in the end if less than total triumph over the forces of evil, represented in the villainy and false smiles of Jeffery (Judge) Pyncheon embodying “Progress” and “Novel.”

VI. “Acoustic Space” in *The House of the Seven Gables*

There is a scene which Holgrave and Phoebe talking each other in the mysterious moon light. Maiden Phoebe like a sunshine are taught descriptivism by Holgrave, so she does not come to be shining bright, and have to behave consciously through acquiring the habit of thinking without intuition. On the contrary, in this scene, Phoebe is superior to Holgrave. Needless to say, Holgrave is prosaic and Phoebe is poetic.

By this time, the sun had gone down, and was tinting the clouds towards the zenith with those bright hues which are not seen there until some time after sunset, and when the horizon has quite lost its richer brilliancy.... These [The moon's] silvery beams were already powerful enough to change the character of the lingering daylight. They softened and embellished the aspect of the old house; although the shadows fell deeper into the angles of its many gables, and lay brooding under the projecting story, and within the half-open door. With the lapse of every moment, the garden grew more picturesque ... The common-place characteristics—which, at noontide, it seemed to have taken a century of sordid life to accumulate,—were now transfigured by a charm of romance. A hundred mysterious years were whispering among the leaves, whenever the slight sea-breeze found its way thither and stirred them ... It seems to me [Holgrave] that I never watched the coming of so beautiful an eve, and never felt anything so very much like happiness as at this moment. (Hawthorne, 1851: 212–4)

The word “romance” appears above. The effect of Romance makes this scene attractive. There is a shift from a “Visual Space” of daytime to an “Acoustic Space” of evening, which McLuhan emphasizes.

The entire world was in the grasp of a vast material and psychic shift between the values of linear thinking, of visual, proportional space, and that of the values of the multi-sensory life, the experience of acoustic space. (Marshall McLuhan and Bruce R. Powers, 1989: Preface ix)

The reason why McLuhan also supported Hawthorne’s in the special feature of *The House of the Seven Gables*. The novel has the characteristic of Romance, Acoustic Space and Imagination. Simultaneous acoustic space is a projection of the right hemisphere of the human brain, and is built on holism, the idea that there are many centers instead of a cardinal center. Our culture has nearly completed the process of shifting its cognitive modes from the left to the right

hemisphere of the brain through the electronic technology.

McLuhan saw “Acoustic Space” as the very basis of human communication, injured or at very least damaged by the ascendance of written “linear” modes of discourse, and recaptured by electronic media. Simultaneous understanding or “integral awareness” can be seen in the “Tetrads,” an exploratory probe.

VII. “Tetrads” in *The House of the Seven Gables*

Towards the end of his life, McLuhan and his son Eric embarked on a project to establish frameworks for analyzing media environments. One of the frameworks is “Tetrad.” It consists of four questions:

1. **[ENHANCES] What does it enhance or intensify?**
2. **[OBSOLESCE] What does it render obsolete or displace?**
3. **[RETRIEVES] What does it retrieve that was previously obsolesced?**
4. **[REVERSES INTO] What does it produce or become when pressed to an extreme?** (Marshall McLuhan and Eric McLuhan, 1988: 7)

This “tetrad” of the effects of technologies is not sequential, but rather simultaneous. All four aspects are inherent from the start, and all four aspects are complementary. That is to say, the “tetrads” are right-hemisphere in character, and have each tetrad comprises two figures and two grounds. ([ENHANCES]: figure/ [OBSOLESCE] ground/ [RETRIEVES] ground/ [REVERSES INTO] figure) McLuhan invented the tetrad as a means of assessing the current cultural shift between “Visual Space” and “Acoustic Space.”

The term figure and ground were borrowed from “gestalt psychology” by the Danish art critic Edgar Rubin. All cultural situations are composed of an area of

attention (figure) and a very much larger area of inattention (ground). McLuhan explains the difference between “Visual Space” and “Acoustic Space.”

It was visual space in its aspect of container that was reflected in thinking of an ‘inside’ or ‘outside’ world. Prior the alphabet there was no ‘outside world,’ no apparent separation of inner and outer; only the metamorphic flux of modes of being.... With the return of acoustic space through the ground of electric technology, the visual forms of detachment and of separation of inside and outside were dissolved. (Marshall McLuhan and Eric McLuhan, 1988: 59)

The world of electronic technology is described as “Acoustic Space” which is holistic, spherical, discontinuous, no-homogeneous, resonant, and dynamic. It is always penetrated by other senses. On the other hand, “Visual Space” is structured as static, abstract figure minus a ground; acoustic space is a body in motion in which figure and ground transform each other through the power of resonance and interplay. When we think the relationship between figure and ground, McLuhan says like this:

In the order of things, ground comes first and the figures emerge later.... ‘The medium is the message.’ Once the old ground becomes content of a new situation it appears to ordinary attention as aesthetic figure. At the same time a new retrieval or nostalgia is born. The business of the artist has been to report on the current status of ground by exploring those forms of sensibility made available by each new mode of culture long before the average man suspects that anything has changed.” (Marshall McLuhan and Eric McLuhan, 1988: 5)

As we consider this novel, Hawthorne plays role the artist above. In the light of “tetrad,” what does the tetrad analysis the novel?

- 1. Progress, Novel, Law [ENHANCES]**
- 2. Imagination, Providence, right-hemisphere of the brain, Romance,**

literature [RETRIEVES]

3. Electronic technology, Holistic world [REVERSES INTO]

4. Progress. Visual Space, Left-hemisphere of the brain, Linear-thinking [OBSOLESCE]

The reason why Enhances and Obsolesces have “Progress,” is that Progress is apparently enhanced and Providence obsolesces, but the Progress obsolesces in fact. Technology developed and developed, so the science is enhanced. [ENHANCES] But the excessive value to the science brings about the barren mind. The technology has developed, so that electronic technology appears, we gain the “Acoustic Space.” At a glance, the “Visual Space” prospers, but the linear thinking by the left-hemisphere of the brain is on the decline.

The House of the Seven Gables is the story that the progress gradually decays and the providence restore although the providence seems to fall The superficial reading regards Hawthorne’s novel as abundant with ambiguities. Hawthorne restores the weakness and darkness of human beings as the “ground.” As a result of it, “Progress,” “Novel,” and “Visual Space” decline, then the trust to “Providence,” “Imagination,” and “Acoustic Space” is reinforced.

Works Cited

- Hawthorne, Nathaniel (1851) *The House of the Seven Gables*. New York: W. W. Norton & Company Inc., 1967.
- McLuhan, Marshall (1954) *Understanding Media: The Extensions of Man*. New York: McGraw-Hill Book Company.
- . (1962) *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. Toronto: University of Toronto Press, 2011.
- . (1964) *Understanding Media: The Extensions of Man*. Cambridge: The MIT Press, 1999.
- McLuhan, Marshall and Eric (1988) *Laws of Media: The New Science*. Toronto: University of Toronto Press, 1999.

McLuhan, Marshall and Fiore, Quentin (1967) *The Medium is the Massage: The Inventory of Effects*. San Francisco: Hardwired, 1997.

McLuhan, Marshall and Powers, Bruce R. (1989) *The Global Village*. New York: Oxford University Press.

E. M. フォースターの『モーリス』における 「書かれた言葉」の重要性

安藤 洋平

『モーリス』批評の転換点

E. M. フォースター (E. M. Forster, 1879-1970) の小説『モーリス』(Maurice, 1971) は、1914年におおかた書き上げられ、その後幾度かの修正を経て彼の死後によく出版された。著名な作家が同性愛を真っ向から描いたということから、出版当初の批評家たちの反応は厳しいものも多かった。例えば、シンシア・オージック (Cynthia Ozick) は、『モーリス』を「おとぎ話」だとして「文学作品として失敗している」と酷評している (Ozick 64)。また、ジョージ・シュタイナー (George Steiner) は、その同性愛というテーマゆえに、フォースターの有名な格言である「国家を裏切るか友人を裏切るかと迫られたら、国家を裏切る勇気を持ちたい」や「ただ結びつけよ」⁽¹⁾ の意味するところが同性愛に還元されてしまうことによって限定され狭められてしまうと指摘する (Steiner 481)。もっとも、シュタイナーの懸念は、それまで高く評価されてきたフォースターの作品群が同性愛的暗示を炙り出す再読に迫られることにより、その文学的価値を損なわれてしまうのではないかというホモフォビックなものだ。デイヴィッド・ロッジ (David Lodge) は、『モーリス』がフォースターの他の作品の価値を下げることはないにせよ、技巧に欠

けており、同性愛を直接的に描くという「誠実さよりも芸術的技術の方が重要」だと述べている (Lodge 473-474)。

そうした否定的意見の一方、ジェームズ・マレク (James Malek) は『モーリス』は単に「同性愛について」(強調は筆者、原文は引用符) の物語ではなく、「フォースターの全作品を特徴づける人間的価値 (human values)」⁽²⁾ についての物語だと評価している。転換点として『モーリス』の批評に大きな変化をもたらしたのは、ロバート・マーティン (Robert Martin) による草分けの論文「エドワード・カーペンターと『モーリス』の二重構造」(“Edward Carpenter and the Double Structure of *Maurice*,” 1983) といえよう。この論文を契機に、エドワード・カーペンター (Edward Carpenter) の自然な肉体的欲望の賛美がその主題だとして、『モーリス』は積極的に評価されるようになっていったのである。⁽³⁾ 実際、『モーリス』の執筆は、フォースターが1960年にこの小説に付した「あとがき」(Terminal Note) の中で述べているように、彼がカーペンターとその恋人ジョージ・メリル (George Merrill) の住まいを訪れたことがきっかけだった。

「書かれた言葉」

マーティンは、この逸話やフォースターがカーペンターの思想を支持していたという事実から、『モーリス』における同性愛についての捉え方 (思想) の「二重構造」を読解した。『モーリス』の粗筋をごく簡単に説明すると次のようである。主人公のモーリス・ホール (Maurice Hall) が、ケンブリッジ大学でのクライブ・ダラム (Clive Durham) との精神的なつながりを重んじて肉体的欲望を抑制するプラトニックな愛の失敗と挫折を経て、下層階級の猟番アレク・スカダー (Alec Scudder)

と肉体的欲望を充足させる関係を結ぶ。マーティンはその過程を、プラトンとジョン・アディントン・シモンズ (John Addington Symonds) の思想からカーペンターおよびウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) の思想への変遷だとして、この小説を二つの異なる思想の同性愛によって構成される物語だと論じたのだ。⁽⁴⁾

マーティンの論からもすでに明らかなように、『モーリス』は、プロットを展開させるもの、つまりは小説の構造を支えるもの、さらには、主人公モーリスを成長させるものとして哲学や思想が重要なものとなっている。クロード・サマーズ (Claude Summers) は、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の『獄中記』 (*De Profundis*, 1905) のインターテクスチュアルな影響がこの小説の細部にまで見られると指摘し、その表象を辿って論じている (Summers 148)。プラトン哲学やカーペンターの思想だけでなく、聖書、新聞記事の宇宙進化論、チャイコフスキーの伝記まで、『モーリス』においてさまざまな書物や思想など、「書かれた言葉」が物語を進展させる重要な場面で言及されているということは見逃すべきではないだろう。書物のみならず、「書かれた言葉」としては登場人物間で交わされる手紙もまた重要なものである。

たしかに、「常に学者であって、書物に意識的 (awake to the printed word)」⁽⁵⁾ (59, *Italic emphasis is mine*) なクライブが哲学、書物、知性 (/女性性) を象徴するのに対し、モーリスとアレクは自然、肉体性、本能 (/男性性) を象徴することは語りの上で非常に明らかであり、それぞれの愛の形が対極のものを表象するという図式ができる。⁽⁶⁾ しかしながら、モーリスをプラトニズムから逃れさせ、物語をビルドゥングスロマン (成長物語) へと導くのは、紛れもなく「書かれた言葉」なのである。

クライブと古典

モーリスもクライブも性についての知識を文学作品から習得した。モーリスはパブリックスクール準備学校の卒業を前にして、教員の一人であるデューシー氏 (Mr Ducie) から性についての「良い話 (good talk)」(6) を聞かされる。だがデューシーが教えた知識は、キリスト教教義に根ざす異性愛・家父長制社会における性のあり方であった。幼い頃から男性への性的指向を漠然と意識していたモーリスにとってその話は自身の体験を説明しうる「良い話」ではなかった。むしろ、師を「うそつき」(10) だと感じただけに終わったのだ。

思春期を迎えたパブリックスクール時代、モーリスは祖父が所持していた「検閲で [性的描写が] 削られてしまう前のマルティアリスの詩集」(17) から性の知識を得た。けれども彼にとってはクライブとの関係が結ばれるまでは自身のセクシュアリティについて確固とした認識がないままであったのだ。

他方のクライブにとっては書物、とりわけギリシャ古典がきわめて重要なものであった。

The boy[Clive] had always been a scholar, awake to the printed word, and the horrors the Bible evoked for him were to be laid by Plato. Never could he forget his emotion at first reading the *Phaedrus*. He saw there his malady described exquisitely, calmly, as a passion which we can direct, like any other, towards good or bad. ... Then he saw that the temperate pagan really did comprehend him, and, slipping past the Bible rather than opposing it, was offering a new guide for life. (59–60)

アダムとイヴとを人類の祖先とするキリスト教教義の異性愛主義を強

化する聖書は彼に「恐怖」を引き起こすだけであった。しかしながら、プラトンの『パイドロス』における男同士の絆の賛美は、聖書の恐怖を鎮めてくれる。そこには彼が「病癖」と思っていた同性愛的欲望が「情熱」として描かれていたのだった。「異教」としてのプラトンはクライブに聖書に反対するのではなく、むしろうまく駈かわすことを教えたのである。

生まれながらにしてクリスチャンであった彼は聖書やキリスト教教義の中にも救いを見出そうとした。デイヴィッドとジョナサンやイエス＝キリストと使徒たちとの関係も、クライブの救いとなりうるかのようではあった。だが、権威ある神聖な書物である「**經典 (the Scriptures)**」の中で提示されるキリスト教の解釈は、あくまでも異性愛を前提とする(60)。それらはホモソ・シヤル・なものではあってもホモセクシヤル・なものではなかったのだ。結局、「魂のいかなる休息も聖書の中には見出すことはできなかつた」⁽⁷⁾ため、クライブは「古典」へと惹きつけられていったのである (60)。

生まれ育った環境から当初はなんのためらいもなく「非正統派は悪であると思っていた」(34) モーリスも、クライブに魅かれていくにつれ、次第に彼が挑戦的に提示するキリスト教(聖体拝領、三位一体、キリストの贖い)への疑念に対して論理的な論駁ができなくなっていく。そしてものの三週間の内にすべてのキリスト教関連の儀式から身を引いてしまふまでに至ったのである。

後にクライブは、神が十戒の中で同性愛を断罪しなかったことから、キリスト教における性の捉え方について「歴史を書きなおそうか」(80)と提案する。特定のイデオロギーを強化する伝統、慣習、常識、規範に「書き直し」によって新たな解釈(もしくは真実)を見出そうとするクライブの一方、モーリスはクライブの高度な知識についていけなかつた。この話が持ち上がったのは、クライブがモーリスを好きになった理由を

彼の「美」＝外見/身体だと告白した時のことである。その後、クライブはモーリスが体現するようなミケランジェロの身体美への欲望への到達法として、「共通のもの」＝一般的美の賞賛と「私的なもの」＝身体への欲望ゆえの賞賛との二つがあると話したのだった(79)。これはクライブが知性を象徴し、モーリスが肉体性の象徴であることを如実に表す箇所である。

話を元に戻そう。コーンウォリス氏(Mr Cornwallis)は翻訳の授業でプラトンの『饗宴』における性的描写の箇所を「ギリシャ人たちの口にするのも嫌な悪徳」(42)として訳出するのを止めさせ省略させた。ギリシャにおいて男性間の性交渉が年長者から年少者への教育の一形態としてあったことは今更改めて言及すべきでもないだろう。クライブはそれを「純粋な学問の一特徴」として弁護し、「それを省略してしまうのはアテネ社会の主要部を省略してしまうのと同じ」と熱弁する(42)。真実を追求すべきアカデミックな場において、ホモフォビックな偏見から真実を歪めて隠蔽することはクライブの学究精神にも反するものであったのだ。

クライブはモーリスに『饗宴』を読むよう促し、そうしてクライブはモーリスに『饗宴』に言及しながら愛を告げる。ところが「偏狭な因習的魂の底までショックを受けた」モーリスは無意識にクライブの同性に対する愛の言葉に対し、“Oh, rot!” “Don’t talk nonsense” “it’s the only subject absolutely beyond the limit” “it’s the worst crime in the calendar” (48)と続けざまに非難の言葉を投げかけてしまう。そして二人はしばらく距離を置くことになってしまうことになるのだった。

[B]ooks meant so much for him[Clive] he forgot that they were a bewilderment to others. Had he trusted the body there would have been no disaster, but by linking their love to the past he linked it to the present, and

roused in his friend's mind the conventions and the fear of the law. (62)

クライブにとって精神的安息を与えてくれる「書物」の持つ意味は非常に大きかった。それゆえに彼は古典の中の「過去」の時代と「現在」の同性愛が犯罪である時代とでは、男同士の愛に対する社会的観念が異なるということを忘れてしまっていたのだった。古典の世界と現在とを混同してしまったクライブは、モーリスに「因習と掟への恐怖」を呼び起こしてしまった。その後、紆余曲折あり、二人は結ばれることになるのである。

このように、クライブにとっては自身の性認識と、モーリスとの関係を結ぶために、さらにはモーリスにセクシュアリティを自己認識させるために、古典が重要であった。モーリスにとっての救世主はもちろんキリストではなく、彼をキリスト教教義から解き放つ道を敷いたクライブ/プラトンだったのだ。権威的なテキストである古典は、つかの間とはいえ男同士の愛を達成させるのである。

古典からの脱却

しかしながら、あくまでも二人の「つながりはプラトンによって訓えられたもの」(69)、つまり「プラトニック」な関係だったのである。モーリスの欲望を喚起したのは、血肉を持つクライブという人なのであり、プラトンの著作ではなかった。モーリスは抑制できない肉体的欲望を充足させようとするものの、クライブはいつもそれを拒絶していた(85)。プラトニズムを信奉するクライブは「エクスタシーは持続しえない」が、ほかの「何か持続するもの」へと向かわせることで二人の関係を「永続的なもの」にできると考えていたのだ(85)。

やがてクライブが異性愛へと転向していくことで二人の絆は希薄になっていく。クライブが女性に魅かれるようになったのは彼が町ヘドライブに出かけた時のこと。女たちの「帽子、スカートを持ち上げる様子、香り、笑い声、ぬかるんだ道を渡るデリケートな足取り」といった「小さな詳細」が「混ざり合って魅力的な全体像を構成した」時のことがきっかけだった。しかしながら、この様子は女の断片を見ているにすぎず、極めて表層的な魅惑である。実際に彼が異性愛へと変わっていったのは、屋敷の主になるべきものとしての責任や母親からの重圧、そして因習的価値観によるものが大きい。大学を卒業後に地主として家屋敷を継ぐことになったクライブには結婚と子孫が期待されていた。モーリスとプラトニックな関係だけを望んだクライブは、つねにすでに性的な意味での「同性愛者」ではなかったのかもしれない。プラトンにおける男同士の絆は、単にクライブの哲学を支えるものであるというだけだったのだろうか。

次第に一家の中で「権力の座を確保し」(88)、家族を指揮する「前途有望で偏狭な暴君」(88)になっていたモーリスは、「酒が好き」(98)で、「ファーつきのコートに身を包んでまるで巨大な動物のよう」(110)な見てくれからも明らかなように、男性性を誇示するようになっていた。他方、クライブは病に倒れた後に同性愛的関係を後悔して精神衰弱となり、「女性化」した男となる。二人のジェンダー表象の大きな違いからも、互いに相容れない者同士であることはすでに明らかだったのである。

クライブはモーリスから離れるため、一人でギリシャ旅行に出る。その頃、モーリスはギリシャに関心がなくなっていた。

Maurice had no use for Greece. His interest in the classics had been slight and obscene, and had vanished when he loved Clive. The stories of Harmodius and Aristogeiton, of Phaedrus, of the Theban Band were well

enough for those whose hearts were empty, but no substitute for life. That Clive should occasionally prefer them puzzled him. ... Maurice hated the very word[Greece], and by a curious inversion connected it with morbidity and death. Whenever he wanted to plan, to play tennis, to talk nonsense, Greece intervened. (96-97)

クライブにとっては自身の思想の根幹となっている古典も、モーリスにとっては単にクライブを愛するための手段でしかなかった。古典において言及されるさまざまな男同士の絆は、モーリスには「人生の代わり」になどならなかった。むしろ、彼は二人の関係を常に「妨げ[る]」ギリシャを嫌い、ギリシャを「病と死」に結びつけて考えていたのである。

クライブは、ギリシャ旅行の前にモーリスとの関係を断ち切ろうと、神話の「忘却の川 (Lethe)」や聖書の挿話を用いて、二人が男同士で愛し合ったがゆえに安らかに眠れない、地獄に落ちると話す (97)。結局のところクライブは哲学としてプラトンを信奉していても、根っからのクリスチャンであったのだった。

ところが、クライブが実際に見たギリシャは、彼の期待とは裏腹に荒涼としたものだった。それはモーリスが関連づけていた「病と死」を思わせる風景であり、その描写には、“barren plains” “dying light” “dead land” “one sterility touched another” (101) といった「不毛」や「死」を意味する形容辞が用いられる。あたかもこの景色が二人の関係の「死」を表すかのように、この景色を前にしてクライブは自分が「ノーマルになった」、すなわち、異性愛者になったのだとモーリスに電報を打つのである (101)。クライブの言葉の真意を理解できないモーリスはその説明を求めるためにすぐにイギリスへ帰ってくるよう手紙で促すものの、クライブはむしろ帰省を遅らせる。

そもそも二人は「書かれた言葉」では通じ合えないのである。大学時

代からすでに二人の間に交わされる「手紙は沈黙よりももっと速く [真実を] 歪曲する」(71) ものであったのであり、破局した後も二人を隔てるものだったのである (119-120)。

結果的に二人の関係は終わりを迎え、絶望と苦悩の中モーリスは自殺を考えながら日々の生活を送り、新しい道へと進んで行くのである。クライブ/古典からの離別は、モーリスがプラトニックな愛を脱却し、この後アレクとの肉体的欲望を充足させる愛を築くための準備段階だったとでもいえよう。

新宇宙進化論

自殺を考えるモーリスに啓示的瞬間を与え、人生を生き抜く決心をさせたのが祖父グレイス氏 (Mr Grace) の存在であり、そしてこの祖父が信じていた「新宇宙進化論 (a new cosmogony)」(121) だった。祖父の宇宙進化論の解釈の根底にあるのはあくまでもキリスト教的思想を反映したものである。その要点は、神が太陽の中に存在しており、太陽の黒点は神の啓示であるというものだ (121)。この「新説」(122) はモーリスの人生にとって一つのターニング・ポイントとなる。

‘Maurice, you read the papers. You’ve seen the new theory—’ It was that a meteor swarm impinged on the rings of Saturn, and chipped pieces off them that fell into the sun. ... They were chipped off and reabsorbed into the good! Courteous and grave, the young man listened until a fear seized him that this tosh might be true. The fear was momentary, yet started *one of those rearrangements that affect the whole character*. It left him with the conviction that his grandfather was convinced. One more human being

had come alive. He had accomplished an act of creation, and as he did so
 Death turned her head away. (122, *Italic emphasis is mine*)

流星が土星の環にぶつかり、その破片が太陽へと吸収されていく。この新聞記事について聞かされたモーリスは、この現象が現実起こりうるかもしれないと恐怖を感じる。その恐怖はモーリスの「性格全体に影響を与えるような再調整の一つ」をもたらすのである。祖父の言葉「内なる力を、魂を、解き放て。しかしまだだ。夜が来るまでだめだ」(123)の「夜」とはアレクとの出会いへの伏線であることはいうまでもない。繰り返される「内なる光」、そして「生きた心」からの助言である「親切にせよ」という言葉は、モーリスの心に留まり、「彼[モーリス]の内部で始まっていた再調整を続けた」のであった(123)。

デブラ・ラシク(Debrah Raschke)もモーリスにとってこの宇宙進化論が重要であったと論じている。ラシクは太陽の黒点をキリスト教教義というよりプラトンの理想としての「影」だと解釈し、元来、不吉な象徴である土星のリングの破片が生命の源としての太陽に吸収されることについて、闇と光、善と悪の混合だという。ラシクはそこに二項対立思考の脱構築の可能性を読み取っており、性的なものや精神的なもの、そしてヘテロセクシュアルとホモセクシュアルには厳密な定義がないのだと述べている(Raschke 161)。それは結果として、アレクのバイセクシュアリティやモーリスがアレクと結ぶことになる階級差を超える関係の予兆と考えられるのである。

モーリスにとってこの新宇宙進化論との出会いとは、これまでのキリスト教的思想や規範的価値観と彼自身の欲望との間、つまり、社会的制約の中で相反するものが妥協・折衷することの可能性が初めて示された啓示的瞬間といえる。だからこそ、この新説が彼の「性格全体」を「再調整」したのである。

チャイコフスキーの伝記

モーリスは、医学や催眠療法を頼って同性愛を「治療」しようとしていた頃のある日、チャイコフスキーのシンフォニーが演奏されるコンサートへ出かけることになる。そこでケンブリッジ時代の先輩であるリズリー (Risley) に再会し、チャイコフスキーが甥に恋をして『悲愴』 (*The Pathetic Symphony*) をその甥に捧げたという話を聞かされる (141)。モーリスはすぐにチャイコフスキーの伝記を読む。

[T]he episode of the composer[Tchaikovsky]'s marriage conveys little to the normal reader, who vaguely assumes incompatibility, but it thrilled Maurice. He knew what the disaster meant ... Reading on, he made the acquaintance of 'Bob', the wonderful nephew to whom Tchaikovsky turns after the breakdown, and in whom is his spiritual and musical resurrection. The book blew off the gathering dust and he respected it as the one literary work that had ever helped him. But it only helped him backwards. (141-142)

『モーリス』においてチャイコフスキーへの言及はこの部分のほかにもう一ヶ所あり、それはモーリスがケンブリッジのリズリーの部屋でクラブに初めて出逢ったその時である (28)。どちらもモーリスにとっての重要な転換点となっており、この小説におけるチャイコフスキーの重要性はブレット・キーリング (Bret Keeling) がすでに詳しく論じているため、本稿で詳しく追って論じる必要はないだろう。そのキーリングの指摘でとりわけ興味深いのは、チャイコフスキーの自伝を読む前までのモーリスは、自身の同性愛について「困難 (trouble)」という言葉で医師に説明していたものの、これ以降は「状況 (situation)」と呼ぶよ

うになるということだ。⁽⁸⁾チャイコフスキーの伝記はモーリスが「後退 (backward) するのを助けただけだった」と語られるが、キーリングの考察を踏まえれば、ここでの「後退」はこの語彙が本来持つ否定的な含蓄はないことは明らかである。簡潔に言えば、モーリスは「後退」することによって、再び自身の性指向に向き合うことができるようになっていくのである。

チャイコフスキーの伝記は「自分を助けてくれた唯一の文学作品としてこれに敬意を覚えた」というほど彼にとって重要なものとなった。「積もった塵を吹き飛ばし [て]」くれたこの伝記は、新宇宙進化論と同様にモーリスにターニング・ポイントとしての救いを与えたのである。

書記言語の規則を外れる手紙

この後、モーリスはクライブの屋敷ペンジ邸 (Penge) に猟番として仕えるアレクと出逢い、肉体関係を持つ。しかしながら、モーリスは階級意識や因習から現在の地位や家族を捨ててアレクとの関係を続けることに踏み切れず、ペンジ邸とアレクを避けるようになる。そこにアレクから電報と手紙が次々と届く。最初に届いた電報では、「戻ってきてください。今夜ポートハウスで待っています」(183) とだけ書かれていた。次に一通目の手紙が届く。その手紙が“I have [the] key” (184) という言葉を含んでいたことから、モーリスはこの手紙を「ゆすり」と考え、アレクとの肉体関係が暴露されてしまうのではないかという恐怖心から返事を書かない。

実を結ばない催眠療法からの帰り道、公園の外を王と女王が通り過ぎるため、モーリスは脱帽せねばならなかった。この時、彼は王室の者たちを「軽蔑した」(190)。「自分ではなくて、彼らが輪の柵の中にいるの

だ」(190)、つまり、規範的価値観の呪縛から逃れられずにいる人たちの方がむしろ捕われた存在なのだと感じたのである。しかしながら、と同時に、階級意識にもひどく縛られたままでもあった—「俺は自分の階級に属してはいるが、それは決まっていることなんだ」(191)。

このような葛藤を抱く中、アレクから新たな「ひどく長い (beastly long)」(192) 手紙が届く⁽⁹⁾。先の手紙と同様、文法的誤りも散見され、話し言葉をそのまま文字で表した手紙は、アレクの出身階級を如実に象徴する。デヤン・クズマノヴィッチ (Dejan Kuzmanovic) が指摘するように、この手紙にはアレク的心情が極めて混乱しているのを見て取ることができる。「脅し、嘆願、自己弁護、高慢、罪、ささいな話」(Kuzmanovic 207) といった様々な感情が入り乱れ、彼が実際に最も主張したいことは何なのか曖昧である。クズマノヴィッチは、アレクもモーリスと同様に階級意識に捕われた人物だと指摘し、アレクはモーリスに階級意識から逃れる助けを求めているのだと考察している (Kuzmanovic 208–209)。また、石和田昌利も、この二通目の手紙を、モーリスと再び関係を持つための「策略の手段」だと指摘し、「現在の状況から救い出してもらふことを求める悲鳴」だと述べている (石和田 19)。そのような読みは妥当であろう。なぜなら小説中に実際言及されているようにアレクは「[階級] 社会に埋め込まれた一人の男」(209) であるからだ。

しかし、この手紙の重要性はモーリスとアレクとの関係を進展させるところにある。アレクの手紙の中での混乱状態はモーリスの混乱した心情をもまた表していると考えられる。

Why had he flung out these words, some foul, many stupid, some gracious? ... [I]t seemed *the sort of letter he might have written himself*. Muddle-headed? How about muddle-headed? If so, it was *his own line!* (193, *Italic emphasis is mine*)

モーリスが不可解に感じる様々な感情表現の入り乱れたアレクの手紙は、「自分自身が書いたかもしれないような手紙」だった。もしもアレクが「頭が混乱した状態」であるのなら、手紙の中の彼の混乱した言葉は、モーリス自身の言葉でありうるということを痛感する。この手紙を読んでようやくモーリスはアレクと再会する決意を固める。書記言語の規則を逸する手紙（に書かれた言葉）は、モーリスを規範から逸する道にしかと導いていく。この時、モーリスはアレクに自身の混乱状態を投影したわけだが、そうしたアレクへの自己投影が次のシーンでもキーとなる。

モーリスは再会の場所として大英博物館を指定した。アレクが同性愛の嫌でモーリスをゆすろうとして緊迫感が流れる中、偶然パブリックスクール準備学校時代の恩師デューシーに再会する。デューシーはモーリスの「声」で彼に気づきはしたものの、名前を思い出すことができない。これはモーリスが知性よりも肉体性の象徴であることの例となる出来事である。この時、モーリスは「僕の名前はスカダーです」（199）とアレクの名を騙る。モーリスは「それ〔僕の名前はスカダーです〕を言葉にしたとき、[なぜそうしたのかという]理由が分かっていた」（199）。彼は直感的かつ意識的に「スカダー」を名乗ったのである。似た者同士の二人の感情が手紙＝書き言葉によって重なり合ったように、今度は発話行為によって二人が一つになるのである。

窮地を悟られないよう巧みにデューシーを躲したモーリスの勇氣に、アレクはゆすりを降参するのである。すでにモーリスもアレクも共に展示物には関心をなくしていた。まるで、二人が結ばれた今、学問追求が経済的に可能な上層中産階級や、知性（クライブ）を象徴するものとしての古典/ギリシャに関心をなくすかのように。「この時から、二人は意識的に互いを愛するようになった」（202）。モーリスは地位を捨てて二人で英国内で生きて行こうと提案する。しかし今度はアレクの方が階級

差を超える関係の未来を悲観し、移住先のアルゼンチンでの将来を選ぶ。モーリスはアレクもまた自分と同じように階級意識や因習に捕われた人なのだと、「ある意味、二人は一人の人間なのだ」(207)と感じる。結末としては、モーリスはアレクからのボートハウスに来るようにと書かれた電報と入れ違いでサウサンプトンまで出発を見送りに行き、アレクが港に現れないことで彼の所在を察してボートハウスで結ばれることになる。「二人は階級の外で、親類も金もなしに生きて行かなくてはならない」けれども、「英国は二人に属している」(212)のだと語られるとき、そこには、文明国としてではなく、緑の国としての英国への憧憬と希望とが込められているのだ。⁽¹⁰⁾

クライブに焦点化される結末の意味

二人が結ばれた章は、アレクの言葉「これでもう俺たちは離れ離れにならないだろう。もう終わったんだ」(213)で締めくくられる。フォースターが「あとがき」において「ハッピーエンディングが必須だった」(220)と述べているように、当然このシーンで小説は結末を迎えても良いはずである。しかしながらこの後もう一章が追加され、クライブが再び登場し、語りは彼に焦点化されることになる。フォースターはこの章について、「唯一の可能な結末だった」(223)としている。

クライブは選挙のための「嘆願書 (the printed appeal)」を作成しているところだったが、これに「満足していなかった」(214)。「書かれた言葉」の機能がモーリス/アレクにとって重要である一方、クライブが「書かれた言葉」に満足できない状態であることは印象的である。モーリスはクライブにアレクとの関係を告白しにやって来た。しかし、クライブの反応は、かつてモーリスがクライブの告白に対して発したものと同様、

「なんてグロテスクな知らせなんだ」(215) というホモフォビクなものであった。自身のことを「恐ろしいほどに哲学者」と明言するクライブにとり、「男同士のあらゆる関係にとって唯一の許しはそれが純粹にプラトニックであること」であって、下層階級の男と肉体関係を結んだモーリスはクライブにとって「怪物」のように思われた(216)。クライブはモーリスを説得して本来彼が居るべき場所へと引き戻そうとするものの、モーリスは耳を貸さない。なぜなら、モーリスは「アドバイスを受けに来たのでも、思想や観念について話しに来たのでもな[く]」(216)、ただ(別れを)告げに来ただけで、彼にとってクライブはすでに「過去に属している」(217) からだった。

クライブが話しをしている間にモーリスはすでに姿を消していた。彼はクライブの前からも、そして語り/テキストからも姿を消してしまうのである。そして語りの焦点化はクライブに移行したままで、語り手はクライブの人生の終わりまで見通し、俯瞰で伝えている。

To the end of his life Clive was not sure of the exact moment of [Maurice's] departure, and with the approach of old age he grew uncertain whether the moment had yet occurred. The Blue Room would glimmer, ferns undulate. Out of some eternal Cambridge his friend began beckoning to him, clothed in the sun, and shaking out the scents and sounds of May Term. (218)

「青い部屋」「シダ」「ケンブリッジ」とは、すべてモーリスとの関係を表すものである。晩年まで脳裏に焼きついた「手招きをする」モーリスの残像は、異性愛を選んでモーリスとの関係を断ち切ったことへのクライブの後悔を意味するのであろうか。

ジョン・フレッチャー (John Fletcher) は、モーリス/アレク (=カー

ペンター/メルル)の「男らしい愛 (masculine love)」を構築・称揚するために、フォースター自身を表すような知的/「女性的」なクライブを排除するのだとして、『モーリス』を「フォースターの自己排除」の物語と読んで⁽¹¹⁾いる。フォースターの自己投影をクライブに見るフレッチャーの意見は示唆に富むものである。もしくは、真の欲望を抑圧して「偽装結婚」に落ち着かざるをえない同性愛者たちも多くいるということ⁽¹²⁾をクライブによって同情的に示したとも考えられよう。またもしくは、プラトン主義の「哲学者」であるクライブのように、プラトニックな関係を超える男同士の愛は理解できない者もいるということ⁽¹²⁾をただ示したのであろうか。いずれにせよ、語りに回帰したクライブのモーリスへの愛は完全に断ち切られていないことを匂わせ、物語は結末となるのである。

興味深いことに、そして皮肉なことに、先に言及したクライブの「歴史を書きなおそうか」(80)という提案は実践されることはなかった。因習に固執する彼には、歴史に「書き直し」によって新たな意味を付与することができないのである。そもそも、歴史や「事実」というものが伝聞や個人の感情による誇張などを通して歪曲された結果としての「フィクション」であることはいままでもないが、クライブのように特定のイデオロギー下に生きる者には「事実」として受け入れられる歴史観を逸することができなかったということはきわめて象徴的である。

エクリチュールとしての「書かれた言葉」

モーリスの心情の変化やアレクとの関係にとって、いくつもの「書かれた言葉」が重要な役割を担っていることはこれまで見てきたとおりである。古典(ギリシャ)だけでなく、ペンジ邸に牧師が出入りしていることや、聖書の挿話を用いてモーリスと関係を断ち切ろうと説得したこ

と、彼が結婚によって異性愛制度へと入って行くことを考えれば、聖書もまたクライブを表すものと考えられるだろう。こうした学問的・宗教的・歴史的・文化的に権威ある「古い書かれた言葉」がクライブを象徴する一方、モーリスには、新理論としての宇宙進化論、当時の英国において紹介されたばかりの新しい作曲家であったチャイコフスキーの同性愛的な逸話を含む伝記という「新しい書かれた言葉」が重要なものとして機能していた。その最たるものが下層階級の者からの文法規則、書記言語の規範を逸する手紙である。科学理論、伝記、手紙を同一のレベルに並べて考えることは突飛に思われるかもしれない。しかしながら、どれもが実際的な現象・人物を表すものであることに共通点があることは見逃すべきではないだろう。とりわけ手紙は私的な心情を露呈し前景化する情緒的な側面の強いものであるから、アレク（そしてモーリス）という「個人」をより如実に示すものである。対照的に古典や聖書は、実際的なものの言語化というよりは、形而上のものを言語化したもの、いわゆる「フィクション」である。

モーリスに影響を与えた「新しい書かれた言葉」は、モーリスの人生にとって古典的テキストの特権的優位性を回避するものとして機能する。とりわけアレクの手紙はより一層、「エクリチュール」としての脱構築的様相を呈するものである。『モーリス』において、因習・規範・古い伝統といった権威を外れる「新しい書かれた言葉」をとおして、社会制度を外れる関係は築き上げられ、達成される。こうした意味で、「書かれた言葉」はこの小説の中で極めて重要なものといえるだろう。

そして何より、1914年には原形が書き上げられていた『モーリス』自体が1971年に出版された時にでさえ同性愛を真っ向から描いた「新しい小説」だったのである。フォースターは『モーリス』を書くという行為（エクリチュール）によって文学作品の（異性愛主義）伝統を打ち破ったのである。

フォスターにとっては、モーリスやアレクのような自分が実際に愛したハードボイルドな肉体派の男性性を自身が構築することは困難だった。しかし、インテリである彼は肉体で戦う者ではなく、「ペンで戦う者」だったのであり、規範的価値観に異議申し立てする作家である彼にとって、「言葉は武器」となる重要なものであったのだ (Stone 351)。フォスターは『モーリス』というテキストをとおして、「言葉」という「武器」によって特権的思想や古典に抗うことで、言語文化における階層秩序を切り崩そうとしたように思われる。

すべてを捨てた二人が森の中へと消えて行くエンディングは、ポール・ペピス (Paul Peppis) がいうように「悲観的」なようにも思われ、フォスターの意図とは違って「あまりハッピー [エンディング] ではないようだ」とも指摘できる (Peppis 58-59)。また、ジョン・コーマー (John Colmer) がいうように、「勝利というより敗北というほうが説得力ある」 (Colmer 126) のかもしれない。けれども、階級差を超える絆こそまさにフォスターが求めた「個人的関係」ともいえる (Colmer 126)。最終的にフォスターは、「階級の外で、親類も金もなしに生きて行 [く]」 (212) ことを選んだモーリスとアレクとを「書かれた言葉」からなるテキスト (という言語によって構築される世界) 自体から逃れさせることで、彼らを語り/読みという権力からも自由にしたかったのであろうか。⁽³⁾

注

本稿は、日本英文学会中部支部第65回大会 (2013年10月5日、椋山学園大学) における研究発表の原稿に加筆・修正を施したものである。

- (1) 前者は、エッセー“*What I Believe*” (1939) において、“if I had to choose between betraying my country and betraying my friend, I hope I should have the guts to betray my country” (Forster, *Two Cheers for Democracy*, 68) と明言され

た言葉であり、後者は、第4作目の小説 *Howards End* (1910) のエピソード “Only connect …” で、ヒロイン Margaret Schlegel (小説のテーマとして) の異なる価値観の結びつけの試みを要約する言葉である。この “Only connect …” は Forster の文学的テーゼとして受け入れられていることは周知のことである。

- (2) “It was wrong to regard the novel as being exclusively or primarily ‘about’ homosexuality. Its principal concerns are spiritual life, liberation, psychological wholeness, the value of the individual, moral responsibility, the ennobling power of love, responsiveness to life’s variety and mystery—in short, most of the human values that *may help some* people attain these blessings or discover these values.” (James Malek’s unpublished essay, “Tackling Tribal Prejudices: Norms in Forster’s Homosexual Fiction,” 32 quoted in Claude Summers, 142, *Italic emphasis in original*)
- (3) Robert Martin と同じように1983年に、主人公 Maurice が Clive とのプラトニックな愛を経て、Edward Carpenter が模範としての Alec との階級差を超える肉体的欲望称揚の愛へ移行するという読解は、Claude Summers によっても論じられている。
- (4) Martin のこの単純な二重構造に対し、John Fletcher は、Symonds と Whitman は交流があり、思想的にも恩を受けていたと指摘している (Fletcher 66)。
- (5) 本稿における *Maurice* からの引用は、E. M. Forster, *Maurice* (Penguin, 2005) に拠り、以下引用箇所末尾に () で頁数のみを記す。
- (6) Howard Booth は、*Maurice* の関心は、「本能と言語」にあると述べている (Booth 185)。
- (7) Eve Sedgwick は、*Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire* (1985) において、家父長制社会におけるホモソーシャルな男同士の絆には、無意識のホモセクシュアルな欲望とその切断があると指摘し、女性嫌悪/排除と同性的嫌悪がそれを支えていると論じた。
- (8) 詳しくは Keeling, ““No Trace of Presence”: Tchaikovsky and the Sixth in Forster’s *Maurice*” を参照。なお、本稿では頁数のない電子版を参照したため、引用頁数は表記しない。
- (9) Alec からの「ひどく長い」手紙は次のようである。

Mr Hall, Mr Borenius has just spoke to me. Sir, you do not treat me fairly. I am sailing next week, per s.s.Normania. I wrote you I am going, it is not fair you never write to me. I come of a respectful family, I don’t think it fair to treat me

like a dog. My father is a respectable tradesman. I am going to be on my own in the Argentine. You say ‘Alec, you are a dear fellow’; but you do not write. *I know about you and Mr Durham*. Why do you say ‘call me Maurice’, and then treat me so unfairly? Mr Hall, I am coming to London Tuesday. If you do not want me at your home say where in London, you had better see me—I would make you sorry for it. Sir, nothing of note has occurred since you left Penge. Cricket seems over, some of the great trees as lost some of their leaves, which is very early. Has Mr Borenius spoken to you about certain girls? I can’t help being rather rough, it is some men’s nature, but you should not treat me like a dog. It was before you came. It is natural to want a girl, you cannot go against human nature. Mr Borenius found out about the girls through the new communion class. He has just spoken to me. I have never come like that to a gentleman before. Were you annoyed at being disturbed so early? Sir, it was your fault, your head was on me. I had my work, I was Mr Durham’s servant, not yours. I am not your servant, I will not be treated as your servant, and I don’t care if the world knows it. I will show respect *where it’s due only*, that is to say to gentleman who are gentleman. Simcox says, ‘Mr Hall says to put him in about eighth.’ I put you in fifth, but I was captain, and you have no right to treat me unfairly on that account. ... P.S. *I know something*. (192, *Italic emphasis and all spelling and grammatical errors in original*)

- (10) Jeff Bush は、Forster が *Maurice* に付した “Terminal Note” においては、“Forster’s passion for the greenwood” (Bush 1) が明白であるゆえ、“Forster presents the greenwood not only as a lost paradise but as a place where people, particularly homosexual people, could lose themselves in anonymity” (Bush 2) と述べ、“[t]he outside is a place where people can embrace anonymity and escape identification, a place where true subjectivity, and sexuality, can be experienced” (Bush 6) と論じている。
- (11) John Fletcher は、“Forster’s self-erasure” を *Maurice* 読解の主題としながら、“the gradual but systematic exclusion of the Forsterian intellectual from the novel’s final vision of masculine love” (Fletcher 65) として伝記的逸話を含めた考察を行っている。
- (12) Joshua Adair は、先の Martin の論が Clive を軽視していることを指摘する。“Durham negates his desire, silencing himself, but preserving his position within society” (Adair 55) として、当時の同性愛者たちが「社会的地位、影響、特権、もちろん、自由を保持するため」に結婚生活に入っていかなざるをえ

なかった (Adair 59) という。それゆえ、“the idyllic escape at the novel’s end excludes Clive ... because the self-denial and thwarted desire of his narrative most effectively mirrors the realities of homosexuality in early twentieth-century English society” (Adair 53) と、Clive こそが *Maurice* において、当時の文化的状況における最も一般的な同性愛者であると述べている。

- (13) Clive に語りの焦点化がなされたまま小説が終わりとなるのは興味深い。Forster は、Clive が因習や規範を重んじたゆえに、彼を生涯、語り/「書かれた言葉」という言語規範の世界に縛ったままとしたのだろうか。

引用文献

- Adair, Joshua G. “A Love That Cares Not Speak Its Name: Clive Durham as Narrative Guide in E. M. Forster’s *Maurice*.” *Skase Journal of Literary Studies* 2.1 (2010): 51–66.
- Booth, Howard J. “*Maurice*.” *The Cambridge Companion to E. M. Forster*. Ed. David Bradshaw. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 173–87.
- Bush, Jeff. “‘I’d rather be dirty’: The Queering of the Greenwood in E. M. Forster’s *Maurice*.” *Dandelion: Postgraduate Arts Journal & Research Network* 4.1 (Spring 2013): 1–13.
- Fletcher, John. “Forster’s Self-erasure: *Maurice* and the Scene of Masculine Love.” *Sexual Sameness: Textual Differences in Lesbian and Gay Writing*. Ed. Joseph Bristow. London: Routledge, 1992. 64–90.
- Forster, E. M. *Maurice*. London: Penguin, 2005.
- Keeling, Bret. L. ““No Trace of Presence”: Tchaikovsky and the Sixth in Forster’s *Maurice*.” *Mosaic* 26.1 (March 2003): 85–101.
- Kuzmanovic, Dejan. “Seduction Rhetoric, Masculinity, and Homoeroticism in Wilde, Gide, Stoker, and Forster.” PhD dissertation. Rice University. 2003.
- Lodge, David. “Before the Deluge.” *E. M. Forster: The Critical Heritage*. Ed. Philip Gardner. London: Routledge, 1973. 473–74.
- Martin, Robert K. “Edward Carpenter and the Double Structure of *Maurice*.” *E. M. Forster: Contemporary Critical Essays*. Ed. Jeremy Tambling. Basingstoke: Macmillan, 1995. 100–14.
- Ozick, Cynthia. *Art and Ardor*. New York: Knopf, 1983.
- Peppis, Paul. “Forster and England.” *The Cambridge Companion to E. M. Forster*.

- Ed. David Bradshaw. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 47–61.
- Raschke, Debrah. “Breaking the Engagement with Philosophy: Re-envisioning Hetero/Homo Relations in *Maurice*.” *Queer Forster*. Eds. Robert K. Martin and George Piggford. Chicago: The U of Chicago P, 1997. 151–65.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Steiner, George. “Under the Greenwood Tree.” *E. M. Forster: The Critical Heritage*. Ed. Philip Gardner. London: Routledge, 1973. 475–82.
- Stone, Wilfred. “E. M. Forster’s Subversive Individualism.” *Howards End*. By E. M. Forster. Ed. Paul B. Armstrong. New York: Norton, 1998. 340–52.
- Summers, Claude J. *E. M. Forster*. New York: Frederick Ungar, 1983.
- 石和田昌利 「E・M・フォースターの小説の中の手紙」『白山英米文学』東洋大学英米文学科37（2012）：1–21.
- プラトン 『饗宴』久保勉訳、岩波文庫、1982.

Vorteile und Herausforderung bei Internationalisierung und internationaler Kooperation auf der Grundlage meiner Erfahrungen im Deutschunterricht

Mai MURAMOTO

In meiner Kindheit war eine Reise ins Ausland ein ganz besonderer Luxus, den sich nur wenige Japaner leisten konnten. Zwar waren das Internet und die E-Mail schon erfunden, aber noch längst nicht als Massenmedium für jeden verfügbar gemacht. Niemand konnte sich vorstellen, dass man ein paar Jahre später in Minutenschnelle Informationen über das Ausland bekommen und mit Menschen über alle Grenzen hinweg kommunizieren würde.

Als Jugendliche war mein Fenster zur Welt die ins Japanische übersetzte Literatur aus dem Ausland, Fernsehsendungen über andere Länder, der Englischunterricht in der Schule und Brieffreunde in Afrika, die mir ein Verein vermittelt hatte. Ich träumte davon, einmal ins Ausland reisen zu können, am liebsten nach Afrika, weil dieser Kontinent mir sehr fremd und am weitesten entfernt von unserer Kultur erschien.

Dann war ich erwachsen und plötzlich war alles ganz anders. Flugreisen wurden erschwinglich und ich konnte mir das Geld selbst verdienen. Da mein Interesse am Fremden nicht weniger, sondern noch stärker geworden war, wollte ich den Traum vom Ausland unbedingt realisieren. Vielleicht war ich nicht mutig genug, allein durch Afrika zu reisen, jedenfalls wählte ich Europa als Reiseziel, das mir nicht ganz so fremd und wild erschien.

Auf dieser ersten Reise habe ich mich in ein Land verliebt. Das war

Deutschland. Zurück in Japan, habe ich angefangen, Deutsch zu lernen und Germanistik zu studieren. Als Studentin hatte ich aber noch nicht vor, nach dem Abschluss Deutsch zu unterrichten. Das Jahr in Köln als Austauschstudentin war für mich eines der glücklichsten in meinem Leben. Ich habe viele Freunde in Europa gewonnen, von denen mir die deutschen am wichtigsten sind, damit ich die Sprache nicht nur lehre, sondern auch lebe.

Vor meiner ersten Europareise habe ich mir unter „Internationalität“ eine vage Verbindung von „Japan und Ausland“ oder „Japanisch und Englisch“ vorgestellt. Ich habe nicht verstanden, dass Internationalität viel mehr bedeutet. Auch heute noch leben (im Vergleich zu Europa) sehr wenige Ausländer in Japan. Würde ich nicht an einer Universität arbeiten, hätte ich kaum Gelegenheit, überhaupt auf Ausländer zu treffen. Man kann sagen, dass die Universitäten kleine internationale Inseln im großen nationalen Inselreich Japan sind.

In Europa erlebe ich die Situation ganz anders. Wenn ich in Deutschland bin, überrascht es mich immer wieder, wie viele Menschen aus anderen europäischen und nicht-europäischen Ländern und Kulturen ich sehe und in ihren Sprachen reden höre. Ich habe den Eindruck einer ständigen Bewegung von Ein- und Auswanderung und Vermischung der Nationen. Mir scheint, dass die Internationalität für Europa so selbstverständlich ist, dass man sie gar nicht grundsätzlich thematisieren muss und sich eher mit Fragen der Interkulturalität beschäftigen kann. Es geht in Europa mehr um die Menschen und weniger um Nationen.

Für die japanische Mentalität ist die europäische Realität eine gewisse Herausforderung. Das gilt auch für die Unterrichtsmethoden. In Japan bedeutet Sprachunterricht oft noch immer Frontalunterricht. Der Dozent erklärt die Grammatik. Der Dozent liest und spricht vor, die Studenten lesen und sprechen nach. Der Dozent schreibt an die Tafel und die Studenten schreiben ab. Für

die Prüfungen müssen die Studenten reichlich pauken und auswendig lernen, um gute Noten zu bekommen. Es entsteht kein wirkliches Gespräch, kein wirklicher Austausch zwischen Lehrer und Schüler, erst recht nicht zwischen den Schülern. Ich war nie glücklich über diese Art von Unterricht.

Letztes Jahr habe ich in Deutschland an einem Didaktik-Seminar des Goethe-Instituts teilgenommen, bei dem mir klar wurde, was ich in meinem eigenen Unterricht vermisste und wie ich es anders machen könnte. Unsere Klasse war international, wir kamen aus ganz verschiedenen Ländern. Der Unterricht bestand aus Gruppenarbeit, Partnerarbeit, Gespräch, Fragen und Antworten und verschiedenen Spielen. Wir lernten und übten alles gemeinsam. Wir stellten uns gegenseitig Fragen und dachten uns zusammen etwas aus. Kurz: Wir sprachen miteinander, und lernten dadurch viel über zwischenmenschliche Kommunikation. Wir wurden nicht nur über neue Methoden der Didaktik belehrt, sondern erfuhren sie im Unterricht selbst.

Ich habe den neuen Stil in meinen Unterricht eingeführt. Obwohl der Lehrer dabei weniger doziert und eher die Rolle des Helfers übernimmt, ist es nicht weniger, sondern mehr Arbeit. Da es in Japan noch fast keine formalisierten Vorbilder für diese Art des Unterrichts gibt, muss ich mir das Konzept selbst entwerfen und die meisten Lehrmaterialien selbst erstellen.

Für meine Studenten war die neue Art des Unterrichts zunächst wie ein kleiner Kulturschock⁽¹⁾. Japaner unterscheiden sehr zwischen Bekannten und Fremden. Man vermeidet den Blickkontakt mit Unbekannten und es gilt als aufdringlich, Fremde anzusprechen. Die Studenten hatten deshalb Angst davor, in der Klasse andere, ihnen unbekannte Kommilitonen anzusprechen und von ihnen angesprochen zu werden. Sie waren nicht an selbständiges Arbeiten gewöhnt und erwarteten stets fertige Problemlösungen vom Lehrer.

Inzwischen hat sich die Situation gebessert. Die Studenten sind viel aktiver und der Unterricht lebendiger. Wir suchen gemeinsam nach Antworten auf

unsere Fragen und diskutieren Lösungsansätze. So lernen die Studenten nicht nur die Sprache, sondern auch (so hoffe ich), Gespräche zu führen und schwierige Situationen durch Kommunikation zu meistern.

Für mich ist die Fähigkeit zum Dialog (egal, ob in der eigenen oder fremden Sprache) eines der wichtigsten Merkmale sozialer Kompetenz. Ohne eine grundlegende Gesprächsbereitschaft und das Wissen, dass und wie man gemeinsam Probleme durch Gespräche lösen kann, ist Interkulturalität nicht möglich. Die Sprache des anderen zu beherrschen reicht nicht, wenn man mit ihr nicht auch die zwischenmenschliche Kommunikation erlernt.

Es ist mir wichtig, dass meine Studenten nicht nur Deutsch lernen, sondern einen gewissen Mehrwert im Unterricht bekommen. Viele, wenn nicht gar die meisten von ihnen werden nach dem Studium wenig oder gar keine Möglichkeit haben, nach Deutschland zu reisen und berufliche oder private Beziehungen zu diesem Land aufzubauen. Für sie wäre das Resultat nur eine tote Sprache, die sie nicht anwenden können. Wenn sie aber mit dem Deutschunterricht wie nebenbei auch ihre soziale Kompetenz verbessert haben, so wird ihnen das in ihrem Leben in vielen Situationen nützlich sein.

Ganz allgemein denke ich, dass Japan als Nation seine interkulturelle Kompetenz verbessern sollte. Es fehlen nicht nur Sprachkenntnisse, sondern auch einfach das Wissen, wie man durch gelungene Kommunikation gute Beziehungen herstellt, zum Beispiel zu den asiatischen Nachbarn, die für Japan sehr wichtig sind. Als Lehrerin will ich meinen Teil dazu beitragen, dass Japans Fähigkeit zur friedlichen, internationalen Kooperation gestärkt wird. Europa kann da ein Vorbild sein, und der Deutschunterricht mehr als nur Fremdsprachenvermittlung.

Anmerkung

- (1) Mein Unterrichtsaufbau (Je nach der Atmosphäre der Klasse oder der Verständnissfähigkeit der Studenten verzichte ich auf Nr. 6, 7 und 8.):
1. Spiel zur Aufwärmung
 2. Wiederholung
 3. Hausaufgabe überprüfen (Gruppen- od. Partnerarbeit)
 4. Hausaufgabe überprüfen (Gesamtarbeit der Klasse)
 5. ein neues Beispiel nennen, das nicht in die gelernte Grammatik passt.
 6. Nachdenken „Warum?“ (Gruppenarbeit)
 7. eine neue Regel finden (Gesamtarbeit)
 8. mit den anderen Beispielen überzeugen (Gesamtarbeit)
 9. nach der Erklärung Übungen machen (Gruppen- od. Partnerarbeit)
 10. Üben (Gesamtarbeit)
 11. Spiel als Zusammenfassung (z.B. Fehlerkorrigieren, Kärtchenspiel, Kettenspiel mit Bewegungen im Klassenzimmer oder auf dem großen Flur)
 12. Abschließende Zusammenfassung

PART II 『愛と嘘っぱち』
Musical “Love and Barefaced Lies”
by Kanome Yuki

Translated by Yoshikazu SHIMIZU

Character

A woman

Boy

Suga 1 Woman of revolution

Suga 2 Woman of sexual desire

Suga 3 Woman like mother

Suga 4 Woman like girls

Suga 5 woman of Kotoku

Suga 6 The negative woman

Suga 7 Woman of Udagawa

Suga 8 The woman who does not understand

Miyashita

Kotoku

Lawyer

Niimura

Furukawa

Gudou

Doctor

Kanson

Osugi

Teacher

Chiyoko

Prosecutor Hiranuma

Public prosecutor 1

Public prosecutor 2

Man

People 1.2.3

Others, crowd

The lawyer leaves.

Suga 6. Why does he want to die as a writer? He puts on airs!

A woman. Do you like Kotoku?

Suga 6. Never. I feel sick.

Suga 1. That person is a comrade.

Suga 2. With Kotoku, I get along well.

Suga 3. You shouldn't say a vulgar thing.

Suga 5. That person is all of me.

Suga 3. You are being exploited.

Suga 5. Me? Exploited?

Suga 3. Sure. You are being exploited.

The boy hits each Suga.

Each Suga. Wow (うわぁーっ!)

Each Suga is falling down.

Boy. Are you a witch?

Suga 5. Eh?

Boy. Are you the witch?

Suga 5. No.

Boy. Does the gingerbread house come yet?

Suga 5. What kind of thing is it?

Boy. I have been led. By his stone.

Each Suga. The stone?

Boy. Because Kotoku's stone extended to you all the time.

The Flat Democratic Socialist Party.

Niimura. Suga! An experiment seemed to finish.

Suga 1. Did you make it?

Boy. Eh?

Suga 1. Did it explode, all right?

Boy. ... That was a big bang omb blast was generated.

Kotoku. Hey, you!

Boy. I came here. I come from your stone.

Kotoku. It is not my stone. It is already your stone.

Boy. It is different. I pick up your stone and ...

Kotoku. You have dared to pick up a falling thing. I only promoted it.

Boy. No. You still said that clearly.

Niimura. Hey you! Mind your tongue for a teacher.

Kotoku. That's all right. He is still young. Well, show me it!

Boy holds out a can to Kotoku. Kotoku receiving it, tries to wave it. No one hears any sound.

Boy. Are you going to throw it?

Niimura. Is it all right, doing such a thing?

Boy. Because there isn't a stone in it.

Boy. ... Let's throw it!

Kotoku tries to throw a can. It rolls around. Chiyoko appears and picks it up.

Chiyoko. ... You.

Kotoku. How are you?

Chiyoko. Yes. I'm fine.

Kotoku. I was sentenced to death

Chiyoko. Yes.

Kotoku. I hope you live well.

Chiyoko. Yes.

Kotoku. Cheer up.

Lowyer. Would you like to have something to tell elsewhere?

Kotoku. ... No, thanks.

The lawyer receives a can from Chiyoko.

Kotoku. Thank you.

Lowyer. See you again.

Suga 5 snatches the can from the leaving lawyer's hand. Kotoku is sitting down.

Suga 5. Let's decide a resolute step's day.

Niimura. Suga.

Suga 5. Kotoku doesn't have a mind to do it at all. Let's do it alone.

Niimura. Yes.

Suga 5. You can die for principles; right?

Niimura. Of course.

Suga 5. You can die for me; right?

Niimura. Of course.

Suga 5. I'll ask you. Boy.

Boy. ... Eh?

Suga 1&5. Our hope.

Boy. Is that hope?

Suga 1&5. The resolute step's day.

Boy. Please wait a minute.

Suga 1&5. Miyashita. The resolute step's day.

Miyashita. It should be early as possible.

Suga 1. You are caught like us, if you dawdle.

Miyashita. It should be early as possible.

Suga 5. Before the fire of my feelings goes out.

Miyashita. It should be early as possible.

Suga 1&5. Well, the resolute step's day.

Kotoku throws a stone, again. The boy picks up the stone from the step again, and puts it in a can.

Boy. Kara, kara, karaan (カラカラカラーン).

A woman. Suga.

Suga 1&5. The resolute step's day.

Boy. Soon.

Suga 1&5. When?

Boy. When this can is full.

Suga 1&5. Miyashita. It should be early as possible.

A woman. Suga.

Suga 1&5. ... Yes.

A woman. What the matter with you? You look scared.

Each Suga. I remember.

A woman. When is that affair?

Suga 1. When did I say that? Was it long ago? Or was it just now?

The boy waves the can.

Boy. Kara, kara, karaan Kara, kara, karaan (カラカラカラーン, カラカラカラーン).

Gudo. Lots more. Fill it up.

Boy. More....

Gudo. Fill it with stones. Until we can't hear the plosh of the stone.

The boy waves a can.

Boy. Kara, kara, karaan Kara, kara, karaan (カラカラカラーン, カラカラカラーン).

ン).

Furukawa stands up.

Boy. Kara, kara, karaan Kara, kara, karaan (カラカラカラーン, カラカラカラーン).

Furukawa. Sounds good!

Boy. Kara, kara, karaan Kara, kara, karaan (カラカラカラーン, カラカラカラーン).

Furukawa. Do you want it filled up?

Boy. Yes, I do.

Furukawa. I'll help you.

Boy. Who are you?

Furukawa. I'm Furukawa.

Boy. Thank you.

Furukawa. I happened to be here.

Furukawa begins to look for a stone. The boy waves a can.

Boy. Kara, kara, karaan Kara, kara, karaan (カラカラカラーン, カラカラカラーン).

A doctor stands up.

Doctor. What do you want?

Boy. I'm looking for a stone.

Doctor. What kind of stone?

Boy. What the stone will do is to affirm.

Doctor. What color is it?

Boy. I don't know the color. It is a stone coated with affirmation.

Doctor. I'll look for it.

The doctor begins to look for stones, too.

Boy. ♪ All right, look for a stone

Our will

Strong-willed will
 All right, look for the stone
 The stone which shines
 A beautiful stone

Three. ♪ Kara, kara, karaan (カラカラカラーン) and can sounds

Boy. ♪ There, there, more, more, it is still not enough

Three. ♪ Kara, kara, karaan (カラカラカラーン) and can sounds

We can complete bombs not yet

Doctor. Bomb?

Boy. Don't worry.

Three. ♪ Kara, kara, karaan (カラカラカラーン) and bell sounds

There, there, hurry up, and a bell sounds

Goro, goro, goroon (ゴロゴロゴローン) and a stomach sounds

Look, look, child acts violently

A woman rubs her stomach.

A woman. After all, on the third day, the woman kept moving slightly.

Suga 3. How did you do it?

A certain woman. Somewhat, stomach sounds Goro, goro (ゴロゴロ)...

Suga 3. Is it a baby?

A woman. No, I sometimes feel stomach sound Goro, goro (ゴロゴロ)...

Suga 3. What will it be?

A woman. This may be because it moves.

Suga 3. You are good; a child.

A woman. Am I good?

Suga 3. You are good. Why was I sentenced to death?

Suga 1. I expect the death penalty, and sentenced to death.

Suga 3. I don't expect it.

Suga 4. I don't want to die, too.

Suga 1. I can die for principles.

Suga 1. ♪ It's hard to live in; it's stuffy

I can't live; there's no life

I'm choked in this world

As it is, the poor

Become poorer

As it is, all women,

They only live under a man, therefore

Let's match breath. All women will be full of life

Let's make the flat world

If we level out it, everyone,

All of them can find happiness

The boy picks up a stone.

Boy. This is a different. What stone will do is to deny.

The boy throws a stone. The stone hits Hiranuma.

Hiranuma. Ouch!

Hiranuma gets up.

Hiranuma. I don't dream. I always sleep well.

Public prosecutors come.

Public prosecutor 1. We need a quick trial.

Hiranuma. When is it?

Public prosecutor 2. It is not yet settled.

Hiranuma. The government is really slow.

Public prosecutor 2. Is a public prosecutor all right?

Hiranuma. What's all right?

Public prosecutor 2. Because you are bathed in perspiration.

Hiranuma. Why shouldn't I sweat? I'm human. So I sweat.

Public prosecutor 2. Excuse me.

Hiranuma. Anyway, you urge them to try our case soon. Otherwise we cause confusion in the country. Saying so, you threaten them. You keep threatening them.

Public prosecutor 1. Yes. I'm sorry to interrupt you while you take a rest.

Public prosecutors are going to go.

Hiranuma. Wait.

Public prosecutor 1&2. Yes.

Hiranuma. No. I am all right.

Public prosecutors leave.

Hiranuma. I don't watch the dream ... I always sleep well.

Hiranuma lies in a bed. The boy picks up a stone.

Boy. I found it.

Hurukawa. What the stone will do is to affirm.

The boy puts a stone in a can.

Boy. Kara, karaan (カラカラーン).

Doctor. Boy! By any chance, it is ...

Boy. It is a bomb.

Doctor. You can throw it...

Boy. I intend to hurl it.

Doctor. Stop it.

Boy. Why do you say it?

Doctor. You can't go well.

Boy. Who are you?

Doctor. I'm a doctor.

Boy. A stone (= doctor)? Are you?

Doctor. I'm a doctor. I'm a doctor denying it.

Boy. I'm sorry the doctor denying it mustn't pick it up.

Kotoku. The doctor is my doctor.

Boy. Mr. Kotoku.

Doctor. How do you feel?

The boy disappears quietly.

Kotoku. I can't say that I am too good.

Doctor. I'll prescribe medicine.

Kotoku. I didn't intend to involve you in.

Doctor. I didn't think that I was involved in.

Kotoku. You can't achieve revolution.

Doctor. I am not a stone (イシ) to deny, nor a stone (イシ) to affirm. I'm just a doctor.

Kotoku. I really apologized what I did you.

Doctor. I would be destined to be sentenced to death like that.

Suga 6. A doctor.

Doctor. Hello, how about your body?

Suga 6. A heart seems to die than a body.

Doctor. What is the matter with you?

Suga 6. What will I live for?

Doctor. Why do you think like that?

Suga 6. Will I be loved by somebody?

Doctor. You will be loved.

Suga 6. I don't think so.

Doctor. There should be a lot of people loving you.

Suga 6. They don't love me. They are only possessed by the hateful portion of my mind. Doctor! How can I be loved? How may I come to like myself?

Doctor. You should have a person recognize it.

Suga 6. Do I have a person recognize it?

Doctor. You're all right. You should have a person recognize the need that you are yourself.

Suga 6. Who?

Doctor. You should understand yourself best.

Suga 6. ... The need that I am myself.

Doctor. You should have a person recognize that your substitute doesn't exist.

Suga 6. I don't know what I should do.

Doctor. You found it soon. Don't get impatient.

Suga 6. ... Yes.

Doctor. I'll give medicine for you.

Suga 6. Please allow me to treat you like this though you're only my doctor.

Doctor. We will die someday.

Suga 6. Do you really think so?

Doctor. To die is a matter of understanding that to "die someday" is appropriate.

Suga 6.

Doctor. Take care of yourself.

A doctor sits down.

Suga 6. I want to die early.

A certain woman. Why do you think that?

Suga 6. They hope I should be disappeared soon.

Suga 1. Your such a pessimist, I don't like it.

Suga 6. I didn't like your justice either.

Suga 8 stands up.

Suga 8. It doesn't matter.

Each Suga. Eh?

Suga 8. Anyway, I'll die.

Suga 1. So at first I want to prepare myself for death.

Suga 8. It makes no differences to me.

Suga 1. Even though you move slightly, are you all right?

Suga 8. I don't mind particularly.

Suga 1. What do you say?

Suga 8. What would I want to do it?

Suga 4. What?

Suga 8. What would I want to become?

Suga 1. Of course to make an equal world.

Suga 8. That high-sounding statement is no thanks.

Suga 1. Is it a high-sounding statement?

An overture begins.

Suga 8. I want to know the truth of myself! That's all!

Suga 8. ♪ Let's find one truth

Because the world is only what I don't understand

Let's find one truth

In the world only of a lie

One truth

Let's find it

Boy. I found it.

The boy raises a stone. He puts it in a can.

Boy. Karaan (カラン).

Furukawa. You are good at finding it.

Boy. I haven't noticed it so far. I like picking up stones in the world so much.

Furukawa. Some people die without noticing it. You were lucky.

Boy. Mr. Furukawa, did you find it?

Furukawa. Well, certainly is a pleasure simply to look for stones in this way.

Boy & Furukawa. ♪ Let's find one truth.

Here is only thing I can't understand

Let's find one truth

In the world of lies

Only one truth.

Let's find it

Gudo stands up.

Gudo. A few more, don't you?

Boy. A few more.

Gudo. You should collect lots of these at a stroke.

Boy. At a stroke? A lot? How?

Gudo. Of course it is road live broadcasting.

Boy. Road live broadcasting?

Human beings of the prison shake grates, and begin to act violently.

Boy. Anarchy Communist Party!

All. Anarchy Communist Party (ムセイフキョウサン)!

All is vanity!

(All is relative!)

(シキソクゼクウ!)

(クウソクゼシキ!)

In the name of father, son and the holy spirit!

Amen!

An introduction of intense rock flow starts.

Boy. Are you all right? Let's throw stones in the world!

All. Ooooooooooooo (オー————)!

Boy. There are stones!

All. There is a way!

Boy. Rolling!

All. Stones (ストーンン)!

Boy. Dream road (Yumeji), beloved (Itoshi), your taste love.

All. Stones (いし————)!

Boy. Let's throw them! Hurl it, and make a way in front of you!

All. Ooooooooooooo (オ—————)!

Boy. ♪ What do I eat for?

What do I work for?

What do I live for?

What do I love for?

All for me

I don't love people, nor for life

Nor anything

All for me

Let's throw stones for me

Let's hurl them for me

Nothing in the world

I'll change it into everything

The stupid world where everyone does nothing

Even if it is even anything

I'll change everything!

Boy. Anarchy Communist Party (ムセイフキョウサン)!

All the members. Anarchy Communist Party (ムセイフキョウサン)!

Boy. Anarchy Communist Party (ムセイフキョウサン)!

All the members. Anarchy Communist Party (ムセイフキョウサン)!

Boy. I'll throw it Oraa (オラ————)!

All the prisoners, hurl stones.

In all the seats, everywhere, and in a public prosecutor passes.

The boy. ♪ On the resolute step's day, It's close

All the members. ♪ On the resolute step's day, It's close

The boy. ♪ I spoil it! I'll break to pieces

All the members. ♪ We make sure of spoiling

The boy. ♪ On the resolute step's day, It's close

All the members. ♪ Don't miss **the resolute step's day**

Boy. I spoil it!

Hiranuma. Catch him!

Public prosecutors run after a boy.

The boy. ♪ On **the resolute step's day**, It's close

All the members. ♪ On **the resolute step's day**, It's close

The boy. ♪ I spoil it! I'll break to pieces

All the members. ♪ We make sure of spoiling

The boy. ♪ On **the resolute step's day**, It's close

All the members. ♪ Don't miss **the resolute step's day**

Each Suga runs about this way and that way separately, too.

Suga 8. Come to this place!

Suga 9 shelters a boy somehow or other.

Public prosecutor 1. You see a boy running here?

Suga 8. No.

Public prosecutor 1. Is That true?

Suga 8. Not here.

Public prosecutor 1. I'll go.

Public prosecutor 2. Yes.

Public prosecutors leave. A boy comes.

Suga 8. You are stupid. Everybody is imprisoned if he performs of such an absurd guerrilla live broadcasting.

Boy. Thank you.

Suga 8. What are you doing?

Boy. I'm collecting stones.

Suga 8. It is a great thing.

Boy. Boys have great ideas.

Suga 8. What's that?

Boy. It's the words of the revolutionist.

Suga 8. What! It is the words of the revolutionist. You should ignore them.

Boy. Why?

Suga 8. We can't trust revolutionists.

The boy picks out scattered stones here and there.

Boy. No.... This is wrong, too....

Suga 8. What kind of stones are you looking for?

Boy. The stone to affirm.

Suga 8. Is it a stone of Kotei (Kotei, コウテイ = affirm)?

Boy. It is a stone to affirm.

Suga 8. I know the stone of Kotei (Kotei コウテイ = school grounds).

Boy. I don't need scattered stones from a school.

Suga 8. You are wrong. Kotei (emperor). An emperor.

The boy stops his hand.

Boy. Is it an emperor?

Suga 8. That's right. The stone of the emperor.

Boy. Where is the stone?

Suga 8. I think that it is somewhere, a big shining stone.

Boy. If I got it, this can would be full.

Suga 8. Why do you look for it?

Boy. I'd like to change the world.

Suga 8. If we collect stones, will the world change?

Boy. Absolutely, it'll change.

Suga 8. After you are filling it, what would you do?

Boy. I'll hurl it.

Suga 8. To whom?

Boy.

Suga 8. Is it the partner who you can't name?

Boy. God.

Suga 8. ... Do you like it?

Boy. Eh?

Suga 8. God.

Boy. Nonsense! It's all wrong.

Suga 8. Is that so? That's why you look so strange.

Boy. Well ...

Suga 8. What's that?

Boy. Who are you?

Suga 8. I'm Suga.

Boy. Well, is Suga that...?

Suga 8. I have been stripped off because of you.

Boy. Have you been stripped off?

Suga 8. I was greatly beaten by the top Suga group.

Boy. What kind of Suga are you?

Suga 8. I don't know.

Boy. What do you mean?

Suga 8. I'm Suga whom any Suga is good for.

Boy. Good Suga.

Suga 8. You abbreviate it too much. You seem to be more interesting than it.

Boy. Searching for stone is plain.

Suga 8. Let's find the emperor's stone.

Boy. ... Can we find it?

Suga 8. Don't you have other friends?

Boy. Though I have many people....

Suga 8. Now! Let's go! Maybe, we'll meet them soon.

Suga 8 is holding out a hand. The boy takes the hand.

Boy. ♪ Let's find one truth

Suga 8. ♪ Here is only thing I can't understand

Boy. ♪ Let's find one truth

Suga 8. ♪ In the world of lies

Two. ♪ Shinning truth

Let's find it

Let's find it

They both leave.

A woman. After all, on a certain woman fourth day, the woman kept moving slightly.

A woman holds the stomach.

Each Suga. What would you do to Suga?

A woman. I feel something rolling about in my stomach....

Each Suga. Are all right?

A woman. Well, fine, thank you.

Suga 7. There, Suga's missing.

Suga 6. There is.

Suga 7. It is wrong, Suga.

Suga 3. Suga is here.

Suga 7. It is not Suga. Suga!

Suga 1. With Suga Suga, you are noisy!

Suga 2. Ah! that Suga!

Suga 3. Which Suga is it?

Suga 2. Right! Suga of the first corner!

Suga 7. It is Suga next to me!

Suga 3. Ah! No! She was stripped off!

A woman. Would it decrease to move slightly?

Suga 2. It's a good trend.

Suga 1. Even if there is not such Suga, It's all the same.

Suga 2. Tell me better thing than that, a pregnant woman.

Suga 3. Who had better stay?

Suga 2. It's me.

Suga 6. It's not you.

Suga 5. It's me.

Suga 1. Me?

A woman. Who is better? ... Ouch (イタタタタ)!

Each Suga. Are you all right?

While they talk, boys continue looking for a stone.

The boy. ♪ Hey! Let's look for a stone

Suga 8. ♪ Our will

The boy. ♪ Strong-willed

Suga 8. ♪ Well! Look for a stone

The boy. ♪ Glittering stone

Suga 8. ♪ Clean stone

Two. ♪ Kara, kara, karaan (カラカラカラン)

A can sounds.

The boy. ♪ There, there, it is insufficient

Two. ♪ Kara, kara, karaan (カラカラカラン)

A can sounds.

♪ We can't yet finish a bomb

Chiyoko appears in front of Kotoku.

Kotoku. Chiyoko.

Chiyoko. You.

Kotoku. It's strange. Since I was sentenced to death, I think only of you and, I
can't complete a manuscript.

Chiyoko. Because you interfere with principles, you send me.

Kotoku. Yes. It's mysterious.

Chiyoko. But I knew it.

Kotoku. What?

Chiyoko. You are not very a noble human being.

Kotoku. You are very stern.

Chiyoko. You're the human being who is actually generous with himself.

Kotoku. Only you say such a thing.

Chiyoko. That's because I was no use.

Kotoku. You are generous with me.

Chiyoko. That's right.

Kotoku. You nod with "yes," "yes" even if saying anything a lot.

Chiyoko. Yes.

Kotoku. You don't have me nod.

Chiyoko. Sure.

Kotoku. Can we meet together somewhere?

Chiyoko. Yes.

Kotoku. Chiyoko.

Chiyoko. Yes.

Kotoku. Chiyoko.

Chiyoko. Yes.

Kotoku. P (ぴー).

Chiyoko. Yes.

Kotoku. Y (わい).

Chiyoko. Yes.

Kotoku hurls a notebook at Chiyoko.

Chiyoko leaves immediately.

A lawyer stands.

Lawyer. Are you making?

Kotoku. Yes. I am.

Lawyer. It is a waste.

Kotoku. What's that?

Lawyer. It is the biggest loss of our country to lose you.

Kotoku. No.

Kotoku picks up a notebook.

Kotoku. Actually, I'm not as great as that lawyer thinks.

Lawyer. Yes. I know.

Kotoku. Eh?

Lawyer. Actually, Man is not a great thing.

Kotoku. Actually Is that so?

Lawyer. Actually that's so.

Kotoku. Actually It troubles me to write.

Lawyer. Is that so?

Kotoku. Yes. It is troublesome.

Lawyer.

Kotoku faces toward the desk.

A woman. The fifth day. The woman was fighting.

Public prosecutor 1. Public prosecutor.

Hiranuma.

Prosecutor 1. Public prosecutor Hiranuma.

Hiranuma. (*He gets up*) What's that?

Public prosecutor 1. Recently you were in bed, but are you all right now?

Hiranuma. I'm all right.

Public prosecutor 1. Does your complexion seem to be poor, too?

Hiranuma. I'm all right. A neighborhood became noisier than before. Isn't the
permission of execution yet granted?

Public prosecutor 1. Yes. It is granted.

Hiranuma. When is it?

Public prosecutor 1. It is the 24th, the day after tomorrow.

Public prosecutor 2. Isn't it too early?

Public prosecutor 1. But it is the notice from the top.

Public prosecutor 2. But prisoners have not yet prepared to their executions in hearts.

Hiranuma. The Japanese nations will notice if we let them do prepare.

Public prosecutor 2. ... Is that so?

Hiranuma. We'll do it the day after tomorrow. Are you all right?

Public prosecutor 1. ... I understood it.

Hiranuma is lying in a bed.

the Hiranuma. ♪ I decide that I don't dream a dream

You shouldn't watch the dream

It is not good to dream too much

I lose the value of the dream

Public prosecutors are going to leave.

Hiranuma. It is not that who is bad. Do you understand it?

Public prosecutor 1. ...

Hiranuma. It's as I thought. How about I murder the emperor?

Prosecutor 1. Public prosecutor Hiranuma is that imprudent.

Hiranuma. Can you say that you never think, what will happen if you commit murder? Can you declare that you never think about it?

Public prosecutor 1. ... No.

Hiranuma. There, lese majesty, finally high treason bestial wickedness in its turn in this way when I think.

Public prosecutor 1.

Hiranuma. Everybody has such thoughts. It is common.

Public prosecutor 1. But why they only?

Hiranuma. This is because everybody has them. You see.

Public prosecutor 1.

Hiranuma. Indeed, as anyone has, if we find a fragment of the will, it should be a crime.

Public prosecutor 1.

Hiranuma. We need imprinting: “murdered.”

Public prosecutor. Do we make it warning?

Hiranuma. That’s right. The warning in the warnings, King of Kings; King of warning (Mise-shime in Japanese).

Public prosecutor 2. Is it abuse of power?

Public prosecutor 1. The power of dream.

Hiranuma. I don’t dream.

Public prosecutor 2. Though it is always slept.

Hiranuma. I never sleep.

Public prosecutor 2. ... Eh?

Hiranuma. I haven’t slept since the day when the judgment was granted.

Public prosecutor 2. Why don’t you sleep?

Hiranuma. That’s why I dream.

Hiranuma closes his eyes. The condemned criminals surround Hiranuma.

All the members. ♪ Criminal law Article 73 criminal law Article 73
Criminal law Article 73 criminal law Article 73
Under our criminal law Article 73
We jump from the rotten world

Hiranuma. Kill! Kill early! I’m not dreaming! This is because I sleep well after I murder them. Kill! Kill! Kill early!

The public prosecutors run off. Hiranuma lies. Boy and Suga 8 run fast.

Boy. We’ve run a long way.

Suga 8. Where are we?

Boy. In the mountains of Shinano. Nobody knows. Nobody cares. It is the back

of beyond.

There are Furukawa and Niimura.

Furukawa. I looked for you everywhere.

Niimura. I thought you'd be here. Who's the child?

Suga 8. It is Suga.

Niimura. It is a chance meeting. I know someone named Suga.

Boy. That woman is Suga.

Niimura. (*He sees Suga 8*) What? You are not Suga.

Suga 8. Don't I look like her?

Niimura. She is a brave woman.

Furukawa. Where is the can?

Boy. Here is.

The boy waves a can. A dim sound.

Boy. Karaan (カラン).

Furukawa. It is close.

Boy. Please look for the emperor's stone?

Furukawa. Is it an emperor stone (Kou-tei コウテイ = emperor)?

Boy. It is a big and shiny stone. I'll fill this can if I find it.

Furukawa. Where is it?

Suga 8. It should be at the witch's house near.

Furukawa. Is it there?

Suga 8. Yes, it is.

Niimura. Let's go.

Four people walk. The other side of the grate, the Sugas line up.

Boy. I found it. It is here.

Suga 8. Shall I ask?

Suga 8 goes into the house. Suga 8 comes out immediately.

Suga 8. Let's escape.

Boy. Eh! Why?

Suga 2 stabbed in her arm comes out. Suga 5 with the kitchen knife comes out of the back.

Boy. Are you a witch?

Suga 5. Ah?

Boy. I'm sorry.

Suga 2. What do you do?

Suga 5. I love that person!

Suga 5. ♪ I like the person

I like him so as to be mad

I like him helplessly

I don't need principles

I don't understand the reason, either

I can only say clearly

I like that person

I like him so as to die

I like him so as to die

Suga 5. So I really hate, that person like you is mistaken for me.

Suga 2. You don't stab me, for all that....

Suga 5. That person is best for me. I'm not interested in the other man. I want to die as me. Therefore you should die like a brave woman!

Suga 2. Wait a minute, let's think a little more!

Suga 1. There is no room for thinking.

Suga 1 comes out with a pistol.

Suga 1. Let's make a clean end.

Suga 5. All right.

Suga 1. Let's make it clear who is Suga of the truth.

Suga 5. All right.

Suga 3 appears with a Japanese sword.

Suga 3. I'm Suga.

Suga 7 appears with a karate stick.

Suga 3. Uwataaaa (ウーワタァァ)!

Suga 8 appears swinging a chain around.

Suga 7. I crush it.

Suga 4 appears holding braided cord.

Suga 4. I revenge myself.

Suga 2 holds a yoyo in the hand which has not been hurt.

Suga 2. I don't forgive you.

Suga 1. ♪ I am the real Suga

Suga 6. ♪ No. I am the real Suga

Suga 3. ♪ the real Suga is me

Suga 5. ♪ Say! I am true Suga

Suga 4. ♪ Let's attach ends

Suga 2. ♪ Death match of 2 Suga vs. Suga

Each Suga. ♪ life-or-death death match

Only one of rest stood to stay.

All Sugas go more and throw stones all at once.

Boy. Ouch!

The boy picks up the stone which hit him.

Boy. This is one....

Suga 8. Is that so?

Boy. Yes. It is the emperor's stone.

Suga 8. ... Why do you think that?

Boy. It's very heavy.... It does the form such as tears in it.

Suga 8. The truth is heavy. The stones are like tears.

The boy put it into a can.

He tries to wave it.

... I can't hear anything.

Boy. ... In that way, the can was filled with the innumerable stones which were full of the will. That strong stone, this weak stone which all affirm. There are no denying stones That's right, the will of the stone has thrown me down. I keep falling and only hurl this fellow afterward. I commit a double suicide with this fellow. The skyrocket goes up for the first time in the unattractive life. The fireworks from clashing stone are displayed. After spark fly Dawn Dawn, I am blessed. Well, let's go.

Suga 8. Where?

Boy. To make God disappear.

The boy starts running.

Suga 9. Wait!

The boy starts running. A woman holds her stomach and crouches down.

A woman. Ouch (イタタタタ)...

Suga 8. Are you all right?

A woman. All right.

Seven Suga begins to fight.

Niimura. I came here. They played the prison death match which they bet the name of true Suga. The commentary is familiar and giant Furukawa. Mr. Furukawa thanking you in advance.

Furukawa. Thanking you in advance.

Suga 8. To-ryaa (とおoryaa)!

Niimura. By the way, at first Suga with the Japanese sword shows the vivid sword handle. The sword fight scene reminds me of the great swordsman Musashi. However, the carriage of Suga is very quick. This is a well-matched game, Mr Furukawa.

Furukawa. That's right. after all their ability will be equal to same Suga.

Suga 1 fires a pistol.

Suga 1. Die! Die! Die! Die!

Niimura. Ah! Suga fires the gun continually. This is a death match without rules! However, Suga with nunchaku dodges, and this is great, and this is the great 4000 year history of China! Mr Furukawa, though the gun was unfair, but how do you think?

Furukawa. Well, It is foul play. However, it may be said that this is the powerful charm of the prison death match.

Suga 1 breaks a posture.

Niimura. Look out! After all, it is even firearm. Suga from the braided cord shop was probably shot dead by an assassin.

A boy continues running.

Boy. ♪ I want to find one truth

Because it is the only thing I don't understand

I want to find one truth

In this world of a lies

Let's find the one truth.

Niimura. Oh! What! A Sukeban Suga's yoyo explodes to a karate stick and a chain! Both of them lost neither weapon! And that is the great skill that makes nothing of the injury of the right arm! What! Besides, a pistol of Suga 1's pistol is empty! Oh! How about regretful Suga! What do you think, Mr Furukawa?

Furukawa. This show is, probably, both Suga of Japanese sword and Skeban Suga seem to be fought in single combat.

Niimura. Kitchen knife Suga still stays, too. We can't understand this development.

Suga 2. Let's go! Suga.

Suga 3. I hope to face up to it.

A certain woman. Ouch (イタタタタ…)!

Suga 8. You should stop it! We don't bother if we were moved!

Suga 2. It may be so, but I am troubled.

Suga 8. Why are you?

Suga 3. Then, are you all right? Even though you may be lost without your own unknown, are you all right?

Suga 8. I wish to get myself, I hope to find my true self.

Suga 3. Then you should struggle, too!

Suga 8. How do I turn out after a war?

Suga 3. You should win yourself of the point of death.

Suga 5. ♪ I want to die thinking Kotoku

Suga 1. ♪ I carry through principles and want to die

Suga 3. ♪ I want to die while thinking of Kanson

Suga 2. ♪ I want to die while having a dream embraced by men

Suga 1. ♪ you

Each Suga. ♪ How do you want to die?

Suga 8. ♪ I

Suga 9 is picking up the pistol which Suga 1 put. The boy continues running.

Boy. ♪ At that time, I promised

I smash a superstition

I promised at that time. I blow off an emperor

It seems to be along some track.

We hear the sound of a train, and the people worship it.

Suga 8. ♪ I

Each Suga. ♪ How do you want to die?

Boy. Here you are.

People 1. His Majesty the Emperor Thank God (ありがたやありがたや)!

People 2. Hurrah Hurrah!

Boy. Stop!

People 1. Who are you (なんだあんた)?

Boy. The Emperor is not God at all.

People 2. The Emperor is God. You may be caught in lese majesty, now, and
crazy, and go out!

Suga 8. ♪ I

Each Suga. ♪ I, I, I ...

A whistle.

The loud sound of the train at the front.

Boy. If I grow a hand and catch it, what will I feel like?

Suga 8. Who is true really me?

Boy. Does anyone want to check it?

Suga 8. I only want to know it.

Boy. Suga 8. Before we die!

The boy throws a can.

Suga 9 shoots a pistol at the same time.

They all stop.

The sound of a big skyrocket.

All Sugas except Suga 8 falls down at the same time.

Before long, innumerable fragments will fall from the sky.

Boy. What is it? ... This.

Suga 8. What? ... This.

Boy. Of God ... Is it a fragment?

Suga 8. That's right. You make it.

Boy. I make it.

Suga 8. Oh yes.

Boy. I ... I made it; I made it!

Boy. ♪ Look at the fragment which blew off

Hey, I can point it in the very front
 Now, You will believe it in this
 An absolute thing is in the world
 No existence

Boy. Look! Hey, watch it! Should you peel eyes properly, and stare at it! It's shattered! It's breaking down! God is not! This fellow is not God! This fellow is nothing special! He is a mere human being!

People 1. His Majesty the Emperor Hurrah!

The sound of the whistle. The fragments continue to fall.

All the members. Hurrah!

Boy. ... Eh?

All the members. Hurrah!

Boy. I surely made it, and I surely made it!

All the members. Hurrah! Hurrah!

Boy. Why?

A boy to sit down.

Boy. Anarchy Communist Party (ムセイフキョウサー——ン)!

All the members. Hurrah (バンザー——ーイ)! His Majesty the Emperor!

Suga 8. Why did I? I stayed.

A woman. ... You?

Suga 8. Am I true really me?

A woman. How will I know?

Suga 8. I never know what kind of myself I am.

A woman. ... So.

Suga 8. ... How long would I move slightly?

A woman. When would it occur from?

Suga 8. Would it occur since I was born that I moved slightly?

A woman. It might have occurred since I was born.

Suga 8. Will I present myself as a true person?

A woman. How will I know?

Suga 8. Why will I be lonely?

A woman. Are you lonely?

Suga 8. I am so lonely, but I don't want to die.

A woman. Then it will be true Suga.

Suga 8. Will it be so?

Each Suga. ♪ Bead strings of my 20 years old I'll leave,

Sacrifice you 100 years later

Bead strings of my 20 years old which I'll leave,

Sacrifice you 100 years later

A woman. The sixth day. I faced a happening more than news gathering.

A woman continues straining. A doctor looks after that.

A woman. The seventh day. I still faced the happening more than news gathering. I continue straining.

A woman continues straining. Kotoku and Chiyoko stare at each other.

Kotoku. I was called.

Chiyoko. So.

Kotoku. I'll go.

Chiyoko. See you.

Kotoku. I am ready.

Chiyoko. Aren't you ready yet?

Kotoku. I've ready for it.

Chiyoko. At the time you say that you are ready, you aren't usually ready for it.

Kotoku. I'm ready for it.

Chiyoko. I understand.

Kotoku. I'm ready.

Chiyoko. ... Is that so?

Kotoku. There is an unfinished manuscript.

Chiyoko. You had better leave it unfinished. It seems like the point of death of the writer.

Kotoku. It is a good idea.

Chiyoko. Yes.

Kotoku. I'll go.

Chiyoko. Yes. See you. ... You.

Disappearing Kotoku. A woman strains as ever. Gudo appears.

Gudo. (*with beads*) Anarchy Communist Party ... Anarchy Communist Party
Anarchy Communist Party ... No, I'll stop it?

Gudo throws away beads.

Gudo. They never rest in peace anyway.

Gudo disappears.

Public prosecutor 1 comes to call Miyashita.

However, he is not in the prison.

Public prosecutor 1. Miyashita. Where is he? Hey! Miyashita.

Boy. Mr Miyashita!

A boy and the others look around. He can't totally be seen.

Boy. ... Am I Miyashita? Is Miyashita me? If this is my name, I must go to my execution. I am just right. That's good timing. Places of execution are normally hidden. I can't but believe that, that fellow is God, because he didn't move an inch when he erupted. But, to be frank, I am relieved. I probably....

Miyashita, a boy. Probably we liked God.

Public prosecutor 1. Miyashita.

Boy. Yes.

Public prosecutor 1. It's time.

Boy. Yes.

T boy is taken by public prosecutor 1 and leaves. A doctor stands up.

Doctor. By the way, I hope you do your best.

A woman. Yes.

Doctor. Someone will die soon. Everyone ...

The doctor disappears. Niimura and Suga 1 stares.

Niimura. I'll go now.

Suga 1. ...

Niimura. Please look. Brave man.

Suga 1. ... Yes.

Niimura. See you.

Niimura disappears. Furukawa appears.

Furukawa. I'll see you someday.

Furukawa disappears.

Hiranuma gets up slowly.

Hiranuma. Those fellows, in good order, are dead, aren't they?

Public prosecutor 2. Yes.

Hiranuma. (*burst into laughter*) In good order they are dead?

Public prosecutor 2. What's the matter with you?

Hiranuma. I have a dream again from today.

Public prosecutor 2. Can you dream?

Hiranuma. Oh, I seem to be able to sleep at night. I'll dream a dream, and if I do anything at all, I wish to dream a huge and good dream anyway. Clear up the bed!

Public prosecutor 2. Didn't you sleep easily?

Hiranuma. I became able to sleep with much effort like before. I live while enjoying sense of superiority to be able to sleep anywhere anytime. Glub-glub in normal. Happily.

A woman strains as ever.

A woman. The eighth day.

Voice. Suga. It is time.

Each Suga. Yes.

A woman. Did you come (*straining*)?

Suga 8. Called first thing in the morning and, I think that surely I am the very
first.

A woman. ... It may be so.

Suga 8. Are not you yet born?

A woman. Sure.

Suga 8. Who are you?

A woman. I'm ... a pregnant woman.

Suga 8. Who are you?

A woman. As you can see, I'm a pregnant woman.

Suga 8. Are you me?

A certain woman....

The introduction of the music begins gently.

Suga falling down say chorus.

Each Suga I. I sacrifice you my 100 old, and leave bead string from when I
was in my 20 years old.

Each Suga. ♪ The warmth that is warm

It doesn't change in hundred year

Everybody who surely lived

I feel running time

Hot thought, warmth

Living mark

Living mark

Suga 8. Have you ever told a lie with all your might?

A certain woman. ... I haven't.

Suga 8. May I try it?

A certain woman. Certainly.

Smiling Suga 8.

Suga 8. I'll die in the principle; Hurraha revolution!

A figure of Suga 8 disappears. A sound of big explosion strikes. A woman gets up suddenly.

A woman. Oh. A baby was born.

The crying of the baby like an explosion.

The crying voice continues.

Forever.

(The end)

テス・ギャラガー「レイとテスのヨーロッパ 旅行記 1987 (上)」

橋 本 博 美

0. 訳者はしがき

テス・ギャラガーによる「ヨーロッパ旅行記」の全訳を、今号と次号の2回に分けて紹介する。

旅程の概要は、冒頭のギャラガー氏による説明を参照いただきたいが、この旅行は1987年の4月から6月にかけて、レイモンド・カーヴァーのプロモーションツアーに、ギャラガー氏が同行する形で行われた。帰国して数ヶ月後の9月、カーヴァーは突然肺出血し、肺がんに冒されていることを知る。その後、1年にも満たない闘病の末、1988年8月2日、彼は50歳の短すぎる生涯を閉じるのだが、この旅行中は、二人ともそんな運命が待ち受けていることなどつゆ知らず、ヨーロッパの旅を満喫している姿が、微笑ましくも哀しい。そして、不思議なことに、旅行記の中にはたびたびそんな彼の運命を予兆するような出会いや言及が現れる。(今号に収めた部分では、ゴンクール賞の授賞式で出会ったノエル・シャトレの夫が51歳の若さで肺がんのために亡くなった、という描写に思わずドキリとさせられる。)

アメリカ内外の文学関係者とのきらびやかな交流の記録は、カーヴァーの研究資料として貴重である。一方、互いをソウルメイトと呼び合う

者のインティメイトな視点でしか描き得ないさまざまなコメントや、カーヴァーの知られざる素顔も実に興味深い。(アルコール依存症から立ち直ったとはいえ、ときに低血糖によるパニック的症状を見せ、喫煙やアルコールの誘惑などに怯えるカーヴァーの危うい姿は生々しい。) 第一級の詩人であり、小説家であり、エッセイストであるテス・ギャラガーの豊かな感性、鋭い人間観察と洞察力が、カジュアルな旅行記のスタイルの中にも見事に凝縮されていて読み応えがある。

カーヴァー没後25年の昨年、映画『バベル』(*Babel*, 2006) で知られるメキシコ人映画監督アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥは、新作『バードマン』(*Birdman or The Unexpected Virtue of Ignorance*, 2014) の中に、劇中劇の形でカーヴァーの短編小説を取り入れた。主人公はかつて「バードマン」というスーパーヒーローを演じた俳優。落ち目の現状を打破し過去の栄光を取り戻すべく、ブロードウェイの舞台に挑戦するという起死回生の策に打って出る。そこで演じられる作品がカーヴァーの「愛について語るときに我々の語ること」だそうである。(*Destination Magazine*. Online. 6 Sept. 2014. Available: <http://www.eadestination.com/related-entertainment-articles/377-ex-batman-michael-keaton-back-as-birdman>) 登場人物たちがそれぞれの「愛」を巡る体験談を語り合う入れ子構造的小説を、メタフィクショナルなこの映画(なにしろ主人公を演じるのが、かつて実際に『バットマン』を演じたマイケル・キートンなのだ!) に挿入することで物語の多層化が幾重にも計られそうだ。カーヴァーの小説を使った映画では、ロバート・アルトマンの『ショート・カット』(*Short Cuts*, 1993) がヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞を受賞したが、あれから20年、メキシコの名匠イニャリトゥがカーヴァー作品をどう料理するのか。第52回ニューヨーク映画祭のクロージングナイト作品上映会に招待されたギャラガー氏は今、数週間後の鑑賞を心から楽しみにしている。そして、映画好きだったカーヴァーも、生きて

いればきっと同じ思いだったろう。日本での公開も待たれるところだ。

1. 翻訳「ヨーロッパ旅行記 1987 (上)

1987年4月5日～4月16日⁽¹⁾

1987年にレイとヨーロッパを旅した際、私はノート2冊にわたる旅行記を記した。この年の旅行は2度に分けて行われた。家で一旦休養をとったり郵便物を整理するためである。当時、私は長編小説を書こうと構想を練っている最中だったが、レイとの時間を楽しむため、そして海外での彼の出版プロモーションを手伝うため、この旅行に同行することを決めた。誰と会ったか、どんなことをしたかなど、レイなら「雑記」と呼んだであろう記録を、私は旅行記として書き留めておくことにした。劇場プログラムや新聞の切り抜き、はがき、ポラロイド写真など、いろんなものをテープで留めていったので、どちらかというスクラップブックのような形態となった。言葉でうまく表現できないときにはスケッチを描いて、手書きの本文の間に説明を入れている。

ジャーナル1は1987年3月27日から始まる。シアトルを出発し、シラキューズ、ニューヨーク、フランスのパリ、サンカンタン、ドイツのヴィースバーデン、さらにチューリッヒを訪問して、ローマ行きの飛行機に搭乗するところで終わっている。ノートはパステルカラーで表紙は布張り。中のページは罫線のない無地。使用したインクは黒色。このタイプのノートを、私は詩の下書き用として以前から利用している。

ジャーナル2は表紙が黒で背が赤いノート。角々の先端にキャップ付き。ジャーナル1の旅行の続き。1987年4月23日ローマでの記述から始まる。ミラノ、チューリッヒを経て、ポート・エンジェルスの自宅まで。さらに、このノートは2番目の旅行にも同行した。シアトルからロンドンへ。ここからレイはクリストファー・マックルホウズ、リチャード・フォードとともにスコットランドへ向かう。一方、私は一人でダブリン、そしてベルファーストへと旅を続けた。その後、私たちはロンドンへ戻り、レスリー・ボナム・カ

ーターから借りたアパートに1か月滞在した。この間に、サルマン・ラシュディ、マリアン・ウィギンズと会う。レイはその前の冬にリーディングツアードでオーストラリアへ行った際、マリアンと出会い、またドリス・レッシングとも知己を得ていた。その縁で、ロンドン滞在中、ドリスは私たちのためにガーデンパーティーを開いてくれた。パーティーではまた、クロアチア人医師で詩人のドラゴ・シュタンブクと知り会う。その後、私たちはロンドンからパリへ向かった。これに同行したのはリチャード・フォードと妻のクリスティナ、ジョナサン・レイバン、そしてコリンズ＝ハーヴィル社のレイ担当編集者クリストファー・マックルホウズである。

パリでは、レイの出版者のオリヴィエ・コーエン、レイの作品のフランス語版の翻訳者フランソワ・ラスキンと会った。私たちはフランソワとサンカントンを訪問。そこで、レイは世界を代表する短編小説家の一人として表彰された。

この旅行記は、1988年、『アンタイオス61号』掲載のため、当初レイが編集してくれ、さらにその後ダニエル・ハルパーンによって編集された。今回の出版にあたって私は、先の編集で削除された部分を大幅に回復し、若干の再編集を行った。

4月5日 パリ

レインコートを無くしてしまい、なんだか鎧を失ったような気分。そのうえ、レイがくれた高価な腕時計まで紛失した。落としたのか、盗まれたのか。落ちた音は聞こえなかったけれど。ほとんど一日中歩き回っていたから、行ったところを辿り直すのはもう無理だ。

カフェ・ボナパルトのできごと。日向の椅子に座っていたカップルが立ち上がって私たちに席を譲ってくれた。ところが私たちが腰を下ろす前に、日陰の方にいた男性が突進してきて座ってしまった。気が咎める様子など微塵もなし。仕方なく、私たちは日陰の席に座る。レイがミネラルウォーターを注文するのを近くの席の人が助けてくれる。

ホテルは小ぢんまりとしているが快適だ。レイが煙草を吸うスペースもあるので、2部屋とらなくても大丈夫。ここはパリの左岸に位置し、近くには書店がたくさんある。レイは、一軒の店に入って自分の本があるかと探してみたが、置いてなかった。カフェ・ボナパルトで私、「どうやら、ここではあまりもてはやされていないみたいね」。「なあに、たまたま日曜日だからさ」とレイ。

時計を失ったせいで、時の流れからはぐれてしまった気分。しばし見知らぬ場所にいるような、とても奇妙な感じだ。長い間ずっと慣れ親しんできた時計だったのに、なぜ今、消えてしまったのか。私はレイに言う。前に、ガンジーみたいに身軽に旅をしたいという詩を書いたことがあったけど、なんだかそれが叶ってしまったみたい、と。私ときたら、毎日、大切なものを何か失っている。レイが笑いながら、「それじゃ、明日は部屋の中にいること。僕は君を失いたくないからね」と言う。

ホテルの部屋で。フランスのテレビCMは、コーヒーのかき回し方一つをとっても、非常に魅惑的。セクシーさということについての概念が違うようだ。アメリカにはない官能性を含んでいる。

4月6日 パリ

ほとんど眠れなかった。レイは睡眠薬を飲む。私は明け方近くにうとうとしたが、咳がひどく、しょっちゅう起きあがっていた。腕時計がないので時刻がわからない。朝10時に電話で目が覚める。レイの写真を撮りに階下にカメラマンたちが来ているという。この国では、予定というものが通用しない。なにごとにも突然起こるのだ。

また、失くしものをした。今度はヘアブラシ。最後に見た記憶があるのは、ニューヨークの空港で髪を編んだ時だが、こっちに来てからそれをほどいたのだから、失くしたのはこの時にちがいない。出てきてくれるといいのだが。

エドモンド・ホワイトと昼食。彼は、「ゲイ作家」と分類されることを甘んじて受け入れる、と言う。長年、世間に認められることをずっと待ち続けていたのだ。それから、こんなことも言った。たとえ自分がエイズで死にかけていると分かって、酒と煙草は二度とけっしてやらない、と。彼は多くのエイズで逝った友人たちの死を扱った本を書き上げたところだ。ディヴィッド・カルストーンは驚きだったが、彼もエイズだった。1969年頃、ワシントン大学在学中に彼の本をいろいろ読んだことを思い出す。エドモンドはとても心優しく、快活な人だ。レイも私も彼が大好きになった。

評論家のジル・バルブデットも昼食に同席していた。私のジョークがお気に入りの様子。皮肉が効いていたから。今、この日記を書きながら、つくづく思う。レイも私も、あの昼食の席にたどり着くまでに、どれほど長く、予期せぬ道りを経てこなければならなかったことだろう。そして、たしかにこのフランス人は今、いろいろと優位な立場にある人物だ。あとでレイは、自分のエッセイをジルに見てもらえばよかった、と残念がった。いいえ、これでよかったのよ、と私。フランスの批評家連中というのは、この人間のことはもうわかったと思った途端、見向きもしなくなる人種。だから、煙に巻いて、気になる思いを彼らに残しておくぐらいがちょうどいいのだ。

ディコンストラクション理論が話題に上る。バルトやフーコーなんて、いまやフランスじゃ誰も読まないよ、とジル。時代遅れだね。一時的流行に過ぎなかったんだ。それにつけても、とジルは続ける。アメリカ人はいまだにマジではまってるって、ジョークになってるよ。(劣等感に駆られて、フランスと聞けば何でもかんでも飛びついた、ドストエフスキーの時代のロシア人みたいなものか。)

レイは、マルグリット・デュラスと同様、その文体ゆえ、文体の特異性ゆえに評価を受けているのだ。リアリズム作家だからでも、ミニマリ

ストだからでもない。とくに後者の用語を彼は拒む。至極当然だ。

ホワイトはアメリカへ帰りたい、と言う。そうすればアメリカのことが書けるからと。アメリカこそ彼の、そしてまた私たちの創作の場。彼にとって、ここパリは何もかもが完璧すぎる、アメリカのがさつさが必要なのだそう。彼はもともとテキサス出身だ。彼が墓守の儀式について説明するのを聞いているうちに、ミズーリのことや私の母方の実家のこと、殺された叔父のことを思い出した。ホワイトはまた、ウィラ・キャザーの短編小説の話をしてくれた。お陰でレイも私も無性に彼女の作品を読み返したくなった。

昼食後、ホワイトは私たちをチュイルリー公園の中にあるオランジェリー美術館まで歩いて案内してくれ、一緒にモネの睡蓮を観た。私は、1968年にパリで過ごした頃にこれらの絵を観たことを思い出した。みずから花々を育て、花開いたのちにそれらを描く、というその発想が素敵だ。そしてまた、見えないものを描くという概念。彼が描いていたのは、水に映る光だったのだ。「アバウトなままでいい」というようなやり方が、かえって現実を反映することがときにはあるものだ。

「子供の頃、誰も味方になってくれなくて、ずっと独りぼっちだったけれど、その犬だけは私をかばってくれたの」と、私はレイに言う。むかし飼っていたサテンという名の犬。彼女のことを思い出したのは、パリの女性タクシー運転手が犬を運転席の隣に乗せて走っていたから。日差しから守るため、犬に小さな綿毛布を優しくかけてやる優しい女性ドライバー。と、思っていたら、1ブロックほど走り去ったところで、別のドライバーに激しく毒づく彼女の罵り声が聞こえてきた。

4月7日 パリ

今日、昼食をともにしたのは、ブルターニュ生まれのジャーナリスト。父親は街路清掃夫だったとか。今は出版社勤務だが、ゆくゆくは作家に

なりたいという。妻との間に二人の子どもがあるそうだ。ざっくばらんな会話。フランス人は自分たちのものは何でも価値のあるものばかりだと思っているが、実のところ、フランスの長編はひどいし、詩は死んだも同然、と。彼によると、フランスでは「本」を「物」として出版するのだという。命あるものを生み出すという思いがないらしい。ベストセラーはみなアメリカからもたらされ、それらはSF小説の感覚で読まれる。フランス人は自分たちの作家を外国から発見するのが好きなのだ、と彼は言う。アメリカであまり評価されない作家がここで認められるのはそういうわけ。

レイは気分が優れず、食事にほとんど手をつけなかった。ホテルに戻ってくると、カメラマンが一人待っていて、撮影のため彼をエッフェル塔へ連れ出す。私は横になって、一時間ほど眠る。ワインのせいだろう。やがてレイも帰ってきて、二人とも寝てしまった。

4月8日 パリ

夜更けに英語書店ヴィレッジ・ヴォイスでレイの朗読会が行われた。レイは二階にある会場の満員の聴衆の前で、「コレクターズ」と「父親」を朗読した。階段にまで立ち見が出る。C. K. (チャーリー) ウィリアムズが来ていた (フランス人の奥さんとパリに住んでいる)。『メンフィス召還』でヘミングウェイ賞を受賞したばかりのピーター・テイラーもいた。ウィリアムズ (すらりと長身!) は詩集を出版して以来、スランプに陥っているのだとか。パリで詩の創作グループでも始めようかと思ってるんだ、という。

私はレイのフランス語版翻訳者フランソワ・ラスキンと会った。今回の翻訳はものすごく急いで仕上げなければならなかったそうだ。もうあと5回は推敲したかったのに、とラスキン。翻訳の収入は乏しく、生活は楽ではないらしい。彼はサンカンタンの短編フェスティバルに私たち

と同行する予定だ。ここは英語圏の読者が通う書店なので、彼の翻訳は誰も読んでいなかった。レイの朗読の後、二人の女性が近づいてきて、私の詩を大変楽しく読んだと言ってくれた。新作はいつ出るのかと聞かれる。書店のオーナー、オディール・エリエールはとても素敵な女性。私の本が店に置いていないことを恐縮がってくれる。取り寄せの注文はあるのだけれど、と。

4月9日 パリ

エリザベス（マザラン社のレイの広報担当者）と昼食。声を失ったユダヤ人が経営するというデリへ連れて行ってくれる。オーナーが妻を撃って、投獄され、ゲイになったといういきさつを、私たちのテーブルを給仕したウエイターが話してくれたのだが、あまりに唐突な話だったので、エリザベスは笑い出す。まるでお芝居みたい、と。たしかにそうかもしれない。が、この国では誰もが自分の生きたいように生きている気がする。レイの出版者であるオリヴィエ・コーエンも彼の妹とランチに同席した。彼女は建築関係の執筆をしているようだ。エリザベスは、フランス人の作品よりも、外国人作家の本の方が売りやすいという。コーエンがリチャード・フォードについて、『スポーツライター』は、フランスの読者には展開が遅すぎるかもしれないが、『心のかげら』はとてもいいので出版したい、と語る。

ホテルで小休止していると、シラキュース時代の私の若い友人で、詩人のブリジットから電話。一緒にオルセー美術館へ行くことにした。レイは少し休んでから合流することになる。薦められたとおり、五階の展示室から始める。ものすごい人混み。玉石混淆の感。時代別展示の配慮はされていない。モネの隣りにできの悪い点描画法の画家たち。ゴッホの自室の絵や自画像を見る。これは圧巻。筆運びから彼の意思がひしひしと伝わる。絵の中に「不信の人」の影は微塵もない。ドガの不格好な

馬のブロンズ像たち。バレエの踊り子たちも、なんてぎこちないバランスなのだろう。これらの絵を観ているうちに、以前、エッセイの中で「荒削りに歌う」ということについて書いたことを思い出した。整いすぎた表現よりも、かえって題材が生きてくることがある。パステル画は、小部屋の照明が暗すぎてよく見えなかった。レイが合流し、みなでゴーギャンを鑑賞。「青い馬」。私のお気に入り。

レイと私は夕食を食べにムーランルージュへ行って、「豪華絢爛ショー」を見物した。凝った衣装をまとったとても綺麗な女性たちが、猛烈な速さで踊り回る。その昔、1966年にテキサスで『メリー・ウィドー』の公演に出て、カンカンを踊った私の経験からすると、彼女たち、きつと手加減ということを知っているに違いない。私など、あのダンスの練習の後、痛くて痛くて寝室までの階段すら上りかねたことを思い出した。

踊り子たちは、満面に笑みを湛えている。レイ曰く、皆いかにも「楽しんでます」って表情しているけど、そういう顔をお客に見せているうちに、本当に楽しくなっていくのかもしれないね、と。曲芸師たち、そして腹話術士も登場して、客席の人をステージに引っ張り出して、お客の口から、変な恥ずかしい音を出したり、白い犬をステージに登場させ、犬に「しゃべらせ」てみせる。観客たちはもちろん大喜びだ。日本人観光客の多いこと。そして皆、身なりが良い。スーツを着ていなかったのはレイだけだったかもしれない。ただし、珍しいことにネクタイはしていた。私たちは2、3回踊って、心ゆくまで楽しんだ。それから、彼は私にピンクのバラを買ってくれた。今夜の思い出にホテルへ持って帰る。

外へ出ると、タクシーの運転手が吹っかけようとする。ホテルまで行くのに、100フラン（約18ドル）もよこせという。レイは、もう結構と断り、50フランで行ってくれるというタクシーを見つけたが、それでもたぶん、5フランぐらいは高かったかもしれない。

無事ホテルの近くまで戻り、ブラッセリー・リップのオープンテラス

に腰掛ける。私は紅茶、レイはコーヒーを飲みながら、ただ座って通りの様子を眺めた。なかなかの一興。じゃれるように戯れ合う若者たち。ミニスカートの女の子もいるが、ほとんどはジーンズ姿だ。目も覚めるようなゲイのハンサムガイたち。女性のゲイはあまり多くないみたい。

ホテルに戻り、チョコレートを食べる。私はレイのパイプを吸った。彼はフランスものの煙草を吸ってみたが、気に入らない。私はコクトーの日記を声に出して朗読する、私たち二人のために。

ジャン・ヴォートラン(フランス人の小説家でテレビ脚本家でもある)と彼の妻アン、それからレイの本の表紙(エドワード・ホッパーの絵を使用したもの)の担当者と一緒に『ブッフオ』という一時間ほどのパフォーマンスを見に行く。ジャンとアンのアメリカ人の友人、ハワード・ブーテンによるもので、彼は自閉症の子どもたちと接する仕事の体験に基づいて、道化のキャラクターを作り上げた。とても可笑しい、けれど感動的なパフォーマンスだった。彼はさまざまな楽器を用いる。鼻の穴でハーモニカを吹き、チェロの中からミニバイオリンを取り出して奏で、舌をトランペットに押し当て、ドラム代わりにバケツを並べて叩く。顔に漂うある種の哀愁、それは子どもの夢か。私たちが軽んじているものの中に見いだす喜び。丸めた紙くずから花が咲き、チェロの弓に優しく口づければ、それはたちまち人の腕と化す。潔癖症に取り憑かれて至る所を転々とした挙げ句、自分自身まで追い払おうとする。やがてそれは、ステージ上に連れ出した観客にまで伝染してしまう。

ハワードが夕食に合流。彼はフランス人の女性と恋に落ち、7年前、ここに住み着いたそうだ。ジャンとアンには自閉症の息子がおり、その関係でハワードと知り合いになった。15歳になるその子は、彼らの手に負えなくなり施設に入った。今は2週間に一度会いに行く、という状態らしい。ハワードはジャン夫妻がこの苦悩と向き合い、なんとかやっていけるよう手助けをしている。ジャンは、素晴らしい人。それに、た

くましい体つき。ヴォートランというのは、脚本を書くときのペンネームだ。ディレクターもしているが、彼の本名は、ジャン・エルマンという。アンは女優をしていたが、子供が生まれてから俳優業はあきらめざるを得なかった。ジャンは息子の詳しい状態については語らなかったが、愛おしくもあり哀しくもあり、とにかく本当にいろいろと努力の日々と察せられる。後で漏らしていたところによると、フランスではこうした子どもたちに対して、いまだに中世同様の待遇だという。養護に関して、政府からは一切援助がないそうだ。アメリカでも、レーガン政権は身体障害者のための資金の多くを廃止させてしまったわ、と私は彼に言った。適者生存——これが新たなモラルなのだ。彼もレーガンは嫌いだ、と言う。

ブーテンは長編小説を何冊か書いている。レイに読んでくれるようにと、1冊置いていく。金髪のブック・カバー・エディター、ローレンスは英語をほとんど話さない。あの美しいおつむで何を考えているか知れるだけでも、フランス語を習う価値はありそうだ。

レイからテスへ（1987年4月9日木曜日パリ）手書きの即席誓約書

家に帰りたいです！

R. C.

サン・ペレ・ホテルにて

ポート・エンジェルズに帰ったあかつきには、テスと浜辺を毎日（たぶん）、散歩することを約束する（つもりです）。

R. C.

4月11日 サンカンタン（フランス）

きのうは移動日。この町まで、パリから列車で1時間。フランソワと

一緒の旅。その前の晩は、マヤ・ナウム（小説家）、オリヴィエラと過ごす。マヤはチェルジア人。今、長編小説を執筆中だ。子どもがいるそうだが、とても綺麗な人。釣りが好きという彼女を、今度ポート・エンジェルズへいらっしやいと誘う。

列車での旅の間に、私たちはフランソワのことをいろいろと知った。彼は母親が47歳の時の子だそう。子どもができない体と思われていたが、彼が生まれた。そのお母さんも昨年亡くなったが、まるで祖母に育てられたような感じだった、と彼は言う。父親は彼に博士号を取らせなかったのだが、彼は中退してしまった。あるいは出席不足で退学させられたのか？ 結核に二度かかり、サナトリウムに入院していたこともあるそう。アメリカ生活（ニューヨークとツーソン）も経験している。今日、彼は私に、ツーソンの黒人地区で道に迷ってしまい、ある黒人娼婦の家へ転がり込んだときの話をした。朝になり、八マイルほど離れた町中まで送ってくれるというので、身支度するのを待っていたが、戻ってきた彼女が誰かまったく分からなかった。なんと蜂の巣のようなカツラをつけていたのだ。しかもそのあいだ、彼女の娘たちが部屋を出たり入ったりし、そのうえ、娼婦から「あんたはあたしの死んだ息子に生き写し」と何度も繰り返言われて、これにはさすがのフランソワも参ったらしい。

今朝、フランソワと私はミュージアムへ行った。彼は磁器や家具、絵画類に詳しい。そのあと市場へ行って、彼に木綿の靴下と蜂蜜石けんを買ってあげた。甘草アメリョリスのスティックを買ってなめる。子どもの頃よくかじった木の皮を思い出す、とフランソワ。突然の雨。彼がスカーフを貸してくれた。今度、母さんの形見のシルクのレインコートをあなたにあげる、と言う。それは彼の友情のしるしなのだ。胸に深く響いた。

4月12日 サンカンタン

カメラを持ってないときに限って、とっておきの出来事がある。今日はゴンクール賞の授賞式。私たちはちょっとセブっぽく遅れて到着。今年の受賞者はモデルのような女性作家ノエル・シャトレだ。場内にレイの名前を読み上げる声が響く。ノエルの、じつに簡潔ながらエレガントで誠実な受賞スピーチ。彼女には巨大な花束と銀のメダルの入った緑色のヴェルヴェットのケースが授与された。これがゴンクール賞だ。後で、彼女は私にそれを持たせてくれた。次に、男性がレイのところへやって来て、テレビ用のライトで照らされたステージへエスコート。レイはこの町を描いた絵画を贈呈された。握手を交わしたノエルの手は氷のように冷たかった。主催者側の受賞スピーチに感動したと彼女。昨年亡くなった彼女の夫のことが言及されたのだ。(オリヴィエによると、彼女の夫は51歳という若さで肺ガンのため亡くなったとのこと。)

自身のスピーチでノエルは夫がいかに自分を励ましてくれたかについて語った。夫が危篤の間も彼女は書き続けたそうだ。「夫の死という苦難が彼女をいやが上にもエレガントにするんだろうね」とオリヴィエは言っていた。彼女の肌は透き通るように白く、ブラウン系のアイシャドウをしているので、臉がほとんど彫り込んだように落ちくぼんで見える。遠くを見るような、夢見るような表情は哀しげで、人生の悲しみも喜びもすべて水に流そうとしているかのようだ。彼女の父の故郷であるこの町で、市長やゴンクール賞の審査員たちから賞を与えられたことは、彼女にとってさぞ大きな意味を持つ出来事だったろう。

授賞式に続いて、カクテルが振る舞われた。ずらりと並んだグラスには、2色に分かれた緑色の飲み物。ミントとグレープフルーツのリキュールに小さなリンゴのスライスが浮かんでいる。一人の女性がレイにカクテルを盛んに勧めてくれる。「でもこれ、アルコール、入ってるでしょう?」「ほんの少しだけよ」と女性。彼は断るが、彼女はなおも勧める。

「いや、結構ですから、本当に」。飲み物と一緒に甘いクッキーの大皿が饗されているが、ほとんど手つかずだ。もったいない。晩餐会場のガラス戸越しに、部屋の端から端まで届く宴会テーブルが見える。これにはびっくり。いつの世かの王侯貴族のようだ。カメラマンにあとで写真をくれるように約束した。中に入ると、私たち二人はすごい光景にわくわくどきどきしている子どもみたいで、ただ呆気にとられるばかり。

動物を象った食べ物が並ぶ。ワニ、ヤマアラシ、しっぽが魚の薫製でできた七面鳥。そして、テーブルの上の一段上がったところに置かれているのは、イノシシの頭の詰め物。開きかけた口からくりと巻いた真っ赤な舌がのぞき、その黒い目は下に並ぶごちそうの数々を見下ろしている。アヒルの親子は頭が若鶏の首でできていた。ジャン・ヴォートランを先頭に、皆ロブスターに突進。赤ワインの大樽も置かれており、中身は小さなビーカーに小分けされ、テーブルの上に。肉の冷製、パテ、サラダはまだほんの序の口。次に、巨大な銅鍋のところでは、素晴らしいソースを添えた肉料理がサーブされる。レイはグラタンをもらう。赤ワインの瓶が次々にテーブルへと運ばれるが、空になっているものは少ない。パリで聞いたところでは、フランスではお酒は食事とともに始まり、食事を食べ終わったところで止めるものとされており、どんなに高価なワインを飲み残しても、手をつけないしきたりなのだとか。

(今、この日記を書いているところへ、レイが入ってきた。卵とベーコンの朝食が食べたくて探しに行ったのだが、日曜の朝、このサンカンタンでは見つからなかったらしい。腰を下ろして、干からびたクロワッサンを囓っている。私がもしかの時のために昨日の朝残しておいたのだ。彼はコーラの瓶を開ける。コーラとクロワッサン。「ぼくはヴァンス(ヴィースバーデンに住むレイの息子)をすっかり見直したね、尊敬するよ」と彼は言う。「英語の通じない国で1年間も暮らしてるなんてさ。英語の会話が恋しいなあ」。)

晩餐会の方は、ジャズバンドが演奏を始めた。私たちはデザートを食べる。カスタード・ベースの苺タルト、それにコケモモのムース。とても軽い。ジャン・ヴォートランと、生え際の白くなった赤毛の女の人が踊り始める。それに誘われてレイと私も踊りに行く。

皆におやすみなさいを言って、ちょうど帰ろうとしていたとき、大ホールの巨大なシャンデリアの明かりが暗くなった。ファンファーレが鳴り響き、何やら壮麗なるショータイムの始まりだ。高いシェフハットを被った料理人たちがホールへお出まし。特大のケーキを三人がかりで捧げ持って、ノエルのところへ運んで来る。ぼう然と立ちつくしていた彼女は、彼らに会釈し、感極まった様子。ケーキの上に立てられた花火が、さかんにシューシュー音を立てている。その後ろから、さらにシュークリームや焼き菓子を載せた大皿を持った給仕たちが出て来た。ケーキがビュッフエテーブルの上に置かれると、テーブルの両端がライトアップされ、一人の男の人がピラミッドのように積み上げられたスパークリングワイングラスのてっぺんからピンク色のシャンパンを注ぎ始めると、それは噴水のようにグラスからグラスへと流れ落ちてゆく。向こう端でも、女の人がピラミッドに注ぎ始めた。その瞬間、グラスの落ちる音。割れたのかしら？　すると、二人の給仕が飛んで行って、ケーキの近くのグラスのピラミッドを支えた。シャンパンの噴水が流れきると、グラスはすべて満たされた。ピラミッドを崩さないように、一つ一つそっとグラスを取る。

私はシャンパンを飲み、レイはシュークリームを二つ取って、二人で食べた。その後、フランソワが私たちをホテルまで歩いて送ってくれた。

晩餐会でフランソワと隣り同土座った間に聞いた、彼のお母さんの話の続き。建築家になりたかった彼女は、父親に思いをうち明けるがまともに相手にしてもらえず、にべもなく反対される。そこで次に、歌手とキャバレーダンサーを目指し、オーディションを受けて、仕事を手に入

れるところまでこぎ着けたのだが、なぜか3週間部屋に閉じこもったまま、出てこなかった。実はオーディションの前に、学校に飽き飽きして教科書をすべて川に投げ捨ててしまっていたのだ。結局、家を出るために彼女はフランソワの父と結婚したが、終生、挫折感を抱き続けた。「母は、ガーデニングをし、料理がとても上手だった。僕たちは本当に仲が良かったし、僕は母を愛していました」。食べ終わった後、フランソワの救世軍スタイルのスーツに食べ物のしみができてしまっていた。けれど、彼はいっこうに無頓着。彼の一番すごいところは、何事にも動じないことだ。ズボンのジッパーが壊れていてひとりでに開いてしまうのでときどき確かめているが、さして気にしているようでもない。食い込んだりしたら、さすがに焦るだろうけれど……。今度彼に会うのは、六月にここを再訪する時になる。さよならを言うとき、泣きそうになった。ずいぶん親しくお互いを分かり合ったと思う。こんなふうに理屈抜きに誠実になれるなんて、めったにないこと。篤い友情だ。彼のハンガリー人の血と私のアイルランド人の血が、私たちを結びつけているのかもしれない。

4月13日 サンカンタン

フランス人の友人たちと別れの挨拶を交わした後、レイはジャン・ヴォートランの短編小説についてコメントしに彼の所へ行く。1編の方は気に入ったけれど、もう一方の方はまとまりがなく散漫。そして、そのことを本人に言うのはレイのもっとも苦手とするところだ。とはいえ、彼は難事をなすとげ、私が行ったときには、お互いなごやかにしゃべっていた。私はポラロイドカメラで写真を撮ってジャンにあげ、1枚は私たちの記念にした。フェスティバルの主催者、マルティヌ・グレイユが来て、車で駅まで送ってくれる。今朝方3時まで起きていたらしく、未だ夢見心地の様子。彼女は子どもの頃、作家や一般の人々が集まって創

作についての話を聞いたり語り合ったりできたらいいのにと思っていた。自らが書くという野心はないと言う。「ここに何も無いので」と、胸をぼんぼんと叩いた。しかし、彼女は自分のできることを見つけ、謙虚に、それでいて自信を持ってそれを実行しているわけだ。彼女の夢はまさしく自らの求めていることだったようだ。本当に魅力的な女性。

パリへ向かう列車の中で、翻訳ということについてフランソワが言ったことを思い出す。「作家はただ、自分の中からわき出てくることにだけ心を傾け、それを言葉にすればいいのだけれど、翻訳家は異国の世界を相手にせねばならない。己れを虚しくして、他者の世界に深く入り込んで行かなくてはいけないんだ。だから、ときとして道に迷ってしまうこともある」と。レイの小説を翻訳し始めた当初、彼はレイが登場人物たちを皮肉な目で見ていたと考えていたそうだ。ところがレイ本人の鮮明な写真を見たとき、そうではない、この作家は自分の登場人物たちをけっして見下すような人ではないと気づき、最初から訳し直したという。

フランクフルト行きのフライトは順調だった。税関の外にヴァンスが迎えに来てくれている。嬉しい。大した力持ちで、私たちの重たい鞆をこともなげに持ち上げる。電車でヴィースバーデンまで行き、ペンタ・ホテルに到着。

4月15日 ヴィースバーデン

昨日はライン川沿いをドライブ。快適なドライブを楽しみたくてメルセデスをレンタルする。インガ（ヴァンスの妻、レイの義理の娘）と私は後部座席、ヴァンスは前に座った。後進^{バック}の仕方がようやく分かったところで、ホテルを出発。まずは、ヴァンスとインガの家に立ち寄ってスクランブルエッグの朝食をごちそうになる。アパートはとても居心地がいいが、親子三人には手狭で、外が騒がしいらしい。落ち着いて机で仕事もできないし、夜は耳栓をして寝るほどなんだ、とヴァンスは言う。

私たちはヴァンス一家のアルバムを見せてもらう。ペルーや北アフリカの辺境、その他見知らぬ無名の土地への旅行。それから、海辺や小さなボートの上での写真。居間には、赤い旗が付けられた大きな世界地図があって、それらはいずれもインガがフライトアテンダントとして仕事で訪れた場所だ。

私たちはバギー（レイの孫娘）をベビーシッターの所へ預けて、出発した。右手の急な斜面にワインブドウ園が見える。道の反対側にブドウ園がないのは、日がまったく当たらないからだろう。車の揺れに眠気を誘われ、私は口数が少なくなり、ぼんやりと車窓を眺めている。川面には荷物を運ぶ舢舨が何艘か浮かんでいる。前の座席でレイとヴァンスがしゃべっている間、インガと私も少し話をする。親友と呼べる人がいない、と彼女は言う。以前、どうしても誰かにうち明けたいことがあって、私に手紙を書いたが、結局は投函しなかったそうだ。でも、書くことでずいぶん楽になりました、と彼女。

ローレイがそこに座って長い金色の髪を梳かしながら水夫たちを誘ったという岩のところで車を止める。ヴァンスとインガはとても仲睦まじいようだ。数枚、記念撮影。それから、ライン川ぞいの村でレストランを見つけて入る。オーナーがポークとシュベツツレの料理を準備してくれるという。全部食べきれないといけないからと言って、パンを出してくれない。

ライン川沿いのドライブから帰って、夕方近く、レイと私はホテルで昼寝。それから、コーヒーを飲んでヴィースバーデンのカジノへ行く。ドストエフスキーがここで当てた後、身代を擦ったというシュピールバンク・カジノ。ドストエフスキー・ルームという、彼の名前を付けた部屋まである！ 私は5マルクチップを50マルク分買って、5番テーブルでルーレットを始める。私とレイは赤に賭けて数回勝った後、今度は「偶数」に賭けてまた勝つ。黒人の男の人が数と数の間の境界線にチッ

プを置いて、2つの数字に賭けているのを見守った。こうすると当たる確率は高くなるが、配当倍率は下がる。しばらく見ていたがテーブル近くに場所を確保しているのがだんだん大変になる。賭け手達が私を押しつけて群がり、何度か^{つね}抓られた。明日はきっと痣ができているだろうが、いちいち気にしてはいられない。ルーレットがいかにか攻撃性を必要とするゲームかを、初めて身をもって思い知った。

さて、私の脳裏にようやく閃くものが！ 数字の24。これに賭けなくちゃ、と強く確信。ドストエフスキーが私に憑いている！ 自分に言い聞かせるまでもない。私には分かる。1つの数字に賭けるのはこれが初めて。配当倍率は35対1だ。回転が止まった。他のチップはすべて掬い取られ、私の（5マルク）チップだけが残される。「私のよ！」レイに言う。テーブルの周りからため息のようなどよめきが漏れる中、クルピエが「175マルク」と言って、チップを山と積み上げ（赤い100マルクチップが1枚と、残りはすべて青のチップ）、私にそのチップを集めに来るように言う。場所を失いたくなかったので、私は彼にチップをこちらへ回してくれるよう手振りで頼み、にっこり微笑んだが、彼は再度、こちらへ来いと言う。積み上げたチップを崩したくないのだ。仕方なくそちらへ行こうとしたのだが、その時にはすでに、彼がすばやくチップをこちらへ押しやってくれていた。クルピエがまた戻しかけたので、私は慌ててレイのそばの、元居た場所へ戻った。自分の勝利金をこの手で掴むというせっかくのチャンスを逃したくなかったのだ。馬鹿馬鹿しいと言えばそれまでだが、譲れないことに思われた。そんなわけで、再度、クルピエは私の方へチップを押しやった。私が5マルクチップをクルピエに渡すと、「おめでとう！」と祝福してくれる。どうやらこういう勝ちが珍しいらしい。この後、さらに3つの数字に賭けてみたが当たらなかった。赤と黒に賭けて勝ったけれど、さっきの大勝ですっかり疲れ果ててしまった。不思議な透視力に通じたお陰で、「普段の」エネルギー

ギーまで吸い取られてしまったような気分。午後10時半。私たちは、きっかりもう1時間だけ遊ぶことにし、その後、食事となった。

隣接する豪華な食堂へ移動。大理石の柱、巨大なシャンデリア、各テーブルにはろうそくと花が飾られて、天井には凝った金色の模様が施されている。一方の隅に電光掲示板があって、各台で行われているルーレットの当たり番号を表示している。私たちは3番の台に興味を持つ。赤ばかりが続けざまに当たっているのだ。食事中、ずっとそれを見ていた。ロブスターサラダの軽い食事。ロブスターの頬肉のところを軽く暖めてある。私はウズラのスープというのを注文する。ほとんどコンソメという感じ。肉のかけらが浮いているのは、ウズラの肉か？ ビー玉ぐらいの大きさに切ったニンジン、その他の野菜が入っている。レイのデザートは、シャーベットを添えたリキュール風味のフルーツ。私のは、リキュールの利いた苺とキーウィのケーキ。ミントの葉っぱが飾ってある。最後にコーヒーとクッキー。私たちを給仕してくれたウエイターはとても感じが良かったし、じつにお上品な店だが、いかにせん食事の量が少ない。やっぱり私たちは労働者階級出身なのだろうかとつくづく思った次第。だって、あれでは、一日、丸太の切り出しに明け暮れた人間のお腹を満たすことなんて、とうていできないもの。

4月16日 チューリッヒへ向かう列車の中で

車中にて。チューリッヒへは四時間かかるとのこと。ハロルド⁽²⁾に会うのが待ち遠しい。昨日のビッグイベントはウルフラム・ティーマン⁽³⁾の来訪。若い頃知り合った、私のドイツ人の友人だ。彼をホテルで待ちながらも、まさか彼が本当に5時きっかりに現れるとは思っていなかった。(なにしろ、彼の住むブレーメンからここまで6時間もかかるのだ。)しかし、彼は5時きっかりにやってきた。私は2時間の昼寝から覚めたばかり。風邪のため、からだか睡眠を欲しているらしい。

レイがまた煙草を吸い始めた。この一等車のコンパートメントには5人の乗客がいる。私の左の男性はモンブランのペンで書き物をしていて、私に書き味を試させてくれるという。1000マルクも出せば純金製のこういうペンが手に入りますよ、と。車窓を流れる村々。窓の外に布団や敷物が干してある。お日様に干して、さっぱりと乾いた布団の心地よさを思い浮かべる。

夕べの追想。ウルフは本当に嬉しい飛び入りだった。ホテルでコーヒーを飲みながら政治談義。奥さんのイーザから言づかったという手みやげは、可愛いマグカップ。優しい心遣いだ。来る途中、ウルフは大学生を何人か便乗させてあげたそう。中には、女性問題のため、緑の党で活動している女学生もいたとか。

彼の楽しいユーモアは次々と周りの者に伝染する。エネルギーに溢れ、快活かつ勤勉。好奇心旺盛で、生き生きと楽しげに生きている。どれも人から愛される資質といえる。そして、信頼のおける、深い、誠実な真心。まったく、不思議な友情だ。複雑な巡り合わせに驚くばかり。これまでも、本当に様々なところで私たちは会ってきた。ニューヨークの街で彼とイーザに会うため、吹雪のまっただ中を、シラキウスから列車で駆けつけたこともあった。

ウルフと私はマインツまで車で向かったが、ヴァンスの家へ行こうとして道に迷い、2度も道を引き返すことになった。ようやくマインツの駅に到着して、ヴァンス、レイを見つける。コーヒーを飲みながら、彼らに紹介。レイがウルフのことを好きになってくれるかどうか、私にはとても切実な問題だと気づく。けれど、レイはすごく疲れている様子。さっきまで気を失っていたみたいな表情をしている。まったく、父親業というのは膨大なエネルギーを要するものなのだ。しかし、ウルフは一服の清涼剤だ。レイは気を取り直すため、いったん席を立ち、トイレへ。ギアチェンジをして戻ってくると、話はまた政治の話題で盛り上がる。

レイはウルフの歴史認識や、いろいろな問題に対する考え方をとても好ましく思ったようだ。ウルフは、ドイツ駐留のアメリカ軍基地問題に関してはちょっと愛国主義的にならざるを得ないな、と言う。アメリカ軍は何事も問答無用。ドイツ政府に一切相談無くボタンを押してミサイルを発射できるのだ。これでは、いつまでたってもドイツは占領国のままだ、とウルフ。

ウルフとレイはお互いすっかり意気投合し、彼は、「今度はブレーメンへおいでよ」と私たちを招待してくれる。ウルフを、彼の車のところまで私たちの車で送って、赤信号で降ろした。いつものように陽気に、元気に歩いてゆくウルフ。そんな彼を見ているだけで楽しくなる。手を振って、微笑み、また手を振って見送ってくれる彼を後にして、私たちの車は走り去った。

(次号に続く)

原注

- (1) 初出 *Antaeus* 61 (autumn 1988) 『アンタイオス 61号』。Copyright © Tess Gallagher.
- (2) ハロルド・シュヴァイツァー。私たちのスイス人の友人。チューリッヒ在住。詩人、文芸評論家、学者、チューリッヒ大学英文科長補佐。
- (3) ウルフラム・ティーマン。1968年に私がアイルランドを旅した時以来の友人。現在はブレーメン在住の科学者。

テキスト

Gallagher, Tess. "European Journal, April 5 – June 26, 1987." In *Soul Barnacles: Ten More Years with Ray*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2000. 14–55.

中世仏語版ローマ七賢人物語A本試訳

——第1話「松の木 (arbor)」・第2話「獵犬 (canis)」・第3話「猪 (aper)」——

長谷川 洋

「ローマ七賢人物語」の表題をもつ説話集の翻訳には、すでにラテン語版によるもの（西村正身訳『七賢人物語』、未知谷、1999年）、イタリア語版によるもの（鳥居正雄「Libro dei sette savi di Roma—fiabe italianeの原点」：米山喜晟・鳥居正雄『イタリア・ノヴェッラの森』、佐井寺三角社、1993所収）、英語版によるもの（ジョージ・エリス編・松村恒編訳『七賢人物語』、OMEGO Verlag、1994）があり、古くは1930（昭和5）年の金子健二訳註『英吉利中世詩ローマ七賢物語』（健文社）もあるが、以下に紹介を試みるのは系統図のうえでこれらの「親」にあたる13世紀中世フランス語版のうち的一本からのものである。

テキストは、代表的な写本の忠実な活字翻刻版である

- ① *Les Sept Sages de Rome*, Roman en prose du XIIIe siècle, d'après le manuscrit n° 2137 de la B.N., par la section de traitement automatique des textes d'ancien français du C.R.A.L., Equipe de Recherche Associée au C.N.R.S., Centre de Recherches et d'Applications Linguistiques, Université de Nancy II, Nancy, 1981 (*Travaux du C.R.A.L.*, n° 2).

を用い、同じ写本の批評校訂版である

- ② Runte, Hans R., *The Seven Sages of Rome: A Critical Edition of French*

Version A from all Manuscripts. [2006]

を参照した。また、次の英訳も参考にした：

- ③ *The Seven Sages of Rome* (Frech Version A), Translated literally by Hans R. Runte, from MS. Paris, BN f.fr.2137, fol.1-46 (13 th cent.) (MS. T), as edited on-line, with variants from all manuscripts, by Hans R. Runte [2006].

他に現代仏語訳として次のものがある：

- ④ Kukulka-Wojtasik, Anna, et al., eds. and trans. *Roman des sept sages* : travail semestriel des étudiants du Séminaire littéraire “Conte didactique et de sagesse au Moyen Age : *Le Roman des sept sages*.” University of Warsaw, 2004-2005.

以上のうち②③④は電子テキストで、いずれも Society of Seven Sages の website から見ることができる。

本稿には全53章（全15話）のうち冒頭から12章（第3話）までを収める。章番号（[01] ～ [12]）は①によるもの；その他の [] は訳者による注記。読みやすくするために適宜改行し一行アケを設けた。

なお、この「ローマ七賢人物語」を含む巨大な説話群の起源・系統・所収話・研究史・文献については、B. E. ペリー、西村正身訳・解説、『シンドバードの書の起源』（未知谷、2001）に西村教授による詳細な解説がある。

ローマ七賢人物語

[01]

ローマにディオクレシアンという皇帝がいた。かつて娶った妻には先立たれ、その妻とのあいだに世継ぎの男の子が一人残された。皇帝は年老いており、息子は七歳であった。

ある日のこと、皇帝は、七人の賢者を、一人ひとりその名を呼んで召出された。

皇帝は仰せられた。「賢者たちよ、余は汝らのうちの一人に息子を委ねて学問を学ばせようと思うのであるが、引受ける者はおるか。」

最長老の賢者がまず口を開いた。

この賢者は最も富裕で、誰よりも親類縁者に恵まれ、家柄も極めて良かった。年老いて [髪や髭の] 白きこと羊毛のごとく、長身瘦軀で、その名をバンシラと言った。彼は向き直り、皇帝に向ってこのように述べた。

バンシラは言った。「陛下、わたくしにお任せくださいませ、さすればわたくしの知る限りのこと、我が同輩の知る限りのことを七年で伝授してみせましょう。」

次いで第二の賢者が立った。

この者は、背は高すぎず低すぎず、くわえて姿かたちは立派で、髪は白髪まじり、むしろ白が黒に優っており、その名をアンシルと言った。彼は皇帝のかんばせを拝して言った。[後段では第二の賢者はオーギュストとなっている。]

アンシルは言った。「陛下、このわたくしめにお任せくださいませ。さすればわたくしの知る限りのこと、我が同輩の知る限りのことを六年で伝授してみせましょう。」

次いで第三の賢者が立った。この者は縮れ毛の瘦せて小柄な人で、その

名をランティリュスと言った。

ランティリュスは皇帝に言った。「陛下、わたくしの知る限りのこと、我が同輩の知る限りのことを五年で伝授してみせましょう。わたくしにお任せにならんことを。」

第四の賢者が皇帝の御前に立った。その名を赤毛のマルキダルと言い、好んで人をからかうおどけものであった。

マルキダルは言った。「わたくしにお任せくださいますように。わたくしは我が同輩の知恵を伝授するわけには参りませぬが、自分の知れる限りのことを四年で伝授してみせましょう。」

次いで第五の賢者が立った。その名をローマのカトンと言った。この者は壮年で、髪は白髪まじりではあるが黒が白に優っていた。

カトンは皇帝に呼びかけて言った。「陛下、どうぞわたくしめにお任せください。わたくしは王子様がどれほど利発であられるかもどれほどご聡明であられるかも存じませんので、我が同輩の知れる限りのことを伝授してのけるとは申しかねますが、わたくしの知る限りのこと、わたくしの知りうる限りのことならば、王子様のお出来になる限りの速さで伝授してみせましょう。」

次いで第六の賢者が立った。その髪は蠟よりも白くまた縮れており、目は鷹を思わせる緑色であった。鼻筋は高く顔との釣合もよろしく、肩はたくましいが体つきは華奢で、あごひげも口ひげもなかった。その名をジョセと言った。

ジョセは皇帝に言った。「陛下、わたくしにお任せくださいますように。三年ののちには陛下のお褒めをあずかるように相努める所存でございます。」

次いで第七の賢者が立った。その名をマルティノと言った。[後段では第七の賢者はムロンとなっている]

マルティノは皇帝に言った。「陛下、人生の全てを捧げておつかえしてまいりましたこのわたくしにご褒美を賜りたく存じます。御子息の教育はどうかわたくしにお任せください。さすれば陛下におかせられてはなんのご損もございませんのに、わたくしにとりましてはそのご褒美は感謝して余りあるものとなりましょう。」

[02]

皇帝は少しも偉ぶることなく一同に答えた。「皆の衆、余のために尽くさんとする心ばえをかたじけなく思うぞ。かくもうるわしきともがらを切離すことは余にはできぬ。」そして息子の手を取って仰せられた。「これを汝ら七人に委ねるぞ。」そこで一同は跪拝して、めいめいがそれぞれ五百たびのお礼を申し上げた。

賢者たちはうち揃ってその子を議事堂へ連れて行った。そこは彼らがローマの人事百般について重要な討議や大きな裁判を行う場所である。彼らは話合いの末王子をローマに置かぬことに決める。ローマにいては巷の女人や下婢や悪童どもの下賤な言葉を覚えてしまうからである。彼らはローマを去ること一リュウ [4キロ] ばかりのとある果樹園を選んだ。この果樹園は四辺とも一リュウ、美しい木々がくまなく植えられており、考えうるかぎりの見事な泉水がすべて備わっていた。彼らはこの果樹園

の真中におあつらえむきの良い場所を選び、瀟洒な方形の屋敷を建てさせ、屋敷の奥にはいく部屋もの大きな寝室、表側にはこれまたいくつもの洒落た小部屋を配した。屋敷が落成すると七賢人は内部の四壁に七学芸を描かせた、第一に天文学、次いで降霊術、音楽、算術、修辞学、弁論術、文法学である。彼らは広間の一隅に幼い王子の寝台を置かせてこれら七学芸が眺められるようにした。

賢者たちは王子の教育にとりかかった。一人が王子を離れると次の者が引き継いで、おのおのの学識の粋を授けていった。このようにして王子を預かること七年、王子は七学芸に通曉するに至った。

この七年が過ぎてのちもなおひさしく王子を手元においたかいあって、王子はどんな学問についても彼らと議論を戦わすことができるようになったので、彼らは話し合っって王子の知恵を吟味してみることにした。そこで彼らはキツタの葉を十六枚摘んできて、そのうちの四枚を彼の寝台のそれぞれの脚の下に差入れた。床が整えられると若い王子は横になった。暗かったので彼は何も心づかなかった。朝が来て目覚めると、若い王子は上のほうから下のほうへ、右のほうから左のほうへとしきりに眺め回した。賢者たちは彼の当惑するさまを見ておおいに驚き、彼を呼んで何を聞き何を目にし何を感じたかを尋ね、答えてみよと言った。

若い王子は答えた。「良き師よ、どうやらこの屋敷の天井は低くなったようです。さもなければ地面が持ち上がっているのかもしれませんが、わたしの寝台が高くなっているのかもしれませんが。」

彼らは顔を見合わせて、口々に彼の賢さを語り合った。

[03]

それからほどなくして、ローマの賢者たちは彼の父の許に参上して述

べた。「陛下がご結婚あそばされぬことをわたくしどもは遺憾に存じます。御領地の廣大にして貢ぎ物の豊かなることは、お子様が三人授かりましても四人授かりましても、そのお子様たちが皆何不自由なくお暮しになってなお余りあるほどでありますのに。」

皇帝は年老いていたので、この言葉をなるほどと思い、熟慮の末に答えた。「しかるべき相手が見つかるよう力を貸してくれるならば、妻を娶るといたそう。余にはあとつぎが一人しかおらぬからな。」

彼らは答えた。「よろこんでお探しいたします。」

そこで彼らはあまたの国々を探し求め、ついに候補者を見出して、その女人をつれて皇帝の前に参上した。皇帝の目に彼女は美しくしとやかに映った。賢者たちは彼女が高貴な血筋のものであることを告げた。国のならわしに従って、この貴婦人の両親は娘を皇帝に献上し、皇帝も娘を両親から嘉納した。皇帝は妻を愛するどんな男も及ばぬほどに彼女を愛し、貴婦人のほうもまた同様であった。

ある日のこと、皇帝と妃は差し向かいで寝室にいた。皇帝に男子の世嗣ぎがあることと、皇帝が世を去った場合には直系であるその世継ぎがローマ帝国の後継者となるということは、妃はすでに聞かされていた。

二人だけのいるその寝室で、妃は皇帝に話しかけた。「陛下、陛下には御子息が一人おありでいらっしゃいますが、陛下のお子様はわたくしの子供でもあるのでございます。この先わたくしたちに子供が授かるとは限りませんが、ずっと御子息を遠ざけておかれるおつもりでおいでですか。わたくしが参りましてから七年になりますが、ついぞ顔を拝したことがございませんので、ぜひ一度お目にかかりたく存じます。陛下、わたくしを愛しておられるなら、どうか誰ぞ人を遣わして御子息をお召しになってくださいませ。いまでは長いご治世のあいだにもかつてなかったほど大勢の学者や召使が陛下にお仕えしているではございません

か。」

「妃よ、それでは明朝あれのところへ誰か遣ることにいたそう。」

妃は言った。「陛下、かたじけのうございます。お目にかかるのがとても楽しみでございます。」

皇帝は二人の使者を召して仰せられた。「よいか、馬で一走りして、七人の賢者に余からのあいさつを述べよ。そして、息子を連れて参上することを余が求めていると告げよ。余は息子を試してみたいのだ、彼らのもとにあつて息子がどれほど物事を学んだか知りたいのでな。」

使者たちはさっそく馬に乗り、賢者と皇帝の息子とがいと教えられた場所に赴いた。彼らの来訪に賢者も王子もおおいに喜んだ。

使者たちはまず皇帝からのあいさつを述べ、そして彼らに言った。「賢者のみなさま、陛下には、お手許に預けられたこの年月のあいだに御子息がどれほど多くのことを学ばれたかをお知りになりたく、御子息をお連れのうち揃って参上せられるようにとの仰せでございます。」

賢者たちは言った。「喜んで仰せの通りにいたします。」

こうして彼らはその日を過ごした。

食事が済むと夕刻になっており、やがて暗くなって月が明るく輝き始めると、賢者とその弟子は広間を出て果樹園に降りた。七賢人は月と星を眺めた。一同のうちで最も賢い人であるカトンは月と星をじっくりと眺め、星の配置とその軌道の動きを読んだ。

眺め終えると彼は口を開いて言った。「みな聞いてくれ。陛下には我々に御子息を伴ってローマに来るようにとの仰せであるが、もしもローマにお連れしたならば、御子息は口を開いて最初の一語を発したとたんに命がなくなる。そして我々もひとり残らず身の破滅となる。」

カトンは言った。「月の面にそう読まれるのだ。」

[他の] 賢者たちも続いて星と月を眺め、確かにそのとおりであることを知った。

続いて若い王子も、月から2トワーズ [約3.6メートル] のところにあるようにみえる明るく輝く一つの星を眺め、賢者たちに声をかけて言った。「ご覧ください、月のすぐ近くで星があのように光っているのはなにかの意味があるように思われます。」

若い王子は言った。「これは、もしわたしが七日経つまで口をきくことを我慢できるなら、わたしは死なずにすみ、先生がたも皆破滅を逃れることがお出来になるという意味なのだと思います。」

若い王子の言葉を聞いて賢者たちは彼の指差す星を眺め、彼の言うとおりであったのがわかった。

賢者バンシラは言った。「誓って言うが、王子の言われるとおりでである。相談して良い知恵を出さねばならぬ。」

若い王子は言った。「誓って申しますが、述べることをお許し頂けますなら、ひとつ思いついたことがあるのです。つまり、わたしは七日のあいだ口をきくことを慎まなくてはならないのですから、一日だって無事に過すことはおぼつかないでしょうが、先生方は世に七賢人と呼ばれておいでの方々なのですから、そのお知恵とご分別でひとり一日ずつわたしを守ってくださるようお願いしたいのです。先生方にはたやすいことだと思います。」

賢者バンシラは言った。「もちろん引き受けるとも。」

カトンも言った。「わしも異存はない。」

若い王子は言った。「それなら安心です。ではお一人ずつご自分の番の日いらしてください。どうかお間違えになりませんよう。それまではここからすぐ近くのサン・マルタンの町でお待ちになっていてくださ

い。」

若い王子は言った。「先生方、これからは苦難の連続だと思えます。神様にかけて、どうかわたしをお見捨てにならないでください。」

そこで彼らはその場をあとにして歩き出し、広間に戻って皇帝の使者たちをもてなした。若い王子は思索に没頭し、一晩中、さらに日が変わってもずっと考え続けていたために気が付くと朝になっており、賢者たちも起き出してきた。若い王子の馬にもその師 [バンシラ] の馬にも鞍が置かれた。この賢者は、暮しを共にしているあいだずっと、一同に必要なものがあれば調達してきてくれる人であった。若い王子は泣きながら賢者たちと別れた。彼はローマに赴き、賢者たちはサン・マルタンの町にとどまった。

皇帝は息子がやってくると人々が語るのを聞いて、さっそく馬に乗り、彼につき従う家臣の幾人かにもそうするように命じた。皇帝は街道の道半ばで息子に出会うと、歓迎の言葉をかけ、彼の顎に手をあてて接吻した。王子は皇帝に会釈し、他の家臣たちも会釈を返した。広間に登る階段の前に至ると皇帝も他の皆も馬を降りた。

[04]

皇帝は息子の右手を取った。そして彼らは宮殿の階段を上った。皇帝は息子に変わりはないかと尋ねる。若い王子は会釈をするが何も答えない。皇帝は仰せられた。「わが子よ、いかがいたした、余に口を利いてくれぬのか？」

しかし王子の方は一言も物を言わなかった。

皇帝は付き従う筆頭家令を呼んで尋ねた。「我が息子が物を言わぬのはいったいどうしたわけであろう？ 悪い教育をうけて言葉を忘れてしま

ったとしか思えぬが。」

家令は答える。「陛下、王子様は朝のうちは自由自在に言葉をあやつっておいででした。」

妃は、王の息子がやって来たが何も物を言わないと聞かされてほくそえんだ。さっそく彼女は持てるうちで最も豪華な衣装を身にまとい、大勢の貴婦人や令嬢を従えて広間にやってきた。皇帝と騎士たちは立ち上がって妃を迎えた。

妃は彼らの間を進み、皇帝の傍らに座して言った。「陛下、御息がもとはお話をなさったのでしたら、どうかわたくしにお任せくださいませ。話そうと思えばお話しになれるのでありましたら、きっとわたくしには口を利いてくださいますでしょうから。」

皇帝は仰せられた。「誓って申すが、余があれを賢者にゆだねた時にはちゃんと話せたのだ。」

彼は王子の手を取って妃にゆだねたが、王子は動こうとしなかった。

皇帝は息子に向って仰せられた。「行くがよい。」

若い王子は父の言葉には背けず、立って妃とともに彼女の寝室に行った。妃はほかの貴婦人や令嬢をみな別の寝室に引き取らせ、自分と若い王子と二人きりで寝室に残った。二人は絹地の覆いを被せた贅沢な刺子の座布団に腰を下した。

妃は話を聞いてもらおうと彼をひたと見つめて言った。「いとお友達、いとお方、わたくしの申し上げますことをお聞きくださいませ。おうわさはよくうかがっております。たいそうよく物をお知りでいらっしゃるのと、そんなあなたをわたくしは恋するようになりました。あなたのことが好きで好きでたまらないものですから、わたくしは手を尽くしてあなたのお父様に娶っていただき、あなたのために娘のままにいることにして、おとうさまには触れさせませんでした。ですからどう

かわたくしを愛してくださいませ、わたくしの愛は変ることはありませんから。」

そして妃は両腕を王子の首に投げかけたが、王子は身を引いた。妃は接吻を求めて彼のあごに手を置いたが、彼はさらに身を引いた。

妃は言った。「いとおしいお友達、どうして何もおっしゃらないの？ どうして楽しもうとなさらないの？」

若い王子は父の名誉とおのれの名誉を守ろうとして、一言も物を言わなかった。

[05]

王子から言葉を引き出せないことがわかると、妃は身にまとう絹の衣装や白貂の上衣や肌着に両手をかけて胸の半ばまで引裂き、さらに手練手管に不足せぬ悪女の本性をあらわして両手を髪に突っ込み、ひと握りむしり取った。顔には両手をあてて爪をたてたので血だらけになった。さてこのような姿になってしかるのち、彼女は一声けたたましくも恐ろしい悲鳴を発した。家臣たちは広間にいたのでその声を聞いて寝室に駆けつけた。深く愛する妃がかくも無残な姿でいるのを目のあたりにした皇帝は激怒してわれを忘れた。

皇帝は仰せられた。「いったい誰がそなたをこのようなひどい目に合わせたのだ？」

妃は言った。「誓って申しあげますが、これなる悪魔めのしわざでございます。あやうく絞め殺されるところだったのです。おいでくださるのがもう少し遅ければ、わたくしは命がなかったか、さもなくば手込めにされていたことかもしれません。この者は陛下のおためになりません。これは一匹の悪魔でございます。お縄にしてくださいませ。」

皇帝は仰せられた。「余の首にかけて、あれが余の庇護をうけられるのもこれまでだ。」

そして皇帝は人々を吊して処刑する勤めに携わる兵士たちを呼ばせた。皇帝は仰せられた。「とっとと始末してしまえ、この者はもはや余の息子ではなくなった。」

兵士たちは言った。「陛下、おおせのとおりにいたします。」

それから一同は寝室を出て広間に入った。国の高官たちは事件を目の当たりにしたばかりか皇帝が息子の処刑を命じるという事の顛末に気も動転して生きた心地がせず、呆然としてなすすべを知らなかった。

高官たちは皇帝の前に出て言った。「陛下、陛下のなされようははなはだ遺憾に存じます。どうか御息子の処刑をあすの日までご猶予くださいませ。しかして陛下の法廷のお裁きによって御息子に落度ありとせられるのをお待ちの上、しかるのちにご執行あそばされますように。」

皇帝は仰せられた。「よかろう、さらば明日まで待つて進ぜる。」

そして、逃げられぬよう地下牢に放り込んでおけと皇帝は命じた。

妃は若い王子の処刑が延期されたことに切齒扼腕した。そして、打つ手を考えて夜が来るまでひとり何事かつぶやき続けた。さきには彼を亡き者にせんと企てて果せなかったが今度こそはと策を練るのである。

夜が来て、皇帝は寢所に入った。妃はたいそう暗い表情で彼を迎えた。皇帝は仰せられた。「妃よ、いかがいたした？ なぜそんな顔をしてみせるのだ？ いったい何を考えているのか、そなたの心中を隠さず申すがよい。」

「かしこまりました、陛下、お聞かせ申し上げます。いまの陛下はもう殺されてお亡くなりになったも同然でございます。陛下を追払い領地を我が物にせんとする者がやって来たのでありますから。とおからず実行に移すことでありましょう。わたくしは陛下の御息子のことを申し

上げているのです。自分の〔根から〕小さな松の木が伸びたためにあの松の木が蒙ったのと同じことが、かならずや陛下のおん身にも降りかかることでございましょう。」

皇帝は仰せられた。「小さな松の木のせいでその松の木にいかなることが起ったと申すのだ？」

妃は言った。「陛下、よろこんでお話いたしますゆえ、どうぞお聞きくださいませ。」

【06】此の処、妃が語る 【妃の語る第1話 松の木 (arbor)】

むかしこの町にたいそう見事な果樹園を持つ市民がおりまして、その果樹園は広大であらゆる種類の有用な樹木が植わっておりました。その果樹園の真中には、姿かたちの見事なことでも、その丈の高さでも、幹のまっすぐなことでも、他のどんな木も及ばぬ程の一本の松の木がありました。市民の男は望みうる最上の土を取寄せてその松の木の根元に入れさせました。その木は枝葉を繁らせてすくすくと伸び、そしてその勢いのよさのあまり太い根のひとつから松の木の芽生えが頭を出しまして、これまたすくすくと伸びたのでございます。その市民は見れば見るほどうれしくなりまして、望みうる最上の土を取寄せて、その松の根元に入れさせたのであります。それからしばらくして市民の男は商用で旅に出て長く留守をいたしました。帰ってきていの一に果樹園に行ってみましたところ、小さい松の木は育っていないように見えました。そこで彼は庭師を呼んで言ったのです。「これはどうしたわけだろうね？ 私の小さい松の木はなぜ育ってくれないのだろう？」

庭師は言いました。「旦那、なぜかとおっしゃるんで？」

男は答えました。「ああそうだ。」

「手前が教えて進ぜましょう。上をご覧なされ、この、大きいほうの松の枝がかぶさっているものだからこいつは伸びられないんです。」

市民の男は言いました。「その枝を払ってしまっておくれ。」

「ようがすとも、旦那。」

庭師は斧を掴んで梯子に乗るや、狙い定めて打ち込んで、その枝を切り落しました。枝が落ちると、市民の男は庭師に言いました。「[もっと]切って上を透かしてやれ。」

「ようがすとも、旦那。」

[07] 妃の語る物語の続き

妃は言った。「陛下、こうして大きい松の木は彼の小さい松を守るために枝を切られて無残な姿になるのですが、話はそれだけでは済まないのをございます。小さい松の木が木の根元の肥えた土 [原文 *cresse* は不明; *graisse de la terre* (創世記27:28「地の腴(あぶら)』) のことか] からどンドン伸びていきましたので、その勢いの良さのせいで太い根が一本浮き上がってその部分が枯れてしまったのです。ある日市民の男がまた果樹園を訪れて眺めますと、あの小さい松の木はすくすくと伸びてもう一本の松よりも高くなっておりました。さらに目をこらしますと大きかったほうの松の木には枯れたところができておりますので、彼は庭師に言ったのです。」

彼は言いました。「どうしたわけかな、この大きい松が枯れておるのは？」

庭師は言いました。「旦那、旦那の小さい松の木が影を作ったせいでき。」

庭の持ち主は言いました。「それでは切り倒してしまえ。」

庭師は言いました。「ようがすとも、旦那。」

妃は言った。「陛下、こうして大きい松の木は自分の体から生えたもう一本の松の木のせいでその値打ちにふさわしからぬ扱いをうけてあえなく切り倒されてしまうのですが、陛下のお血筋を引く御子息の場合にも

やはりこれと同じことが申せるのでございまして、現にあの者は陛下を誹謗中傷いたしております。それはこの帝国の臣民がいまやこぞって陛下に叛旗を翻し皇帝の座から引きずり下ろそうとしていることからあきらかでありまして、なりゆきによっては陛下はすでに一昨日の日にこの世から解放されてしまっておられたかもしれないのでございます。でありますから、ちょうどあの市民の小さい松の木のせいで〔大きい〕松の木が切られてしまいましたのと同様に、陛下もまた、このままではご自身をこの世から解放してしまわれることになりかねないのです。」

「わしの首にかけて、妃よ、そうはさせぬ、王子は朝が来たら死んでもらうぞ。」

かくして皇帝はこの時から翌日まで水入らずで過される。

起床すると皇帝は家来を呼んだ。

皇帝は仰せられた。「それ、息子を牢から引き出して処刑せよ。」

彼らは地下牢へ行き、若い王子を引き出した。城門はみな開け放たれ、宮殿は国の貴族たちで満ちた。彼らは兵士たちが若い王子を引き立てて行くのを見た。彼の姿を目の当たりにした〔ローマの〕人々はみな胸を痛め、幾人もが往来で気を失った。まさにこのとき七人のうちの最初の賢者がやってきた。この賢者は家来たちが絞首刑にすべく引き立てて行く若い王子と遭遇したがどちらも無言であった。賢者バンシラはそのまますれ違い、広間に上がる階段の下に来ると馬を降りた。幾人かの者が出て彼の馬を引いていった。賢者は階段を登り広間に入った。

賢者は皇帝に言った。「陛下、神が陛下に良き日を与えられんことを。」

皇帝は仰せられた。「神が汝を嘉せられざらんことを。」

賢者バンシラは言った。「陛下、いかがなされました？ 気は確かであればられますか？ なにゆえに御子息を死刑に処せられるのでございますか？」

皇帝は仰せられた。「なにゆえにとな？ 一つや二つではないぞ。聞くがよい。余は汝らに息子を託して学問を学ばせることにした、汝と汝の仲間たちにな。それは汝らが余の愛顧にふさわしくまた信を置くに足る衆と思えばこそであったのだ。汝らは七年もあれを手許に置きながら、第一に何を教え込んだかといえば、口をきかぬようにすることであった。第二には、余の妻を力づくで奪おうとすることであった。他にもあれが身に付けてきたろくでもない根性の数々、死刑にしても飽き足らぬ。あれの処刑が済んだならば、次は汝と汝の仲間がああの世に行く番だと心得るが良い。」

[08] 此の処、賢者が語る

賢者バンシラは言った。「陛下、お聞きくださいませ。王子様が口をきかなくなってしまったと仰せられますが、さようなことは王子様を死刑にする理由にはなりません。否むしろそれならば王子様はこれまでもまして大切にせられてしかるべきであります。さらに、いかにも王子様は力づくでお妃様を奪おうとせられましたが、それもまた王子様を死刑にする理由にはなりません。おそれながら、王子様がそのような気を起されたなどはとうてい信じかねるのでございます。」

皇帝は仰せられた。「誓って申すが、妃は髪を引きむしられ服を裂かれるというありさまであったのだぞ。」

賢者バンシラは言った。「いやはや！ 陛下、お妃様は王子様を九つ月のあいだ懐胎せられたわけではございませぬぞ。このようなことで王子様を亡き者になされますならば、自分の飼っていた猟犬のゆえにあの騎士の身に起りましたのと同じことがかならずや陛下のおん身にも降りかかることでありましょう。」

皇帝はおおせられた。「自分の猟犬のゆえにその騎士の身になにが起ったというのか？」

「陛下、御子息のお命を奪うのを後に延ばして下さるのでなければお聞かせ申すわけには参りませぬ。語り終わる前に王子様が亡くなってしまわれてはわたくしの物語は徒勞でありましょうから。」

皇帝は仰せられた。「誓って申すが、処刑を待ってつかわずぞ。」

賢者は言った。「王子様をここへ連れてこさせていただきますように。」

家臣たちはこの知らせを聞いて、みな歓喜の声をあげた。若い王子は連れてこられると賢者に向って跪拝した。王子はそのあと地下牢に戻された。

皇帝は仰せられた。「それでは語るがよい。」

「かしこまりました、陛下。」

【09】【賢者バンシラの語る第2話 獵犬 (canis)】

その町はたまたま「諸日曜日の中の王なる日曜日」を祝っておりまして、これは「聖三位一体の祝日」[復活祭の後の第8日曜日(6月頃)]のことでありますが、その日には騎士の身分のひとつたちは野遊びに出るならわしなのでございます。

その騎士が所有する牧草地は城館から見渡せるところにありまして、城館はまわりを城壁に囲まれておりましたものの、その壁はといえば歳月を経て古び、ひびが入っておりました。騎士自身は裕福な人でありまして、妻とのあいだにもうけた男の子はまだゆりかごを出ない赤ん坊でありました。赤子には三人の乳母がついておりまして、第一の乳母の役目は乳を与えること、第二の乳母の役目は湯をつかわせること、第三の乳母の役目は敷布を換えて寝かしつけることでありました。騎士は精悍で足の速い獵犬を飼っておりまして、その犬はどんな獲物であれ後を追って走れば追いつけなかつたためしはなく、またひとたび追いつけばあやまず捕えるのでありました。その獵犬は他のどんな犬も及ばぬほど

賢かったので、飼い主は何物にもましてこの犬をかわいがっておりました。

騎士は馬に乗り、剣を腰に佩き、首に盾を吊し、手には槍を握って、他の騎士たちとともに牧草地へ出て行きました。妻もまた跳ね橋の上の門をくぐって城館を出ました。乳母たちは赤ん坊〔のゆりかご〕を城壁の下に据えておいて、自分たちは石段を踏んで城壁の上の銃眼のところまで登っていったのであります。

[10] 賢者の物語続く

騎士たちは一対一の騎馬槍試合を始めたのですが、たまたま一匹の蛇が城壁に巣くっておりまして、盾と槍とのぶつかる音に、慣れぬこととて肝を潰し、鎌首を持ち上げると、ひび割れのひとつを通過して壁の中から〔中庭に〕出てきたのでございます。蛇はゆりかごに近づいていきました。猟犬のほうも、騎馬槍試合のにぎやかさに惹かれて広間の入口まで出てまいりましたところ、その大きな、見るもおどましい、毒牙を持った蛇を見つけたのであります。犬はすぐさま蛇に飛びかかって、その胴中をくわえました。蛇が鎌首をもたげて犬の首にかみつきますと、犬は苦痛のあまり一声吠えますが、すぐにまた蛇に立ち向かいます。すると蛇はゆりかごを跳び越えて逃げ、犬もそのあとを追って跳びます。この上を下への乱闘でゆりかごはひっくり返ってしまいましたが、さいわいなことに、ゆりかごの枕元にある二本の柱の丈が高かったので、赤子の顔は土に触れずにすんだのでございます。〔赤子が動かぬよう枠に帯紐を渡して体をおさえておく習慣であった；西村訳の挿絵11・12参照〕

蛇と猟犬の格闘がはじまりました。蛇が逃げようとしめすと猟犬はその喉首をがぶりと噛み、蛇は蛇で犬の横腹に牙をたてました。猟犬は痛さ

のあまり悲鳴をあげて再びゆりかごを跳び越えましたので、ゆりかごはもちろんのこと、そこいらじゅうに血が飛び散りました。猟犬はしまいに蛇を頭から啣えると、息の根を止めてくれんと力の限りに噛みましたので、蛇はとうとう息絶えたのでありますが、猟犬は憤怒のあまりなおも攻撃の手をゆるめず、胴を三つに食いちぎるまで蛇を離そうといたしませんでした。ゆりかごはもちろん、あたり一面血だらけで、勝ち誇る猟犬もまた血まみれになっておりました。猟犬は、広間に入るや苦しそうな声をあげて寝床に倒れ、瀕死の有様でうめき続けたのでございます。

陽が傾くと騎士たちの騎馬槍試合も終りとなり、めいめい自分の屋敷にひきあげました。乳母たちも城壁の階段を降りて広間に入ろうとしましたところ、ゆりかごがひっくり返っていてそのあたり一面血だらけになっているのを目のあたりにしたのでございます。猟犬のうめき声にそちらのほうを見てみますと犬は血まみれであったものですから、女たちはてっきりこの犬が狂犬となって赤ん坊を噛み殺して食べてしまったに違いないと思いました。それで女たちは泣き叫ぶやら髪を引きむしるやら口々にこう言い合うやらの騒ぎとなったのであります。「大変だ!」「どうしよう?」「お仕置き?」「逃げるのよ!」衆議一決、一同はまるびで逃走いたしました。いまや門を駆け抜けんとするところで、ちょうど跳ね橋を渡って帰ってきた奥方と鉢合わせしたのでございます。みな顔をひきつらせ恐れおののいておりますので奥方が訳をたずねますと、女たちは答えて、猟犬が狂って坊やを噛み殺してしまったと話したのであります。

[11]

その言葉を聞くと奥方は悲痛な声をあげて倒れてしまいました。やがて奥方がわれに帰ったところへ、他の騎士たちとの野遊びを終えた夫

が、首に盾を吊して戻ってまいります。馬上の騎士に、妻は、猟犬の気が狂って坊やを噛み殺してしまったのだと語りました。夫は「なんということだ」と言って中庭に急ぎ、馬を降りました。何人もの人々が馬を抑えたり手綱と槍を受け取ったりいたします。猟犬は主人の馬がいることに気づき、主人が帰ってきているのだと思いました。声も聞こえてまいりましたので、おぼつかぬ足どりながらもお出迎えに飛んで出て、両の前足を主人の胸にかけたのでありますが、主人のほうは猟犬が息子を殺したと聞かされて胸も張り裂けんばかりでしたので、剣を引き抜くがはやいか、ただちにその首をはねてしまったのでございます。

従者の一人に首をゆだね、広間に上がってゆりかごの方に目をやった彼は、ゆりかごが血だらけになっていて、あたり一面もまた血だらけなのを目のあたりにいたしました。その場に駆け寄った主人は、三つにちぎれた蛇の体があるものですから、これは一体どうしたことかといぶかしく思ったのでした。近寄って、ひっくり返ったゆりかごを見てみますと、そこには赤ん坊の無事な姿があったのでございます。そこで彼は奥方や従者たちを呼んでこの驚くべき出来事を見せました。彼らは蛇を見ると、事の真相は猟犬が坊やのために蛇と戦って坊やを守ってくれたのであったのを悟ったのでありました。そこで主人は奥方に申しました。「奥よ、そなたのせいで私は犬を殺してしまった、そなたの坊やの命を救ってくれたのに。そなたの言葉を信じた私はおろかなことをしてしまった。だからよく聞いておくれ、そなたの言葉を信じてやってしまったことで私に償いの苦行を科す者は誰もいないであろうから、私が私にそれを科そうと思う。」彼は腰を下ろして靴を脱ぎ、長靴下の足先を切り捨て〔て素足となり〕ますと、妻からも、また己れのもうけた子供からも目をそむけつつ屋敷をあとにして、猟犬を殺してしまった懊悩のゆえの流浪の旅に出たのでございます。

ここで賢者バンシラは皇帝に言った。「陛下、もしも陛下がお妃さまの言われるがままに、われら臣下の者の建言も請わずに御子息の処刑を断行せられますならば、猟犬ゆえにあの騎士の身に起きたのと同じことがかならずや陛下のおん身にも降りかかることでありましょう。」

皇帝は仰せられた。「わが首にかけて申すが、神のご加護あらば、そのようなことにはならずすむであろう。本日のところはあれを生かしておくゆえに。」

賢者バンシラは言った。

「陛下、五百たび御礼を申し上げます。さもなくば万民が陛下を憎みかつのろい奉ることでございましょうから。」

刻限も遅くなって、宮廷の人々は退き、城壁の門は閉じられた。皇帝は妃の部屋に入った。思い通りにならなかったために妃は不機嫌であった。皇帝はお尋ねになった。「妃よ、いかがいたした？」

妃は言った。「陛下、わたくしはくやしくてなりませぬ。わたくしのことなどはどうでもよろしゅうございますが、陛下がひどい不名誉とひどい恥辱をこうむることになりますからでございます。こんなことを申し上げます訳をお聞きください。それは陛下が息子と呼んでおられるあの悪魔のたくらみによるのでございます。あの者は陛下を追い落として亡き者にせんがためにやってきたのです。体をなでられているうちに捕まってしまったあの猪に起ったのおなじことがきっと陛下のおん身にも降りかかるにちがいありません。」

皇帝は仰せられた。「妃よ、どのようにしてその猪が体をなでられているうちに捕えられたのか聞かせるがよい。」

「陛下、かしこまりました。」

[12] 此の所、妃が語る [妃の語る第3話 猪 (aper)]

昔この国に広くてみごとな、木の実も狩りの獲物も豊富な森がありました。その森の奥には一頭の猪が住んでおりまして、これは大きくて強くて獐猛でありましたから、森のその場所に踏み込む勇気のあるものはおりませんでした。その森の真中には一本のななかまどの木がありまして、熟した実をたくさんつけておりました。猪は毎日一度やってきてはその実で腹を満たしていたのです。

さてある日のことですが、一人の猟師が獲物をしとめそこないまして、[獲物は] 森の奥に逃げ込んでしまったのです。その猟師は、いま申しました場所まで [獲物を追って] きたのでありますが、ななかまどの木を目にいたしますと、落ちて実が欲しくてたまらなくなりました。彼は身をかがめて拾い始め、懐 [の片方] を一杯にいたしました。懐のもう片方も使って詰め込もうとしておりましたまさにそのとき、例の猪があらわれたのです。猟師は猪が近づいてくるのを見ると、無理もないことながら恐れおののきまして、逃げようとしたのでありますが、猪が余り近くまで来ていたものですから動くに動けず、恐怖のあまり進退窮まりました。とそのとき、彼はななかまどをふりあおぐがはやいか、その木によじ登ったのでございます。猪の方はと申しますと、ななかまどの木の下までやって参りましたものの、いつもと違って実があまり落ちていないのを不思議に思いまして、上を見上げて猟師の姿に気づいたのでございます。すると猪は唸り出し、歯をかみあわせてぎしぎし鳴らすや、両の前脚を地面に突っばって牙でななかまどの木をどんと突きましたので、木は上から下まで大揺れに揺れて、樹上の男は幹が真っ二つに裂けるかと思ったほどでありました。

猪は腹を空かせていたのでした。猟師は上から見おろして猪が腹を空か

せていることがわかりましたので、懐に手を差し入れてななかまどの実を下に落としますと、猪はさっそく食べ始めました。食べつづけているうちに猪はうとうとしだしました。これを見た猟師は、木の上から地面すれすれまで降りていきまして、片手で枝をつかみ、もう一方の手で猪の体をなで始めたのでございます。

猪は恍惚として、まず二本の後ろ脚を折り、ついで二本の前脚を折りました。男が枝をしっかり握ってまず猪の体をなで、それから今度は腹に手をあててなでさすりますと、猪はころりと横たわりました。男はなで続けます。猪は目を閉じて眠り込んでしまいました。

男は猪の頭に上着をかぶせると、左手で念入りになでさすり、そして短刀を鞘から抜き放ちました。猟師は力が強く腕に覚えがありましたから、ためらったりはいたしませんでした。短刀をふりあげ、心臓をねらって胴の真中に突き刺しました。彼は続けてもう一度短刀をふるって心臓を刺し貫いて、ついに猪の息の根をとめたのです。これだけのことをやってのけるとさすがの猟師も精根尽き果てまして、獲物を切り分けて持ち帰ることもせずにその場をあとにしたのでございます。[第3話 猪(aper) 終]

愛知学院大学語学研究所規程

(名称・所属)

第1条 本研究所は愛知学院大学語学研究所（以下「本研究所」という）と称し、愛知学院大学教養部に設置する。

(目的)

第2条 本研究所は建学の精神に則り、外国語の総合的研究につとめ、外国語教育の向上を目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は下記の事業を行う。

- (1) 外国語及び外国語教育に関する組織的研究
- (2) 外国語教育活動の調査と分析
- (3) 研究成果の発表及び調査・分析の報告のための研究所報の刊行
- (4) その他設立の目的を達成するに必要な事業

(組織)

第4条 本研究所の所員は本学教養部語学担当の専任教員から成る。

(役員・任期)

第5条 本研究所に次の役員をおく。

所長1名、副所長1名、委員若干名

任期はいずれも2ヵ年とし、再任を妨げない。

(所長)

第6条 所長は、所員会議の議を経て、学長これを委嘱する。

- 2 所長は本研究所を代表し、運営全般を統括する。

(副所長)

第7条 副所長は所員会議の議を経て、所員の中から研究所長これを委嘱する。

- 2 副所長は所長を補佐する。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会をおく。

- 2 運営委員会は、所長、副所長、委員から成り、所長は運営委員長を兼務する。運営委員会の規程は別に定める。

(所員会議)

第9条 本研究所に所員会議をおく。

- 2 所員会議は全所員をもって構成し、その過半数の出席をもって成立する。
- 3 所員会議は所長が召集し、その議長となる。但し、全所員の4分の1以上の請求があった場合、その請求より2週間以内に所長は所員会議を開催しなければならない。

(経費)

第10条 本研究所の経常費は愛知学院大学の年間予算をもってこれにあてる。

(規程の改正)

第11条 本規程の改正は、全所員の3分の2以上の賛同をえ、教養部教授会の議を経て、学長の承認をうることを要する。

附 則

本規程は、昭和50年4月1日より施行する。

本規程は、平成11年2月12日より改正施行する。

『語研紀要』投稿規定

(投稿資格)

第1条 本誌に投稿する資格をもつ者は、原則として、語学研究所所員とする。

(転載の禁止)

第2条 他の雑誌に掲載された論文・研究ノート・資料・翻訳は、これを採用しない。

(著作権)

第3条 本誌の著作権は当研究所に、個々の著作物の著作権は著者本人に帰属する。

(インターネット上の公開)

第4条 本誌はインターネット上でも公開する。

(原稿の形式)

第5条 投稿に際しては、つぎの要領にしたがって、本文・図および表を作成する。

- (1) 原稿は、原則として原稿用紙または、フロッピー入稿とする。(フロッピー入稿の場合プリントアウトを一部添付する。)
- (2) 本文の前に、別紙で、つぎの3項目を、この順序で付する。
 - (i) 題名および執筆者名
 - (ii) 欧文の題名および執筆者名
 - (iii) 論文・研究ノート・資料・翻訳の区別
- (3) 原稿の欧文箇所は、手書きの場合、すべて活字体で書く。
- (4) 図は、白紙または淡青色の方眼紙を墨書し、縮尺を指定する。
- (5) 写真に、文字または印を入れるときは、直接せずに、トレーシング・ペーパーを重ねて、それに書き入れる。

(6) 原稿は、原則として、刷り上り18ページ（和文で約16,000字）以内とする。

(原稿の提出)

第6条 投稿希望者は、運営委員会の公示する提出期限までに、同委員会に提出する。締切日以降に提出された原稿は、掲載されないことがある。ただし、申込者が、所定の数に達しないか、または、それを超える場合には、同委員会がこれを調整する。

(原稿修正の制限)

第7条 投稿後の原稿の修正は、原則として、これを行わないものとする。やむをえない場合は、初校において修正し、その範囲は最小限にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されたときは、追加費用を個人負担とすることがある。

(校正)

第8条 校正は、原則として、第2校までとし、本文については執筆者がこれに当り、表紙・奥付その他については、編集委員がこれに当る。

(抜き刷り)

第9条 抜き刷りは、論文・研究ノート・資料・翻訳各1篇につき、30部までを無料とする。これを超える分については、実費を執筆者の負担とする。

付則

1. 本規定の改正には、語学研究所所員の3分の2以上の賛成を要する。
2. 本規定は、平成3年4月12日から施行する。
3. 本規定は、平成13年4月27日に改正し、即日施行する。
4. 本規定は、平成14年5月9日に改正し、即日施行する。
5. 本規定は、平成14年10月15日に改正し、即日施行する。

申合せ事項

- ◇ 第1条の「投稿する資格をもつ者」には、運営委員会が予め審議した上で投稿を認めた非所員を含むことができる。
- ◇ 運営委員会が、非所員の投稿の可否を審議対象とするのは、以下の場合である。
 - (1) 語学研究所所員との共同執筆による投稿
 - (2) 語学研究所所員が推薦する本学教養部の外国語科目担当非常勤講師（本学非常勤講師と学外者の共同執筆も含める）の投稿
 - (3) 語学研究所の講演に基づいて作成されたものの投稿
- ◇ 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、運営委員会を開いて投稿の可否を決定し、その投稿希望者に通知する。
- ◇ 投稿原稿の掲載に際しては、次のようにする。
 - 上記(1)(3)の場合は原稿料および抜き刷りは1篇分とする。
 - 上記(2)の場合は抜き刷りは1篇分とし、原稿料は支払わない。
- ◇ 第4条に関連して、本誌は国立情報学研究所が電子化した上でインターネット上に公表し、利用者が無料で閲覧できるものとする。
- ◇ インターネット上の公開は第28巻第1号から適用する。

語学研究所第18回講演会

日時：平成26年6月20日(金) 17時00分～19時00分

会場：2108教室

講師：池内 敏 名古屋大学文学部教授

演題：「近世アジアにおける漂流民について」

語学研究所第29回研究発表会

日時：平成26年11月21日(金) 17時00分～18時30分

会場：2号館 4階会議室

講師：石川 一久 教授

演題：「英語句動詞の歴史的統語分析」

執筆者紹介（掲載順）

- 近藤 勝 志（本学教授・英語担当）
清水 義 和（本学教授・英語担当）
石川 一 久（本学教授・英語担当）
堀田 敏 幸（本学教授・フランス語担当）
Daniel Dunkley（本学外国人教師・英語担当）
森岡 稔（本学非常勤講師・英語担当）
安藤 洋 平（本学非常勤講師・英語担当）
村元 麻 衣（本学非常勤講師・ドイツ語担当）
橋本 博 美（本学非常勤講師・英語担当）
長谷川 洋（本学非常勤講師・フランス語担当）

語学研究所所員一覧

英語

- 石川一久
- 大島直樹
- 近藤勝志 (副所長)
- 近藤 浩
- 佐々木 真
- 澤田真由美
- 清水義和 (委員)
- 田中泰賢
- 都築正喜
- 藤田淳志
- 山口 均
- 吉井浩司郎
- 鷲嶽正直
- R. Jeffrey Blair
- Daniel Dunkley
- Glenn D. Gagne
- Jane A. Lightburn
- Russell L. Notestine
- David A. Pomatti

ドイツ語

- 糸井川 修 (委員)
- 福山 悟

中国語

- 勝股高志
- 朱 新健
- 前山愼太郎 (委員)

フランス語

- 稲垣正巳
- 尾崎孝之 (所長)
- 堀田敏幸 (委員)

韓国語

- 文 嬉眞 (委員)

(○印は本号執筆者)

編集後記

『語研紀要』第40巻第1号（通巻第41号）ができあがりました。

「論文」7編、「研究ノート」1編、「翻訳」3編の構成で、合計11編の作品を掲載することができました。それぞれの作品には、執筆者の先生方の日頃の研究・教育の成果が反映されていると思います。

外国の言語とその上に構築される外国の文化に触れることで、自らの言語とその上に成り立つ自らの文化を、より広いそしてより深い視点から、展望することができるでしょう。

ご一読下されば幸甚に存じます。

(尾崎孝之 記)

平成27年1月20日 印刷 (非売品)
平成27年1月30日 発行

愛知学院大学教養部 語学研究所 所報
語研紀要 第40巻第1号 (通巻第41号)
編集責任者 所長 尾崎孝之

発行所 愛知学院大学 語学研究所
〒470-0195
愛知県日進市岩崎町阿良池12
Tel.0561-73-1111～5番

印刷所 株式会社あるむ
名古屋市中区千代田3-1-12
Tel.052-332-0861(代)

CONTENTS

ARTICLES

- The Oversight in Tobias Smollett: *Roderick Random*
..... Katsushi KONDO (3)
- Junnosuke Yoshiyuki's *Oedipus Inferiority Complex*
& Haruki Murakami's *Anti Oedipus* Yoshikazu SHIMIZU (19)
- On the Structure of Old English Verb-Particle Constructions
..... Kazuhisa ISHIKAWA (49)
- Beckett, jardin labyrinthique Toshiyuki HOTTA (77)
- Language Assessment Literacy
in Theory and Practice Daniel DUNKLEY (103)
- Nathaniel Hawthorne's *The House of the Seven Gables*
and Marshall McLuhan's "Global Village" Minoru MORIOKA (119)
- The Significance of *Écriture*
in E. M. Forster's *Maurice* Yohei ANDO (141)
- Vorteile und Herausforderung bei Internationalisierung und
internationaler Kooperation auf der Grundlage meiner
Erfahrungen im Deutschunterricht Mai MURAMOTO (165)

TRANSLATIONS

- PART II 『愛と嘘っぱち』、Musical "Love and Barefaced Lies"
by Kanome Yuki Translated by Yoshikazu SHIMIZU (171)
- The Translation of Tess Gallagher's *European Journal*,
April 5—June 26, 1987 (Part 1) Hiromi HASHIMOTO (207)
- Arbor, Canis, Aper: Japanese Translation of
The Seven Sages of Rome (French Version A) Yô HASEGAWA (231)

FOREIGN LANGUAGES & LITERATURE

Vol. 40 No. 1 (WHOLE NUMBER 41)

ARTICLES

- The Oversight in Tobias Smollett: *Roderick Random*
..... Katsushi KONDO (3)
- Junnosuke Yoshiyuki's *Oedipus Inferiority Complex*
& Haruki Murakami's *Anti Oedipus* Yoshikazu SHIMIZU (19)
- On the Structure of Old English Verb-Particle Constructions
..... Kazuhisa ISHIKAWA (49)
- Beckett, jardin labyrinthique Toshiyuki HOTTA (77)
- Language Assessment Literacy
in Theory and Practice Daniel DUNKLEY (103)
- Nathaniel Hawthorne's *The House of the Seven Gables*
and Marshall McLuhan's "Global Village" Minoru MORIOKA (119)
- The Significance of *Écriture*
in E. M. Forster's *Maurice* Yohei ANDO (141)
- Vorteile und Herausforderung bei Internationalisierung und
internationaler Kooperation auf der Grundlage meiner
Erfahrungen im Deutschunterricht Mai MURAMOTO (165)

TRANSLATIONS

- PART II 『愛と嘘っぱち』、Musical "Love and Barefaced Lies"
by Kanome Yuki Translated by Yoshikazu SHIMIZU (171)
- The Translation of Tess Gallagher's *European Journal*,
April 5—June 26, 1987 (Part 1) Hiromi HASHIMOTO (207)
- Arbor, Canis, Aper: Japanese Translation of
The Seven Sages of Rome (French Version A) Yô HASEGAWA (231)

Published by Foreign Languages Institute

AICHI-GAKUIN UNIVERSITY

Nagoya Japan, January 2015